

# ダライ・ラマの秘宝

作 夏之始

## 香港

薄灯りのついた暗い会場の中で、壇上の講演者とスクリーンにのみ照明が当たり、聴衆は、マイクロホンから流れる英語の講演に聞き入っている。ここは、香港島の湾仔（ワンチャイ）にあるコンベンションセンターの講演会場のひとつである。会場の入口には、「文化人類学国際フォーラム」と英語で書かれている。講演者の松田学は、スクリーンに映し出されている資料を示しながら聴衆に語りかけている。

「ダムサラにおけるチベット文化の展開は、真にチベットの伝統文化を継承しているのか、という命題であります。西洋社会から見た見方と中国政府の見解が異なるのは当然であります。」

ダムサラの人々は、我々は、何も抑圧を受けず、昔からの伝統をそのまま継承しているが、中国支配のもとにあるチベット文化は、中国化されたもので真のチベット文化ではないと主張します。

一方、ダムサラの伝統芸能は、世界中で講演が続けられていますが、チベット難民である彼らには、彼らの置かれた立場をアピールするという政治的意図があるのは否めないわけでありまして、……」

松田学は、東京文化大学の文化人類学科の准教授である。今日は、国際フォーラムに参加して、講演をしている最中である。テーマは、「北インドおよびチベットの伝統文化の研究」である。聴衆は、二百人ほどであろうか。国際フォーラムと言っても、地元香港人、中国人らしき人々が大半である。フォーラムは、二

日間に渡って行われ、今日は、その最終日である。

松田の予定の講演が終わり、会場全体に照明がつき、質疑応答に入った。数人が手を挙げる。司会者が、その中のひとりに質問を促した。

「あなたの話は、総花的だったが、あなた自身は、ダムサラの政権をどう思っているのでしょうか？ 今の伝統文化は、政権の意思を色濃く反映しているとあなたも言われました」

文化人類学というのは、人間の生活様式の具体的なありかたを研究する人類学の一分野であるが、民族、社会間の問題の観点から議論することもある。ダムサラというのは、チベット亡命政権が置かれている北インドの町の名前である。

「今日は、ダムサラにおける伝統文化の継承も、継承者の年代が

変わりながら、少しずつ変化していることをご説明したわけでありまして、ダムサラの政権についての政治的な見解は、文化人類学の範疇ではないと思っております」と答えた。

「答えも総花的ですね」

そう言って、その人は、それ以上質問しなかった。

また、他の人がマイクを握って、

「あなたは、最近の西藏地方の伝統文化は、真のチベット文化ではないと言ったが、具体性がないのではないか？ そのように言うなら、もう少し具体的な根拠があるのではないかと思うがいかがでしょうか？」と言った。西藏地方というのは、中国のチベット自治区のことである。

松田は、「まいったな」と思いながら、

「これは、私のひとつの見方でもありますが、いろいろ現地で聞

いた話を紹介させていたただいた、と考えていたただきたいと思  
います」と答えた。

「ということは、つまり、あなたのインタビューが偏った人々に  
向けられていたということもある、ということになりますね」と  
突っ込んできた。

松田は、これ以上、ここで議論することは避けようと思って、

「そうですね。あなたの言われる可能性も否定はしません。貴重  
なご意見を参考にさせていただき、今後の研究に生かしてい  
きたいと思えます」と言って、この質疑応答を終えた。

松田は、講演を終えて、聴衆の中の通路脇の席についた。隣の  
席から、

「先生、たいへんでしたわね」

日本語で声をかけてきた女性がいた。声の主は、高嶋恭子。松田の研究室の助手をしている。今回のフォーラムでは、彼女も講演者のひとりで、すでに昨日、講演を終えていた。

「ああ、今回の僕のテーマから、こういう展開は十分に想定できていたわけだから、もう少し対応を考えておくべきだった。」

「今回は、香港で講演するには、難しいテーマだったですね」

「ああ、でも香港で敢えてやるという意味合いもあると思って、ここに来ただけだね」  
そう言ったとき、すぐ横の通路側に男が立っているのに気づいた。

「Professor Matsuda」

男は英語で話しかけてきた。

「今日の予定が終わった後、少しお話しをさせていただけない

でしようか」

松田は、男の顔を下から見上げながら、先ほどの講演に関する質問だろうと思った。

「もちろんかまいません。終わったら声をかけてください」

「ありがとうございます。では、受付の横で待っています」

そう言って後方に去っていった。小柄で色黒な男であるが堂々とした言い方であった。松田は、中国南部の人かなと思った。恭子も、男が松田に話しかけるところを見ていた。

「先生、あの人、質疑応答で最初に質問した人よ」

「よくわかったね」

「あの人、質問のときは、隣の通路近くにいたから、横顔がよく見えたのよ」

指さした隣の通路方向を見ると通路側の席が一つ空いている。



そのとき、照明が落ちて次の講演が始まった。

今回のフォーラムの講演予定がすべて終了して、松田は恭子と一緒に、男から言われた受付の横に立っていた。会場からは、続々と人が出て来て、知り合いの早稲田大学の豊島准教授らが、「松田さん、おもしろいテーマでよかったですよ」などと声をかけてくる。

しばらく待っていたが、先ほどの男は現れない。

「確かに受付の横と言っていたがどうしたのかな」

「自分で言うっておいて、来ないというのも変ですね」

恭子も首をかしげている。

すると、受付の女性がカウンターのなかから声をかけてきた。

「Professor Matsuda?」

「はい、そうですが、」

「少し前に、張様からこれを渡してほしいと言われていました」  
松田が歩み寄ると、小さい封筒を差し出した。

「僕宛ですか、ありがとうございます」

誰からだろうと思いつながら封筒を開けると、中にメモが入っていた。

『松田教授様、都合ができて、今外出しなければなりません。申し訳ありませんが、今夜、ザペニンシユラのバーで一〇時にお会いできないでしょうか。ぜひお願いします。張春雷』と走り書きで書かれていた。先ほど会場の中で、後で話をしたいと言った男だと分かる。

「仕方ないね、何か急用ができたのだろう。ザペニンシユラは我々の泊まっているホテルだから都合がいいね」

「しかし、何か私たちのホテルを知っているみたいで気味悪くないですか」

恭子が、メモを覗きながら不審そうにする。

「偶然ではないかな。それに、それほど気味悪いことでもないだろう」

「とにかく今回のフォーラムは全部終了した。君の講演もまずまずだったし、ホテルに帰って、どこか香港料理でも食べに行こう」

「いいですね。ありがとうございます」

### 香港九龍

ホテルザ・ペニンシユラは、九龍の先端にあり、夜は対岸の

香港島の高層ビル群の夜景が一望できる人気のホテルである。フォーラムの後、松田は恭子を誘って、九龍公園の近くのレストランで香港料理に舌鼓を打った。しかし、レストランは、満席状態で食事の中に、中国語や広東語が騒音のようにふたりを覆っていて、大きな声で話さないと会話ができないほどであった。店を出てから、松田は、「やれやれ」と言いながら、

「少し静かなところでもう一杯やるかね」と恭子を誘った。

「はい、ありがとうございます。静かなところがいいですね」

「では、約束より少し早いですが、ホテルのバーに行ってみよう」

ふたりは、ザ・ペンシユラの一階の奥にある『ザ・バー』に  
来ていた。

松田学は、ちょうど四十歳になるが、いまだ独身である。専門は、中央アジアの人々の生活様式、風習などを対象とした人類学で

ある。この分野にのめり込んで、中央アジアをうろついている間に四十を迎えてしまったというのが、実情である。文化人類学では、幅広い文化を通して人類あるいは人間の進化を考える。松田が注目しているのは少数民族である。中央アジアは少数民族のつぼである。極論を言くと、今の民主主義は、多数派が少数民族の話や話を聞こうとせず、少数民族を押し込める道具と化している現状がある。少数民族の意思は多数派に握りつぶされ、少数民族の人は抑圧感の下で暮らしているが、たまにそれが爆発し過激な行動を起こすことがある。多数派はそれをテロと言って、ますます少数民族を抑圧するという悪循環がいたるところにある。しかし、少数民族が寄り集まって平和に暮らしているところも中央アジアにある。そこに人類の未来に対する答えがあるのではないかと思っている。

高嶋恭子は、インド、ネパール、スリランカを中心とした生活、文化を研究している。小柄な美人で、二十九歳になる。学生時代にインドを旅行して、インド人の様々な考え方、宗教観に見せられ、同じ大学の英文学科を卒業してから松田のところに来た変わり種である。インドには現在、法律で禁止されているとはいえ、カースト制度が色濃く残っている。カーストは、古代アーリア人が原住民を支配するために四つの身分制度を作ったことが始まりだとされている。つまりこの場合は、少数派が多数派をコントロールする道具として身分制度が使われている。大多数の下層の身分の人は、これが改善することはないと諦めているが、身分間のもめ事や事件は年に何万件も発生しているのが現状である。現在では、これを打破するには金持ちになるしかないと考ええる若者であふれている。一方でそうした物質文明からの脱却

として古代の仏教、ヒンズー教への回帰を考える人々も出てきており、その中から未来の生活様式が考えられないかと思っ  
ている。

松田は、恭子に対して好感以上のものを持っているのだが、いつも研究室で顔を合わせていることもあり、逆に、今の子弟関係を維持しなければいけないとも思っている。恭子も松田のことが好きなのであるが、なかなか態度で示すほどの勇氣はない。

時間が早いせいか、バーには、中国人の三人連れが、奥のテーブル席で何やら静かに話をしているだけで他に客はいない。三人は、北京語で話をしているのが聞こえる。松田は、ある程度の北京語は理解できるが、今はその内容に興味はないし、聞こうとも思わない。松田と恭子は、カウンターに隣り合って座り、コニヤックとマティーニをそれぞれ注文した。

「チベット人の話を中国人の前で話すのは、一定の勇氣が必要なのは分かっていたが、改めて中国人の反応は厳しかったな」

「そうですよ。中国政府としては、最も外国人に触れてほしくない点のひとつです。それを、敢えてやろうとしたのですから、」  
「しかし、他にもチベット人やウイグル人を取り上げた人もいたよね。でも、彼らは中国政府よりの見方に終始していたかな」  
「香港とは言え、ここは中国です。そうしないと後で、何を言われるか分かりません」

フォーラムのことを振り返りながら話はずんでいる。

二杯目のコニヤックとマティーニを注文したとき、松田は、後ろから肩を軽くたたかれた。

振り向くと、小柄な男が立っている。

「Professor Matsuda、来ていただき、ありがとうございます」



会場で話しかけてきた男であり、また封筒のメモに張春雷と書いてあった男だと分かった。松田の隣の椅子に座りながら、

「会場では失礼しました。急に用事ができて、わざわざここまでご足労をお願いしました」

「かまいませんよ。僕たちは、ちょうどこのホテルに泊まっているのですから」

「ありがとうございます」と何度も礼を言った後、

「先生のことは、他の人たちからも聞いていまして、チベット人に理解のある方だと存じています」と言った。

「はい、僕はチベットも含めた中央アジアの生活、文化を研究しています。チベットにも何度も行っています」

「そこで先生にお願いがあるのですが、」

そう言って、張春雷は、鞆から厚手の小さい封筒を取り出した。

とその時、奥にいた三人連れの中国人が松田たちに向かって歩いてきた。

張春雷は、それに気づいて「はっ」と息を飲んだ。

「これを、日本のガンデンポタン事務所のヤマ・ツェリンに渡してください。絶対にお願ひします」

咄嗟に、早口で言ったかと思うと、松田の膝もとに小封筒を押し込み、素早く席を立てて走りだしていた。これを見た、三人連れの中国人も、張を追いかけて走り出した。張と三人の男は、バーを出て多くの人々が行きかっているロビーを走り抜けていくのが見えた。

松田と恭子は、啞然とする以外になかった。

「何がどうなっているのよ」

恭子は、暴漢に襲われたように青ざめている。松田は、張が言っ

た言葉を思い返した。

「確かガンデンポタン事務所のヤマ・ツェリンと言っていたな」  
「ガンデンポタンってなんですか？」

「ガンデンポタンというのは、ダライ・ラマがインドに亡命した後、後に名乗っている亡命政府の名前だ。その事務所が東京にもあるのだよ」

松田は、チベットの調査のために何度か事務所を訪ねていた。ガンデンポタンを正式に認めている国はないが、パリ、ロンドン、ニューヨークなど世界の十二か所に代表事務所を置いている。その中のひとつが東京にもあるのである。

張が置いていった封筒が、そのまま膝の上にある。封筒を持って、立ち上がりながら、

「今のことは、少し考えてみる。明日には、チエックアウトして

帰国だ。とりあえず部屋に戻ろう」と恭子を促した。

松田は、部屋に戻って、張から預かった封筒を開けてみた。

中には、USBメモリーと書類が一枚入っていた。書類には、ガンデンポタン事務所の住所と電話番号が書かれていた。松田は、考えをめぐらした。

—これをなぜ見も知らない自分に渡したのか。

—こちらは、張春雷のことを全く知らないが、張は、自分のことを知っていたようである。

—確かに、何度か東京のガンデンポタン事務所を訪ねたことはある。しかし、その中にヤマ・ツェリンという人は思い出せない。

—このUSBには何が入っているのか。

自分に渡したということは、見られることも覚悟の上だろうと勝手に考えて、パソコンを開いてUSBを差し込む。中身を開くと、二つのファイルがあり、一つは「Shaolin」、もうひとつは「Meteor」とあった。しかし、やはり二つともセキュリティが掛かっており、開けない。当然であろう。他にいろいろ考えても、何か思い当たることがあるとは思えなかった。とりあえず、帰国したら、ガンデンポタン事務所を訪ねてみようと思った。

次の朝、松田は、恭子と時間を合わせて、チエックアウトカウンターに向かった。カウンターで「松田です」と言ってカードキーを差し出した。それを待っていたかのように、二人の横から、「松田教授ですか？」と男が広東語で話しかけてきた。

二人連れの男が、松田の顔を見ながら立っている。ふたりとも水

色の半袖シャツである。

「そうですが、」北京語で答える。

「私は、香港警察の潘志明です。少しお聞きしたいことがあるのですが、お願いできますか」

二人のうちのひとりが、北京語で「シヤンカン・ジンチャ（香港警察）」と言ったのが聞こえた。

松田は、頭が白くなるほどびっくりして、

「えっ、香港警察が何の用ですか」

そう訊き返したが、同時に、昨夜のバーでの出来事を思い出していた。

「お手間は取らせませんのでお願いします」

強い口調で言って、付いてくるように促している。

恭子は、何が何だか分からず、やりとりを見ている。松田は、

彼らが香港警察で、どうも昨夜のことを聞きに来たらしいと話した。話を聞いて、びっくりして、また青ざめている。

松田は、これは抵抗しても無駄だなと思い、恭子にも従うしかなさそうだと話した。チェックアウトした後、ふたりは潘ともう一人の警官に促されてパトカーに乗った。パトカーが動き出してから、松田は、

「僕たちのフライトは、ちょうど正午ごろの便です。間に合わないかと困ります」

取り調べの結果次第で、このまま留め置かれるのではないかと心配になっていた。

「大丈夫と思います。終わったら空港までお送りします。もし間に合わなかったら、フライトの変更を手配させます」

二人を安心させるように潘志明が応え、少し不安が和らぐ。

連れていかれた警察署は、ザ・ペニンシユラから十分ほどのところにあつた。やたらとエアコンの利いた会議室に通され、机をはさんで、二人の警官と向き合った。

「実は、昨日の夜、人が殺されたのです。その殺された人とあなたたちが、会っていたようだと聞きました、話を伺うことにしたのです」

取り調べの要件は殺人事件だと言つたのだ。

「ええっ、殺された？」

松田は、びっくりして自分でも顔がこわばれるのが分かつた。

「殺されたのは、張春雷というようです。死体は、ザ・ペニンシユラから近い琉士巴利道と海岸の間の工事現場にありました。死体には、刃物で刺された痕がありました。この男です」



死体の顔写真を松田の目の前に差し出した。

恭子は、まだ何が何だか分からない。松田が、昨夜の張春雷という男が殺されたらしいと説明する。

「ええっ！」

びっくりして小さく叫び声をあげたが、それでも恐る恐る写真をのぞき込む。

「ああ、確かに昨日の人みたいね」

「やはり、ご存知でしたか」

「昨夜、ザ・ペンシユラのロビーで、もめ事があったとホテルから通報がありました。今朝、ホテルで聞いたところ、もめていたうちのひとりだと分かったのです。そして、この男が、バーであなたたちと会っていたという証言があったのです」

松田は、自分らは、東京文化大学のもので、香港の国際フォー

ラムに来たこと、フォーラムの会場で声をかけられて、ホテルのバーで待っていてほしいと言われたこと、バーで待っていたら、張春雷という男が現れて彼が話をし出す間もなく、三人の男が向かってきて、張を追いかけてバーを出て行ったことを、順を追って話した。潘の隣の警官が、ひとつひとつメモをとっている。なぜか封筒を預かったことは話さなかった。

「で、張春雷という男と先生はどういう関係なのですか」

「僕の講演のときに、質問をした人なのですが、以前に会ったこととはありません。ですから、僕の講演について、さらに話をしたいのかなと思いました」

「先生は、どういう内容の講演をされたのですか」

「僕の専門は、中央アジアの文化なのですが、今回は特に、チベットの伝統文化について話をしました」

「それで、彼は何を質問しましたか」

「ダムサラの政権についてどう思うかと質問されたのですが、このフォーラムは、文化の研究についてであって、政治についてコメントできませんと答えました」

「では、ホテルのバーで彼は、何を言ったのですか」

「互いに挨拶をしていたら、突然、三人の男が彼を目がけて迫ってきて、そのまま追いかけて出で行ったのです。ですからどんな用事なのか聞いていません」

「この男は、パスポートを持っていたのですが、アメリカのパスポートなのです。本当に心当たりはないのですか？」

張春雷がアメリカから来たことを匂わせ、不審そうな顔をする。

「そうなのですか。と言われましても初対面の僕らには、何も心当たりはありません」

さらに、恭子にも同じようなことを英語で聞いた。恭子も流暢な英語で似たような話をした。その後、二人は名刺を出させられるとともに、自宅の住所と電話番号を訊かれた。

「お二人から話を聞くのは以上です。ただし、何かありましたら、いただいた連絡先に連絡させていただきます」

今日の取り調べは終わったと言われても、松田らとこの殺人事件の関係を日本まで電話してくるかもしれないと思うと気持ちはずれない。

それでも、二人とも一時間ほどの事情聴取を受けた後、警察署を出ると、やっと解放されたという解放感が広がった。

「やれやれ、なんとか無事に日本に帰れそうだな」

恭子に向かってほっとした表情で言ったものの、昨日会った男が殺されたと言うではないか。えらい危ない事件に巻き込まれ

て、この先災難が及ばなければいいのだがと、思わざるを得ない。

「ほんとうに、どうなるかと思ったわ。それにしても、あの人殺されたのね」

恭子も、バーで会った時の張春雷の顔を思い浮かべて、本当に悲しそうな顔をした。

### 東京のガンデンポタン事務所

松田は、香港から帰って、大学の講義やその講座の準備、日本の学会の仕事などに忙殺されていた。香港警察で取り調べを受けたことと、香港で預かった封筒のことは、頭の片隅には残っていたのだが、頼まれた連絡先に何も連絡しないまま十日あま

りが過ぎていた。そんな日の午後、恭子が研究室に入ってきて、「先生、香港の警察から何か言ってきましたか？」と尋ねた。「いや、あのまま何も言っていない。事件はどうなったかな」少し他人事のような返事をする。

「でも、あの時、先生は張とかいう人からUSBをあずかって、それをガンデンポタンの事務所に届けてくれと言われたのですよ。まだ何もしていないのですか？」

恭子が呆れた顔で訊く。

「連絡しないといけないと思う反面、何か面倒なことに巻き込まれるのではないかとも思っただけでもないのですか？」

「でも、あの人は、それを先生に託して亡くなったのですよ。届けるだけでもしないといけないのではないのですか？」

棚の上の小封筒を指さした。恭子は小封筒がずっと棚の上に置

いてあることに気づいていたのだ。

「分かった、分かった。後で電話してみるよ」

ガンデンポタンの東京事務所は、世田谷にある。恭子に言われた後、松田は、世田谷の事務所に電話して、ヤマ・ツェリンという人がいるか尋ねた。確かに、その名前の人はいるが、どういう用かと聞かれた。香港でヤマ・ツェリンさんへの預かりものを持っている、と言うと「あなたは、松田さんですか」と逆に聞かれ、「その預かりものを、なるべく早く持ってきてほしい」と言われた。今忙しいので、週末でもいいかと言うと、かまわないのとのことであった。

土曜日の午後、松田は甲州街道沿いの三階立ての事務所に入

って行った。

「松田といいますが、ヤマ・ツエリンさんにお会いしたいのですが、いらっしゃいますか？」

受付の女性に來客であることを告げる。受付の女性は、当初、入ってきた松田に気にも留めず、パソコンコンに向かつて忙しそうにしていたが、「松田」という名前に反応して、大きく振り返った。

「あっ、はい、松田さんですね、聞いております。少しお待ちください」

松田の顔をよく見てから、急ぎ足で中に消えた。しばらく受付のカウンターで待っていると、四十代半ばと思われる大柄な男が現れ、笑みを浮かべながら寄ってきた。

「松田教授、お待ちしていました。どうぞ中にお入りください。」



ヤマ・ツエリンです」

ヤマ・ツエリンは、日本語で言っただけで廊下の中へいざなってくれた。二階へ上がる階段を登りながら、

「先生のご存知の人がお待ちしています」と意味深長なことを言った。

二階の会議室に入ると、ショートヘアの若い女性が、椅子から立ち上がった、

「松田先生、ご無沙汰しています。ラン・ソナムです」と正確な北京語で言った。

松田は、女性の顔を見るなり、啞然とする。

「ええっ、ランさん、なぜあなたがここに！」  
半ば叫ぶように言っていた。

「先生、あの時は母を助けていただきありがとうございます」

松田は、もはや預かった封筒のことなど忘れて、

「ランさん、あの後、お母さんがどうしておられるか、僕も大變気に留めていました。お元気ですか」と言うのが精いっぱいであった。

「はい、元気にしております。でも先生、もう一度私たちをお助け願えないかと思ひまして、日本に來ました」

二人の會話を聞いていたヤマ・ツエリンが、

「まあまあ、お座りください。順を追つてご説明します」  
日本語で言つて、會議室のテーブルへ促した。

「我々チベット人は、ご存知のように故郷を中国人に占領されていきます。我々は、それに屈することなく中国からの獨立を願っています。しかし、現状は、中国政府の同化政策でその希望は、たいへん難しい状況にあります。そうした中で、我々のよりどこ

ろであるチベット仏教の本流だけでも取り戻したいと思つています」と話し始めた。

松田も、ここがガンデンポタンの日本事務所であることは承知している。しかし、ヤマ・ツェリンは、続けてとんでもないことを言った。

「松田先生、先生に二年前にお助けいただいたラン・ソナムの母親は、行方の分からないゲンドウン・ニマの叔母なのです」  
松田は、もはや何がなんだか分からない。

ゲンドウン・ニマというのは、一九九五年に中国政府によって拉致された、パンチェン・ラマ十一世の実名なのである。パンチェン・ラマは、チベット仏教においてダライ・ラマに次ぐ高位の化身ラマであり、ダライ・ラマが太陽であれば、パンチェン・ラマは月に例えられる。そのパンチェン・ラマ十一世の叔母がランの

母親だというのである。

松田は、二年前のことを思い出していた。

### 二年前、チベット高原

松田は、その夏、チベットの民族文化の調査で、チベット自治区のラサにいた。チベット語で、「ラ」は仏を、「サ」は土地を意味し、ラサは、聖地という意味である。三、七〇〇メートルに位置する高原都市である。歴代のダライ・ラマの宮殿であったポタラ宮があり、この聖地を訪れるのは、チベット人のみならずモンゴル、ネパールなどの人々にとっても聖地巡礼なのである。ポタラ宮は、建築面積が一三、〇〇〇平方メートルにおよび、世界最大の建築と言われている。ただし、一九五九年にダライ・ラマがい

ンドに脱出した後は、博物館として公開されている。

八月には、シヨトウン祭というチベット最大のお祭りがあり、特にダライ・ラマの旧夏宮殿であったノ布林カ宮では、各地から集まった劇団によるチベットオペラが催される。いわば、チベット文化の祭典である。

松田は、シヨトウン祭に行く前に、博物館になっているポタラ宮を訪れて、チベットオペラ（チベット語でアチエラモという）について取材を申し込んだ。博物館も、松田が文化人類学の研究者で、以前にも何度か博物館を訪れていることを知っており、快く取材に応じてくれた。観光客とは、反対方向の廊下を進んだ先にある応接室に通されて、しばらく待っていると、対応に出てきたのは、チベット族とわかる、明るい感じの若い女性である。

「ラン・ソナムです」

差し出してくれた名刺を見ると、ラサ民族研究所・研究員とあった。

「今日は、具体的にどんな取材でしょうか？」

北京語で話してくれる。松田は、自己紹介し、取材を受け入れてもらったお礼を言った後、アチエラモに興味を持ってその取材に来たことを話した。

「今行われているアチエラモの起源と近年の動向について伺いたいと思って来ました。アチエラモは、チベットの人々の歴史感や生活感が表現されていると思っています。よろしくお願いします」

「分かりました。ただ、文化人類学の研究をされている方に、どの程度お話しすればいいのかわかりませんが、基本的なところからお話しします」と言い、続けて、

「今、言われたように、アチエラモは、チベットの古い歴史や仏教の本生譚を題材にしたものが始まりで、……」  
アチエラモの起源から説明を始めた。

ラン・ソナムは、一時間ほど手持ちの資料を見せながら丁寧に説明してくれた。説明が終わって、松田は、快く取材に応じてもらったことに深くお礼を言って、応接室を出ようとする、ラン・ソナムが、思わぬ誘いの言葉をかけてくれた。

「実は、私も、ある劇団に所属していて、午後から私たちの公演があるのですが、よろしかったら、見に来てください」

「えっ、ご自分でもオペラを演じられるのですか。それはぜひ拝見させてください」

「私たちの公演は、四時からなので、少し前にお越しください。場所をとっておきます」

「ええっ、それは、それは、ほんとうにありがとうございます」  
「いえ、私たちも、アチエラモに興味のある海外の人々に見ていただくのは光栄なのです」

松田は、再度お礼を言っつて、博物館を後にした。

ラン・ソナムによれば、アチエラモはノブリンカ宮の前の公園で行われているとのことであった。松田は公園までレンタカーで行き、駐車スペースに車を置いた後、公園に入っつていった。木々で溢れた広い公園には、たくさんの出店があり、人々は、夏の陽気を楽しんでいる。オペラは特別な舞台と客席があるわけではなく、公園の中の一角に一五メートル四方くらいスペースを観客が取り囲んで、そのスペースの中で行われる。オペラのあたりには、すでに多くの人の人だかりができていて、容易には



中に入ることができない。ラン・ソナムは、あのように言ってくれたが、これでは、指定席があるわけではないので、人と人のすき間から見るとは思えないなと思った。するとその時、後ろから声をかけられた。

「松田先生、もう少しお待ちください」

振り返ると、赤と黄色に緑の縁の装束を着たラン・ソナムがいる。

「やあ、ランさん、素晴らしくきれいな衣装で見違えてしまいました。うです。それに、すごい人ですね」

「今の公演の後が私たちの番ですので、いっしょにいらしてください」

一旦、人だかりの後ろに出て、周りを回って案内してくれた。そこには、次の出番を待っている十人ほどの人たちがいた。その中

の一人を連れて来て、私の母ですと紹介した。

「ツエリン・チュドウンです」

チベット語で自己紹介してくれる。矍鑠（かくしゃく）とした老婦人である。チベットには、家の名がなく一節目も二節目も名前であるため、親子でも違う名前を名のるのである。

しばらく待った後、ラン・ソナムらの公演が始まった。もちろん、チベット語の演劇である。松田は、劇団の控えの人たちと同じところから、間近に観劇することができた。内容は、恋愛を題材にした昔話である。松田は、最高の観客席からビデオカメラを回し続けた。黄色の花をイメージした冠をつけた村の女性が、王侯一族の王子に見初められ、まわりの人たちの反対を乗り越えて恋を成就するという話である。それにしても、黄、赤、緑、青など原色に近い色の衣装で、たいへんきらびやかな舞台である。

観衆は、場面、場面で拍手をしたり、声援を送る。アチエラモは、厳しい労働の疲れを癒す娯楽として始まったものだと言われている。観衆を楽しませる題目が選ばれ、その演出も人を引き付けるのである。

最後のフィナーレで、ランの母親がふたりの幸せを願って歌を歌う。老婦人であるが、張りのある伸びやかな歌声である。チベット特有のダニエン、トゥンカルなどの楽器が歌声を盛り上げる。じつと聞き入っていた観衆が、後半になって、「おおっ、」と言ったかと思うと、「わあっ、」と声援を送り、それまでにない拍手喝采となった。母親は、喝采に応えるようにさらにのびやかに歌い、歌声は遠くまで届いた。それを聞いてさらに人が集まってくる。ランは、母親にさっと近づき、ひとことふたこと言った後、母親を舞台から離れるように促している。母親は歌い続けよう

とする。観衆もさらに声援と拍手を送っている。一方、劇団の人たちは、さっさと道具類をしまい始めている。

そのとき、観衆の声援とは別に、なにやらざわめきのような声が聞こえた。松田は、ランにどうしたのか話かけた。

「松田先生、あなたもここから早く立ち去ってください。まずいことになります」

急いで被り物を取り、衣装の一部を脱ぐようとしている。

「えっ、どうして?」

「とにかく早く!」

「何かわからんが、僕の車が近くにある。そこまで走ろう!」

「それは、ありがたいわ。お母さん、早く!」

三人は、駐車場に停めてある松田の車に向かって急いだ。ここは、三七〇〇メートルの高地である。現地の人でも急激な運動は

危険である。速足で向かう。劇団の人も道具類を持って、急いで舞台から離れていく。そのとき、遠くに警察と思しき連中がこちらに向かつて来るのが見えた。松田は、何がどうなったのか、まったく分からないが、とにかく逃げるしかないと思った。

なんとか車にたどり着くと、二人を押し込めるように乗せ、急発進させた。車は、VWVのゴルフである。ラサの石畳の道にも頑強に対応できる。ここは、ポタラ宮から三、四キロほど西に来たところだとは分かっているが、どちらに逃げたほうがいいのか全くわからない。

「そこを右に曲がって！ 川沿いの道に出るのよー！」  
運転する松田にランが後ろで叫んだ。角を曲がったところで、どこかでパトカーのサイレンの音が聞こえた。松田は、何も考えず、ランの指示どおり全速で運転することだけに必死になった。

ラサはラサ河を挟んで、東西に伸びた街である。街の両側は、峻険な峰々が迫っている。河沿いを西に向かって、ひた走っている。さらにサイレンの音が大きくなってくる。この道は、一本道のようにある。検問にあったら、逃れようがない。

「その先を左に曲がって！」

「そしたら、河に入ってしまったよ」

「大丈夫、曲がって！」

河岸道路を折れて、河川敷の道に入っていく。サイレンの音もついてくる。広大なラサ河の河川敷の中をひたすら逃げているのである。いくら逃げても、この河川敷の中から逃げ出すのは、不可能ではないかと思った。とその時、

「もう少し行くと、浅瀬があるの。そこを渡って、対岸に出るわ」  
「ええっ、そこは、車で渡れるのか？」

「浅ければ、十分渡れるはずよ」

浅瀬の場所に近づくが、河幅は、六十メートル以上ある。しかし、選択の余地はなさそうである。松田は、スピードを落として、浅いと思われるところから水に入った。車輪が水面から消えそうである。浅瀬と言っても、少し逸れると深みにはまってしまふ恐れがある。慎重に、かつコンスタントにエンジンを回し続ける。

後ろから響いて来るいくつものサイレンの音が急に大きくなった。サイレンの音に気をとられた瞬間、ゴンヤの右前輪が、ガクツと傾いた。松田は、すかさずバックに入れて、わずかに後退させた。なんとか深みに落ち込まず済んだ。が、そのとき、パーンという音がした。警官が撃ってきたのだ。松田は、グツとスピードを上げる。ゴンヤは、そのまま水突き切った。しかし、さらに拳銃の射撃音が響き、車の後部に当たった音がした。もう松田

は、無我夢中で、対岸の河川敷を走った。幸いにも追ってきたパトカーは、浅瀬を渡れなかったのか、それ以上は追跡してこないようである。

「なんとか振り切れたようだな」

前を向いたままランに言った。

「まだ安心できないわ。とにかく急いで河川敷から出ましょう」

「道案内を頼む」

「分かったわ、とにかくラサについては危険だわ。知り合いのいるツェタンに行きましょう」

ツェタンは、ラサから南に二〇〇キロほど行ったところにあるヤールツアンポー大峡谷の中にある小さな町であるが、古代チベット発祥の地と言われるところである。七世紀にチベット



を統一したソンツァン・ガンポ王の生地でもあり、王と二人の妃、文成公主とティツイン妃にゆかりの史跡が残されている。街はずれの小高い丘の上に建つヨンブラカン宮殿からは、広大な峡谷の大自然が一望できる。

松田が、*Соня* を駆ってツェタンの町に着いた頃には、すっかり日も暮れていた。ランの案内で、三人は、露天市場の隣にある「芙蓉菜館」というレストランに入って行った。ランは、二人を連れて店の奥へと進んでいく。奥から初老の男が現れ、チベット語で、

「ラン、今日は、アチエラモの日ではないのかね。お母さんと一緒にラサに泊まっていると思ったが」と言った。

「そのはずだったのよ、お父さん、それが、お母さんがとんでもないことをして、警察に追いかけられたのよ」

「何！ それで、警察はどうなったのだ？」

「この人のおかげで、なんとかここまで逃げてくることができ  
たわ。もう追ってこないと思う」

「分かった。とにかく中に入れ」

「いずれにしても、みんな無事でよかった」

彼の妻の方を見て微笑んだ。妻のツェリン・チュドウンは、「ご  
めんなさい」とすまなさそうにしている。

松田は、チベット語が完璧ではないが、彼らのやりとりから、  
彼はランの父親で、ここは彼女の実家なのだろうと思った。自分  
のチベット語を確かめるために、二階に上がる階段を登りなが  
らランに尋ねる。

「ラン、つまりここは君の実家ということだね？」

「そうです。今日は、本当にありがとうございました。ここまで

来れば安心です」

二階のリビングには、チベット絨毯が敷かれ、長椅子と応接テーブルが置かれている。長椅子にも絨毯が敷かれ、マットが置かれている。椅子に座る前に、父親が北京語で自己紹介した。

「リンチェン・ヒチーです。ランの父親です。今日は、娘と妻がたいへんお世話になりました。ありがとうございます。どうぞ、ゆっくりしてください」

松田が椅子に座るところ見てからランに尋ねる。

「ラン、一体なにがあったのか説明してくれ」

「予定通り、ノブリンカでいつもの劇をやったのよ。劇はうまくいって、お客さんも盛り上がっていたの。そして、ファイナーレでお母さんの歌になった。予定通りに愛の成就を祝う歌だったわ。ところが途中から、ガワン・サンドルの『抵抗の歌』になったの

よ。お客さんも最初は、普通に聴いていたのだけど、だんだん、『抵抗の歌』だと分かって騒ぎはじめたのよ。そして騒ぎが大きくなって、警察がかけつけることになったのよ」

続けて、松田の車で逃げて、ラサ河の中で警察の車から発砲されたことなどを話した。ガワン・サンドルというのは、一九八九年に一二歳で刑務所に入れられた尼僧である。彼女は刑務所の中で、他の十三人の尼僧とともに、『抵抗の歌』を歌い、チベツトに自由をと叫んだ。そのため、刑期を八年延ばされ、十一年も投獄されることになったのである。

「ツェリン、お前の気持ちは分かるが、少しやりすぎたな。劇団の他の人たちのことも考えなければな。で、劇団の人たちは、どうなったのだ？」

「先ほど、連絡が取れて皆無事だと言っていたわ。でも突然、歌

が変わってびっくりしたと言っていたわ」

「本当にごめんなさい。二十年前のことを思い出したら、つい胸が熱くなってしまうたのよ。ごめんなさい。皆さんにも謝るわ」

ツエリンが口を開くと同時にしょんぼりとリンチェン・ヒチーの顔を見上げる。かなり後悔しているようであるが、松田は、この人の中にチベットの独立を求める反骨精神をすごく持った人ではないかと思わずにいらなかった。普通の初老の主婦が、警察に追われるかもしれないと分かっている「抵抗の歌」を歌ったのである。

「ツエリン、分かったよ。それより、松田先生、関係のないあなたを巻き込んでしまって、本当にすみませんでした。チベット人は、いつもは沈黙しているのですが、たまに中国人の支配に対す

る怒りが表に出てしまうことがあります。ありがとうございます。今日のは、私どもの家に泊まっていたいただいて、気づかれないように帰国されるように手配しますのでご容赦ください」

北京語でそう言うてくれた。ランの母親だけでなく、父親も覚悟を持ったチベットの人だということが分かった。

「最初、何が起こったのか分かりませんでしたので、とにかくびっくりしました。ただ私は、たびたびチベットに来て、チベットの状況はある程度分かっていますし、チベットの人達の味方のつもりでいますので、逆に皆さんのお役にたててよかったですよ」

「そう言うていただいて、感謝します」

松田は、ランの家に三泊し、その間に成都行の飛行機を手配し

てもらい、成都経由で成田に帰国したのだった。その後、ランと両親がどうなったかは分からないままであった。

## 再び東京で

松田は、ガンデンポタンの東京事務所を訪れて、ラン・ソナムに再会したことに驚く。さらに、対応に出たヤマ・ツエリンの話を聞いて再びびっくりしたのであった。

「つまり、ラン・ソナムの母親、ツエリン・チュドゥンは、ゲンドゥン・ニマの母親の姉になるのです」とヤマ・ツエリンが言った。続けて、

「ニマの母親は、プティー・パサンというのですが、今年になっ

て行方がわかり、連絡が取れたのです。彼女は現在、重慶にいます。彼女の話では、一緒に連れ去られた後、息子のニマとは離れ離れにされ、夫と二人で、重慶で暮らしていたようです。その夫は、重労働が重なって、昨年の初めに亡くなったとのこと。ひとりになって、わずか六才で別れた息子にどうしても会いたいと言っています」

松田は、話を聞きながら、ゲンドウン・ニマの拉致事件のことを思い出していた。

一九八九年一月二八日にチベット自治区でパンチエン・ラマ一〇世が入寂した後に、ダライ・ラマ一四世とチベット亡命政府はパンチエン・ラマ一〇世の転生霊童（生まれ変わりの少年）の探索を始め、一九九五年五月一四日に当時六歳であったニマと



いうチベット族の男児をパンチェン・ラマ一〇世の転生靈童として認定をし、中国政府に先駆けて発表した。

しかし、中国政府はチベット亡命政府の転生者認定を承認せず、チベット亡命政府とは別に転生靈童を探索した。ダライ・ラマ一四世が新パンチェン・ラマ認定を布告した三日後に、ニマは両親とともに失踪したのである。当初、中国当局はニマと両親の失踪との関わりを否定していたのであるが、翌年の一九九六年五月二八日に中国政府は「ニマ少年を保護する目的」で連行したことを認めた。中国政府は「ニマ少年は両親の要請に基づいて政府が保護している。ニマ少年は分裂主義者によって連れ去られる恐れがあり、身の安全が脅かされている」と保護の理由を説明した。しかし、その後連行されてから現在まで、外国の報道機関や人権団体など第三者がニマおよび両親と面会することは中国

政府に許されていないため、ニマと両親の安否に関して確実な情報が出ていないのである。

これに対して、ヤマ・ツェリンの話では、ニマの母親の消息が分かったというのである。これは画期的な情報であるが、中国政府が二十年以上にわたり秘匿してきて触れられたくない古傷に触れることなのである。

「この話は、すぐさまインドのダムサラのガンデンポタンに伝えられました。そして、彼女の話を参考にして、ニマの行方探しが行われました。しかし、すでに二〇年以上が経っており、容易に分かるはずはありません。松田先生は、ルオ・クンサン修道院長という方をご存知でしょうか？」

松田は、その名前を聞いたことがあった。

「よくは存じませんが、確か高名なチベット仏教の僧侶ではなかったでしょうか？」

「そうです。彼は、文化大革命で破壊されたパルムゴンパ修道院の院長です。院長は、今、そのパルムゴンパ修道院の再建に力を注がれています。同時に彼は、世界各国で講演をされ、様々な宗教の方々と交流をされています。宗教を通して戦争のない世界の実現に奔走されているのです。そうした活動の中で、様々な人々、例えば中国内の仏教の人たちとも交流があります。ルオ・クンサン院長と交流のある、あるシンガポール在住の中国人から、『中国の河南省にある嵩山少林寺に、昔、チベット人の少年が修行僧として来た。しかし、他の少年僧とは違い、その少年は、十分な中国語もできず、日夜家に帰りたいたいと泣き続けていた』という話を聞いたことがある」という情報を得ました。そこでテン

ジン・ハクパ、中国名を張春雷というものが、少林寺の探索をしました」

「ええっ、その張というのは、ひょっとして香港で私に接触して亡くなった人ではありませんか！」

松田は張春雷の名前を聞いて驚嘆する。その張春雷から頼まれた物を持ってきて、まだ手元にあるのだ。張春雷はアメリカのパスポートを持っていたと言っていたが実はチベット人だったのかと思う。

「そうです。目当てのチベットの青年の周辺を探っていたのですが、実際に近づくのが難しく、うろろうろしている間に公安に目を付けられたのです。その気配を察して香港に逃げたのですが殺されてしまいました」

松田は、今回の事が二年前の事件と関係がありそうだと聞き、

これは大変なことに巻き込まれていたのだと恐ろしくなった。

「松田先生、そこで先生にお願いがあるのです」

ラン・ソナムが北京語で口をはさんだ。

「えっ、ランさん、私に何かして欲しいというのですか？」

「はい、これはむしろ母からのお願いなのです。母のツェリン・チユドウンは、シャーマンなのです。チベットではシャーマンが神のお告げを聞き、難局にあたってその先の進路を示すのです。

チベットには、五体投地で聖地ラサを目指す一人の老婆「阿媽」

が三年という歳月をかけて旅をする間に、東方より来た勇者に魔物から救われ、ラサに着き、そこで命が果てるという話が伝わっているのですが、今の難局を打開できる東方から来た勇者、パウオが先生に違いないと言うのです」

松田は、困惑するしかない。少なからずチベットとの係わりはあるが、シャーマンに「あなたは、我々のパウオだ」と言われて、すぐさま「はい、」と言う者はいない。

「そう言われても、僕はチベットや中央アジアの文化を研究している単なる研究者だよ。君たちの役に立てるとは到底思えな  
いがね」と警戒して言った。

「分かっています。端的に言いますと、少林寺にいるチベットの青年に手紙を渡して欲しいのです。私たちチベット人が彼に近づくのは難しいのですが、到底関係のない日本人が接触しても問題ありません」

「分かっていますよ。その張春雷という人は、その青年を探っていて殺されたのでしょ。そんな危ない話にのれませんよ」  
すると、ランは松田の言葉を前もって分かっていたかのように、

別のことを言い始めた。

「先生は、『五体投地』というチベット仏教の礼拝方法が少林寺に伝わっていることをご存知でしょうか？ 五体投地は、両足、両手と額の五体を地につけて祈る特有の礼拝法で、多い場合は一日に数千回も行うので、チベットの礼拝堂には手足の跡が残っています。少林寺にも同じような跡が残っているのです。少林寺の床は石畳です。その石畳に跡が残るほど長い年月の間、チベット仏教の最高の礼拝が行われてきたのです。禅宗である少林寺とチベット仏教との関連性は謎なのです。ですから、文化人類学の先生として純粋に研究の一環として少林寺をお尋ねいただけないでしょうか？ もし危険と思われたら、そのまま何もせずに帰ってきてください」

そう言われると、松田も研究者としての興味が湧いてくる。

「ランさん、上手いこと言いますね。僕の心の中を見ているようだ。少し考えさせてください」

話を聞いた後、ここで香港で預かったUSBをやっとヤマ・ツエリンに渡した。

「それにしても、張春雷という人は、アメリカのパスポートを持っていたと言っていました。アメリカの国籍を持っていたのですね」

先ほどの話から張春雷がチベット人だと分かっているながら、わざとそう訊いてみる。ヤマ・ツエリンは、「きらっ」と鋭い視線を投げてから、

「いえ、彼のような仕事をしていると、様々な局面に対応できるようにしているのですよ」とだけ答えた。

ヤマ・ツエリンは、受け取ったUSBを持って下の事務所に下り



ていった。暫くして封筒を持って帰ってきて、

「中に、ゲンドウン・ニマの写真と、ツエリン・チュドウンから彼への手紙が入っています。よろしくお願いします」

そう言って、強い視線で松田の顔を見ながら差し出した。

## 中南海

同じ頃、ここは、北京の中南海の中でも最も広大な屋敷の中の一部屋である。恰幅のいい大柄な男と三〇代と思しき女が声を潜めて話をしている。

「それで、嵩山少林寺のチベット人の件は、露見していないのだな？」

「はい、この前」報告しましたように、公安が少林寺のチベット

人のことを探っていた男を探知しました。男は、チベット人の捜索員のひとりと思われれます。しかし、男は途中で公安の気配に気づき、チベット人には接触していません。そして、そのまま香港まで逃れて行きました。そこで男は、日本人に接触しようとした」

「なにつ、日本人に接触したというのか？」

「いえ、日本人に接触する直前に、拉致して葬り去りました。従ってチベット人のことは、どこにも露見していません」

「その日本人というのは、何者なのだ？」

「たまたま香港の学会に来ていた日本の学者です。なぜ男がその日本人に接触しようとしたかは分かりません。その日本人は、学会が終わった翌日には日本に帰りました」

「ふーむ、その日本人はチベットの連中と何か繋がりがあるな。」

そいつが中国に来て何かやるかもしれんな。しかし、それは、それで逆に都合がいいかもしれんぞ。うまく利用するのだ。分かるか？」

「なるほど、分かりました。お任せください」

中南海とは、言わずと知れた中国共産党の中核である國務院が置かれるとともに、幹部の居住区である。北京の故宮と天安門広場のすぐ隣に、高さ六メートル余りの赤い壁で囲まれた人の近付かない一角が中南海である。この中南海の面積は、百万平方メートルと広大なものである。一八九八年の戊戌政変（ぼじゅつせいへん）で光緒帝が幽閉された南海の小島・瀛台（えいだい）、毛沢東の住居のあった豊沢園、一九七六年一〇月に「四人組」が逮捕された懷仁堂、中国共産党中央書記処の執務室のある勤政殿など一四〇以上の様々な建物が、その中にある。天安門から一

キロメートルほど行ったところに入口である新華門があるが、一般人が中南海の中に入ることはできない。中南海の住人の男と密談している女は、男とよほど密接な関係があるといえる。

## 上海

松田学は、外灘（ワイタン）の新天地にあるアメリカンレストランのテーブルをはさんで高島恭子と向かい合っている。周りは、アメリカ人やヨーロッパ人でいっぱい、ここが中国であると思えないほどである。

東京のガンデンポタンの事務所を訪れた後、事務所であったことを恭子に話した。実はあの時、ラン・ソナムから少林寺で禅

の体験修行をしながら調査をしたらどうかと言われた。少林寺は、特に外国人に対して受け入れを表明しており、日本からの学術調査でもあると言って申し込めば、怪しまれずに受け入れられるはずだと言った。松田は、ランが言ったチベット仏教と少林寺との関係に興味湧き、結局、大学の講義が休みになる七月に行ってみようと約束したのだった。

松田が七月に中国へ行くことを話すと恭子は、

「それはとても危ない話ですね。でも中国を代表する禅宗のお寺とチベット仏教の繋がりというのは、興味深いですね」  
取ってつけたように危ないと言いながら、すぐに興味の方が上回っているのが分かる。

「チベット仏教の密教は、直接インドから入って行ったわけですが、一方の密教の流れは、一般に、インドーネパールー中国ー

朝鮮―日本へと流れ、真言宗や天台宗として伝わってきたと考えられています。チベット仏教がその流れの中に入っているのかもしれないですね。できましたら、私も参加させていただけませんか？ 私が注目しているネパールやチベットの曼荼羅の伝搬の一旦に繋がるかもしれません」

「あなた、自分で危ないと言ったばかりじゃないですか。駄目ですよ」

松田は、香港の事件と二年前の事件が関連していると聞いたばかりであり、恭子を連れて行くわけにはいかないかと断った。

「でも先生がひとりで行くより、同じ大学の研究者が二人も学術調査に訪れるとなったら、先方の警戒感もぐっと下がると思えますよ。ぜひお願いします。」

簡単には引き下がらず、何とかして行きたい気持ちが前面に出

ている。

「でも禅宗のお寺の体験修行なので、女性の参加はむずかしいと思いますよ」

「今時そんなことはないと思います。同じ曹洞宗の永平寺の体験修行は、半分以上が女性だと聞いたことがあります」  
なかなか諦めそうにない。

「では、申し込みの時、女性の受け入れが可能だという返事であれば、連れて行くことにしましょう」

由緒ある嵩山少林寺が、日本のお寺のように女性にも開かれている状況ではないだろうと考え、条件付きで了承してしまった。後で、申し込みのために少林寺に電話で問い合わせたところ、恭子の言うように女性の参加も歓迎しますということであった。

「それにしても、このあたりにいると、ここが中国だとは思えないですね」とビールを頼んだ後に恭子が言った。

「全く、その通りだな。それだけ今の中国が世界中から注目されている証拠だな。上海には外国人が十七万人も住んでいるそう  
だ」

「昔の外国租界もこんな賑わいだったのでしょうね」

「そうだね。昔の租界は、アメリカ、日本、イギリス、オーストラリアなどが共同で所有していたということだから、こんな光景があったかもしれないね」

そんなことを話しているところへビールが運ばれてきた。乾杯をして、明日からの予定を話し合った。

嵩山は、河南省鄭州にある山岳群で中国の五岳の中の中岳に数えられる。上海から鄭州までは、高速鉄道が開通しており、上



海の虹橋駅から鄭州駅まで約五時間である。

嵩山少林寺は、嵩山の中の少室山の北麓にある寺院である。インドから中国に渡来した達磨による禪の発祥の地と伝えられ、中国禪の名刹である。また少林武術の中心地としても世界的に知られている。しばしば誤解されるが、少林寺拳法は日本で創始されたものであり、現在の嵩山少林寺の武術とは別物である。また、二〇一〇年には、「天地の中央」にある登封の史跡群のひとつとして世界遺産に登録された。鄭州駅から少林寺まではバスで行くことになる。

前述のように、禪の体験修行と学術調査の依頼は、松田が直接、少林寺に電話して申し込んだ。先方は、日本からの電話であることが分かると、丁寧に対応してくれた。しかし、体験修行は、基本一か月で二万元、日本円で約三〇万円と結構な値段である。つ

まり、外国人目当てのビジネスでもあるのだろう。内容は、禅の体験修行である仏教禅の勤行を行いながら、仏教禅の文化を学ぶとともに、少林武術にも触れるというものである。ただし、松田は、少林武術の代わりに学術調査に協力してほしいと依頼した。そのような依頼は、今までなかった所以对応できるかどうか検討するので再度電話してほしいということであった。そして、数日して電話すると、対応できるので来ても大丈夫ですとのことだったのである。

松田と恭子は、外灘の新天地で食事を終え、淮海中路にあるホテルに向かって歩いていった。上海の夏は暑いが、夜八時ともなると少し風も出て過ごしやすく、歩道は人で溢れている。歩道の街路樹は、高く伸び街の景観の向上に一役買っている。道路の両側

には、英語のネオンサインを上げている店も多い。

「この新天地というところは、ヨーロッパ風の建物のような建築が多くて、上海でも特にお洒落なところなのでしょーね」

恭子は、多くのヨーロッパ人の行きかう中国らしからぬ中国の街に不思議な感じを抱き続けていた。

「このあたりは、昔のフランス租界のあったところらしい。だから元々瀟洒（しょうしゃ）な建物があつて、その昔も最も中国らしからぬ区域だったと思うね」

恭子の不思議そうな顔に答えるように言った。

と、そのとき後ろの方から声をかけられた。

「你好、松田先生、」

振り向くと、二人連れの男が近づいてくる。一人は見覚えがあつた。

「またお二人そろって中国にお越しですか」

香港警察の藩とかいう警部だった。ふたりともびっくりして、一瞬声を失う。

「香港警察が、まだ我々に御用ですか？」

そう言うのがやっとで、動揺は隠せない。

「いえ、本当にたまたまお見掛けしたので声をお掛けしました。あの事件を追って上海に来たところです。ところで、今度はどんな御用で中国にお越しですか？」

どうもまだ松田らのことを調べているのではないか。香港の事件と今回、中国に来たのは関連があると分かっているだけに、頭の中が白くなるように慌てた。しかし、ここで慌てた様子を見せたいいけないと自分に言い聞かせて冷静さを装う。

「チベット仏教と中国仏教の繋がりに関する調査です。純粋な

学術調査です」

「ほお、仏教の調査を上海でされるのですか？」  
いかにも疑わしそうに訊いてくる。

「いえ、明日には、鄭州に行き、嵩山少林寺を訪ねることにしています」と本当のことを言った。言った後でまずいかなと思ったが、どうしようもない。「嵩山少林寺」という言葉に「きらっ」と反応したようであった。

「嵩山まで行かれるのですか。それはごく苦労様です」  
さらに突っ込まれるかと思ったが、それ以上は聞いてこなかった。しかし、会話の間、もう一人の男は表情を出さず、じっと二人を見つめていた。松田は、何かを見通されているような感じになり不気味さを感じずにはいられなかった。

松田は、香港の事件のことを知りたかったが、なるべく早く

二人から離れたいとの思いの方が強く、黙っていた。

「今日は突然、声を掛け失礼しました。お気を付けて行ってきてください。またお会いするかもしれませんね」

藩警部が微妙なことを言って、二人は引き返して行った。

香港警察に呼び止められて、青くなっていた恭子と急ぎ足で宿泊先の新錦江酒店に戻り、一息つくためロビーの横にあるバーに入った。

「私たち、上海に着いた時から見張られていたんじゃないの」  
恭子はまだ驚きが止まらない様子である。松田もひよっとすると空港から付けられていたかもしれないとも思っていた。

「可能性がないことはないな。やはり、この話は断るべきだったかもしれない」

「香港で亡くなった人は、誰に殺されたのか、まだ分からないということだったのでしょ」

「事件の捜査で上海に来たと言っていたから、事件はまだ解決していないということだ。つまり、犯人がまだ捕まっていないということとは、僕たちも狙われる可能性があるということだ。そして、僕が少林寺に行くと言ってしまったので、連中も付けて来るかもしれない」

「でも私たちは、何もしていないわけだから、香港警察と一緒に来てくれたら逆に安全かもしれないわ」

恭子は一転して大胆なことを言う。

「君は、大胆なことを言うね。しかし、ランさんの話では、張という人は、中国の公安に殺された可能性が高いと言っていた。もしそうなら中国の公安に対して香港警察がどこまで対応できる

か甚だ疑問だな。ここまで来たけど、行くのをやめるか」

「では、本当に学術調査だけして、チベット人に頼まれたことはやめましょう。そうすれば、命を狙われるようなことはないと思うわ」

先ほどまで青い顔していたのが嘘のように行く気になっていた。恭子は、一人でインドやネパールに調査に行っていて、少々のもめ事やトラブルには対応できると自分で思っているのだ。

「そうだな、少ない研究費を使ってここまで来たわけだから、やるだけやって帰ることにするか」

文化人類学の研究は、国や民間財団からの助成金で成り立っている。それぞれの研究者は、研究室に割り当てられる助成金をやりくりして調査などをしているのが現状である。松田も、研究対象の方に興味に移り、ここまで来て途中で引き返すことはない



と思うのであった。

### 嵩山少林寺

次の日、松田と恭子は、予定通り上海から高速鉄道で鄭州まで行き、バスで少林寺に向かった。実際には、鄭州からのバスは登封という町までしか行かず、さらに小型バスに乗り換えて少林寺の山門前に到着した。登封から少林寺までは、三十分ほどであるが、嵩山の山道を登って行き、道の両脇は峻険な山が迫っていた。すでに夕方である。しかし、真夏の熱気は冷めやらず、首筋から汗が滴るが拭くのも煩わしいほどである。

中国に少林寺という名の寺院は九箇所ある。嵩山少林寺の他

は、和林少林寺（内モンゴル）、薊県少林寺（河北省）、長安少林寺（陝西省）、太原少林寺（山西省）、洛陽少林寺（河南省）、泉州少林寺（福建省）、福州少林寺（福建省）、山東少林寺であり、他に台湾にも台湾少林寺がある。この中で嵩山少林寺は、インドから渡来した達磨による禪の発祥の地であるとともに、少林武術の中心として世界的に名をはせている。少林という名前は、『塔林』という小さい塔の形をした僧侶のお墓があるお寺ということからそのように呼ばれている。

創建は、四九六年で、孝文帝が西域沙門の仏陀禪師の住寺として建立したと伝えられている。元代の初期に世祖クビライが曹洞宗を厚遇したことで、少林寺は曹洞禪の教勢を張った。現在の方丈（住職）は、劉永信という。

汗を流しながら、バス停から山門に向かう。寺は山裾から山肌を登るように建てられている。山門から三、四メートルの高さの赤い塀が左右横方向に延びている。つまり、少林寺院全体が、この赤い塀で囲まれているようである。山門をくぐると右側に受付があり、一般の観光客はここで参観料を払う。松田は、外国人向けの修行体験に来たことを伝えると、案内の僧侶が出て来て、付いて来るように言われた。広い境内を登って行く。案内の僧侶は、観光客に慣れている様子で、境内の説明をしてくれる。境内に出ると両側に鍾譜堂と慈雲堂という二階建てのお堂が建っており、慈雲堂には千手千眼観音像が祀られているという。さらに進むと天王殿という門がある。天王殿には四天王像が祀られている。案内の僧侶は、天王殿をくぐり、さらに進む。左側に経堂があり、その奥に客殿がある。松田と恭子は、客殿の中に連れて

いかれた。

客殿の奥に通されると、別の僧侶が現れる。

「ようこそ嵩山少林寺へいらっしやいました。私は、李好蘭です」

英語で自己紹介した。恭子は、緊張して案内の僧侶に付いてきたが、ここで英語を聞くとは思ってもみなかったようで、一気に緊張が緩んだようである。

「私たちも日本から遙々来たかいました。よろしく願います」

流暢な英語で応え、松田に向かって朗らかな顔を見せた。

「この先もうまくコミュニケーションがとれそうですね」

この後、受付の僧侶の説明に沿って体験修行の登録をし、登録料二万元ずつを払った。松田は、境内の宿舎に泊まって体験修

行をするのかと思っていたが、手続きが終わった後、受付の僧侶は、

「体験修行の方の宿舎は、この寺院の外にありますのでご案内します」と言った。

二人は僧侶に連れられて、来た道を山門に向かって下って行った。境内は、すでに夕暮れに染まっており、参観の観光客はすでにいない。参観の時間が終わったのであろう。山門を出るとバス通りを左側に折れ、登封の方向に向かって歩く。道路の両側は低木の林が続いている。しばらく歩いて、左に折れて林の中に入っていく。さらに林の中を登って行くと右側にいくつかの白い建物が見えた。つまり、その建物は寺院の建っている同じ山肌にあり、寺院の塀の外側にあつたのである。案内の僧侶はその中のひとつに入って行った。

建物の中は、中国の寺院のイメージとは違い、二流ホテルのロビーのようなスペースにいくつものソファとテーブルが置かれている。それらのソファには、数人の白人の男が談笑している。ここは、人里はなれた山奥にある奇妙な外国人居留区のようなと松田は思った。さらに案内の李好蘭がロビーの横の部屋に案内して、修行プログラムの詳細を説明した。説明によると、次のような日課であった。

四時半…起床

五時…座禅

六時…朝課（読経）

七時…小食（朝食）

八時…作務

九時…座禅

十時…曹洞宗教練

十二時…中食（昼食）

十三時…作務

十四時…武術教練

十七時…晚課（読経）

十八時…薬石（夕食）

二十一時…開枕

「我々は武術教練のかわりに、少林寺に関わる学術調査をお願いしています。この調査にご協力いただけるのでしょうか？」

松田は、今回の目的である肝心の学術調査について質問した。

「そのことは聞いています。ご安心ください。午後の武術教練の二、三時間をそれに当てるように考えています。明日、その担当を紹介します」

それを聞いて恭子も安心したようである。

この後、修行中に着る灰色の僧衣を渡され、スーツケースを引きずりながら、それぞれが宿泊する部屋に案内された。松田の部屋は、壁際に緑と赤と白のカラフルな二段ベッドが二つ並んだ四人部屋で、窓際に小さい机が並んでいる。中に入って行くと、僧衣を着た二人の外国人が寄り添い、ベッドに腰をかけて深刻そうに話をしていたが、松田を見ると何事もなかったかのように二人とも笑顔で立ち上がった。

「日本から来た松田学です。よろしく」

松田も笑顔をつくって、英語で自己紹介する。

「シカゴから来たジョージ・ベーカーだ」

「スリランカから来た、ルワン・バンダラナイケです。よろしく」  
ジョージ・ベーカーは、松田より年上であろうか、背が高く、一



見して学者風である。ルワン・バンダラナイケは、一般のスリランカ人やインド人と同じく肌が浅黒く、年齢は三十代半ばであろうか。二人によると、部屋は四人部屋だが、当面は松田を入れて三人で使うとのことである。さらに二人と話をすると、ジョージ・ベーカーは、イリノイ大学の考古学の研究者であるとのこと。古代チベットにも興味があるというので、気が合うかもしれないと松田は思った。ルワン・バンダラナイケは、中学の先生で、禅宗の教練よりむしろ少林寺武術に興味があるようである。

### 体験修行一日目

松田は、寝付かれないまま朝焼けが窓を薄く照らしているなと気が付いた時、鈴の音が軽く響いた。これが起床の合図なの

だ。同宿のふたりは、すでにベッドから離れているようである。

「おはよう、よく眠れたかい？」

ベーカーが声を掛けてくる。

「おはよう、緊張感と慣れないベッドなのであまり眠れませんでした。あなたは？」

「何も緊張することはないだろう。しかし、中国の夏は夜でも蒸し暑くてたまらん。先が思いやられる」

「スリランカはこんなものではありません。もっと暑く蒸し暑いですよ」

ルワン・バンダラナイケはすでに着替えて支度をしていたようである。

松田とベーカーも身支度を急いだ。

座禅は、宿舎の隣の建物に体験修行者専用の禅堂があり、そこで、指導僧から指導を受けながら座禅を行う。この禅堂は幅が六メートル、奥行きが二〇メートルほどの細長い部屋になっている。両側の壁に沿って幅一メートルほどの台が作られており、修行者は、台の上へのり、壁に向かって座禅を組む。禅堂に入ってから、すでに七、八人の男女がおり、恭子は、白人の若い女性と話をしていた。松田が近づいて、声を掛ける。

「昨夜は、よく眠れたかね？」

「同宿のこの人たちと遅くまで話していて、すこし興奮ぎみでした」

そう言って、眠そうな顔をしている。恭子の性格では、初めての中国のお寺で学術調査ができるという実感が湧いてきて期待感で高揚しているのだろうと思った。

そのとき、さらに数人の男と二人の指導僧が入ってきて、座禅の教練が始まった。今回の修行者は、男八人、女五人の計一三人である。

まず禅堂への入り方、出方、自分の単（座る場所）への進み方について、手本を見せながら説明があった。ただ二人の指導僧とも英語が得意とは言えず、皆が十分に理解できているとは思えない。禅堂の中では言葉を交わしてはいけないと言われても、質問が飛び交う。

それぞれの単に着いた後、まず『三進退』について説明があった。これは、三つの基本作法の合掌・叉手・法界定印についてである。合掌は両手の平を顔の正面で合わせ、中指が鼻の高さになるように腕を上げ、手と顔の距離は握り拳一つ分開けて軽く肘を張る。叉手は左手の親指を中に握り込み、みぞおちの辺りにお

いて右手で覆う。この時、右手の親指は左手のくぼみにおくようにする。これは立っている時や歩いている時に行う作法である。法界定印は両手の平を上に向け、右手の指の上に左手の指を重ねて両親指で卵の形を作るように軽く付ける。これは坐禅や正座の時などに行う。

次に指導僧が見本を見せながらどのようなように座るかを見せる。

結跏趺坐（けっかふざ）、半跏趺坐（はんかふざ）、正座の中から、足に無理のない形で座るようにと説明されが、言われたように足を組んで座ることができない人が半数以上で、指導僧は、その場合の座り方を一人一人に教えてまわっている。結跏趺坐は、右の足を左の太ももの上にのせ、次に左の足を右の太ももの上にのせる。半跏趺坐は、左の足を右の太ももの上にのせるだけの座り方である。足を組んだら法界定印を取り、背筋を伸ばす。身体

を左右に揺らしながら口から息を吐き、鼻から吸ってバランスの良いところで姿勢を保つ。視線は四十五度の角度で落とし、目は閉じずに自然に開き、静かにゆっくり鼻で呼吸をする。松田も恭子も禅の知識はあり、教えられたように座り瞑想に入ろうと努力した。しかし、他の人たちは、足を組んで座ること自体が難しく、指導僧にいろいろ聞いていて、とても瞑想に入る状況ではなかった。こうして座禅の時間は、瞬く間に終わった。

次は、読経である。読経は、境内の大雄宝殿で行われる。まだ経について何も教わっていないのであるが、今日は僧侶たちの末席で、読経の様子を見るということであった。大雄宝殿までは、昨日来た道を全員で境内に向かって歩く。まだ朝早く、行き交う人は少ない。山門を入り、天王殿を通り抜け、高くそびえ立

つ大雄宝殿の柵の中に入った。すでに薄紫の僧衣を着た僧侶がきちんと並んで座っている。僧侶の数は、二百人くらいであろうか。大雄宝殿は、天井まで二十メートルほどある荘厳な建物で、正面に三体の仏像が置かれている。

松田ら体験修行者は、わずかに空いている最後尾のスペースに横に並んで座った。しばらくそのまま待っていると建物の横から、黄色い僧衣に焦げ茶色の袈裟を着た僧侶が、二人の僧侶を従えて現れた。全員が合掌する。劉永信方丈であろう。方丈は、最前列の中央にある布団に座る。そして、五十センチくらいはある大きな線香を何本も供える。煙が立ち昇る。全員が合掌し、正面の三像に向かって深々とお辞儀をする。両手をつき、額を床につける。チベット仏教のように全身を床に投げ出して行う『五体投地』ではない。松田らも同じように深々とお辞儀をした。続い

てひとりの僧が大きな声で経を唱え始める。それに一呼吸おいて、鐘などの楽器が伴奏のように奏でられる。それに合わせて全員が経を唱える。大きな建物の中が、大きな合唱団のような響きでいっぱいになる。松田は、一心に経を唱える一人一人の僧を見ながらどのような経緯で、少林寺で修行をしているのだろうかと思つた。

一時間にわたって読経が続き、最初は正座していたが、体験修行できている外国人はたまらず適当に足をくずしていた。読経が終わり、全員で合掌し、最初と同じように深々とお辞儀をする。最初に劉方丈が二人の僧を従えて退席し、その後、最後尾の松田らから順に退席する。こうして朝の勤行が終わった。

朝食を宿舎の食堂で済ませた後、作務を行う。宿舎で各自の部



屋の掃除をした後、宿舎のトイレ、禅堂などを手分けして掃除をする。

掃除を済ませると、再び宿舎の隣の禅堂にて座禅をする。今度は全員が並んで、教わったように手を叉手にして、入口の左側の柱のそばを左足から坐禅堂に入った。自分の単に着いたら、その場所に向かって合掌・低頭をする。そして両隣の二人はこれを受けて合掌する。また、この隣位問訊をした後、合掌のまま右回りをして向かいに坐っている人に合掌・低頭をする。向かい側の人には、これを受けて合掌する。各自が自分の単にて、教わったような無理のない座り方で座り、手は法界定印に組む。座禅の基本は、

・背筋をまっすぐにのばし、頭のとっぺんで天井を突き上げるようにしてあごをひき、両肩の力をぬいて、腰にきまりをつけ

る。この時、耳と肩、鼻とおへそとが垂直になるようにして、前後左右に傾かないようにする。

- ・舌先は軽く上顎の歯の付け根につけて口を閉じ、口の中に空気がこもらないようにする。

- ・目は、半眼にして見開かず細めず自然に開き、視線はおよそ1メートル前方、約四十五度の角度におとす。目をつむると眠気を誘うので、目は閉じないようにする。

- ・坐禅の姿勢が整ったら、静かに大きく深呼吸を数回する。その後、静かにゆっくりと、鼻から呼吸する。

- ・座禅の間はさまざまに思いにとらわれないようにする。坐禅をしている間に、さまざまに思いが浮かんでは消えていくが、思いは思いのままにまかせ、体と息を調べて坐るようにする。四十分ほどで、放禅鐘の鐘がなる。坐禅の終了の合図である。

鐘が鳴った後、まず合掌・低頭し左右揺振をして、組んでいる足を解く。そして、右回りで向きを変えて立ち上がる。立ち上がったら向き直り、坐蒲を元の形に整えて、隣位問訊、対坐問訊をし、合掌の手を叉手にして入堂の時と逆に進んで退堂する。

禅堂を出たところで、松田は恭子に声を掛けた。

「どうですか、禅の修行は」

「初めての体験ですが、静かなところで何も考えないでじっとしているというのは難しいものですね」

「何も考えないということではなく、考えない、考えてはいけな  
いとはどういうことなのかを、しっかり考えなさいということ  
らしい」

「何を言っているのか分からないわね。まだ始まったばかりだからもつと考えてみます」

この後、禪堂とは別の建物で、曹洞宗の仏教教練がある。建物の中には、学校の教室のように、机と椅子が四十組ほど並べてあり、前には黒板が掛かっている。つまり一般的な教室である。

二人の指導僧が、まず小冊子になっている『般若心経』を配った。開いてみると漢字の横にアルファベットで読み方が書いてある。今日の授業は、まず『般若心経』を呼んでみようということであった。漢字の文化圏でない人々にとって、いくら読み方が書いてあるとはいえ、ただ意味も分からず読むというのは、どんなものであるろう。ひとりの僧が、手本として一小節ずつ読み、それに続いて松田らが読むという勉強である。もちろん中国語である。

『般若心経』は、全体で二百六十六文字からなる空・般若思想

を説いた経典で大乗仏教の心髄が説かれているとされる。短い経典で一回読むのに十分くらいなので、数回読むとだんだん読み方に慣れてくる。三回読んだところで、ジョージ・ベーカーが、「読み方は、分かったのでもどういことが書いてあるのか教えてもらえないか」と言った。

「般若心経は、最も基本的な経典ですので、毎日の勤行でも唱えられます。勤行に参加したときに、皆さんもほかの僧と一緒に唱えられるように、まず読み方を練習してもらっています。どのような教えかについては追ってご説明します」

「我々のような欧米人の中には、漢字に触れることが初めての人もいます。ただ何かの歌のように読むだけでは、仏教文化を学ぶことにはならないと思うがね」

「はい、分かっています。明日は、漢字の練習にも入って行く予

定です」

この後、さらに数回の読経の練習をして仏教教練が終わった。松田は、般若心経の解説を読んできており、その思想を理解しているが、仏教圏以外の人に英語でどのように解説するのだろうか、そのことに興味が出てきていた。

午後は、作務として境内の掃除を行う。広い境内には観光客が多く、その分ごみの量も多くなる。真夏の境内は、風もなく熱気が立ち込めている。配られた麦わら帽子をかぶって、ごみを集めては、収集場所に集めていく。もちろん松田らのできる範囲は限られており、今日は山門から大雄宝殿の間の境内の掃除であった。首筋から汗が滴り落ちる。

一時間少々で作務を終わり、ひと休みして武術教練が行われ

る。宿舎の隣に仏教教練のための教室の入った建物があつたが、この中には教室と併設して武術道場があり、今日の武術教練はそこで行われる。松田と恭子は、本来の学術調査のため、武術教練には加わらない。隣の教室で待っているように言われ、暫くして三〇代半ばと思われる女性が入ってきた。白地に濃い青の縞模様のシャツを着て、きりつとした顔をしている。松田は、登封の田舎の女性らしくないなと思った。

「您好、陳美帆です。松田先生ですか？」

松田の方を見て北京語で言った。

「您好、はい、松田です。こちらは、同じ大学の高嶋です。今日からよろしくお願いします」

「私は、登封の中学の教師で、このあたりの郷土史の編纂をしています。このあたりの歴史に関する調査のために日本人が来る

ので案内をしてほしいと少林寺から依頼がありました。どのような調査で来られたのでしょうか？」

「私たちは、中央アジア、インドを中心とした文化人類学を研究しています。その中で、仏教の流布と文化の関連性に興味を持っています。中国に仏教が伝来して以来、中国では、それまであった儒教、道教と融合して中国固有の仏教として発達してきたと思っていたのですが、インド仏教を厳格に受け継いだチベット仏教と深い関わりが、この少林寺にあるという情報を聞いて調べてみようと思って来ました」

「チベット仏教との関わりですか。具体的にどんな情報がありましたか？」

「チベット仏教では、『五体投地』をするのに、腹ばいになって全身を地に付けて行います。この場合、腕立て伏せのようにな



り、足先に力が入ります。これを修行僧は、一日に数千回行います。このため、長年の間に床がえぐれて足の跡ができます。同じような足の跡がこの少林寺にもあるという情報です。もしそのような足跡があるとすれば、チベット仏教が深く深化したことになる、チベット文化の痕跡も多く残っているのではないかと思うのです。聞かれたことはありませんか？」

「さあ、聞いたことがありませんが、ただそのような目で少林寺を見たこともありませんでした。チベット仏教との関わりで言うと、モンゴル族、満州族はチベット仏教を信奉していたと言われていています。特に、クビライは、元の時代にチベットから僧を呼び、チベット仏教を深化しようとしたと言われています。ただし、中華でどの程度まで受け入れられ、深化したのかは不明です。今日は初日ですので、少林寺の歴史などについてお話ししまし

ようか？ 明日から、境内や周辺の遺跡などをご案内するとうことでいかがでしょうか？」

「分かりました。よろしくお願いします」

陳美帆は、プロジェクターを使って説明するため、黒板の上にスクリーンを取り付け、プロジェクターのコンセントにパソコンをつないだ。パソコンの画面がスクリーン上に映る。説明用のPower Pointには、漢字の表記の下に英語が添えられている。説明は、中国語であったが、恭子にもかなりの部分理解できる。所要所で松田が通訳するようにした。また、途中で恭子が英語で質問すると、陳美帆は、中国訛りの英語で答えてくれた。概要は次のようなことであった。

—中国に仏教が伝来したのは、一世紀頃と考えられている。「紀元六四年、後漢の明帝に命じられ、蔡愔、秦景をはじめとする十

数人が洛陽をたち、天竺（今のインド）まで仏典を求めに出発し、天山山脈、葱嶺（パミール高原）を越え、大月氏（今のアフガニスタン一帯）に向かった。そこで、インドの高僧・浮屠迦葉摩騰（ふとしかしようまとう）と竺法蘭（じくほうらん）に出会い、六七年、彼らを導き、經典と仏像を白馬に背負わせて洛陽に戻った。六八年、明帝は天竺の寺院様式を模して、洛陽城外に中国初の寺院を造営するよう命じた」という説話が残っている。白馬寺は、少林寺から七〇キロほど西に行ったところにある。桓帝の時代にインドや西域の仏教者が中国に到来して、洛陽を中心に仏典の翻訳に従事した。大乘經典の『道行般若経』は、二世紀に入り、靈帝の時代に訳出された。

—四世紀頃から、西方から渡来した仏図澄（ぶつとちよう）や鳩摩羅什（くまらじゆう）などの高僧が現われ、經典の解釈を見直

し、僧制を制定したことで、中国仏教の流れが始まる。五世紀になると、『華嚴経』、『法華経』、『涅槃経』などの代表的な大乘仏典が伝来する。そうした中、嵩山少林寺は、四九六年に北魏の六代皇帝である孝文帝の命により創建された。

―その後、六世紀初頭に、インドから菩提達磨が渡来し、少林寺にて九年間壁に向かって、座禅をし、中国禅の開祖となる。達磨は、シルクロードではなく、インドから海を渡り、中国の南方より洛陽に至った。

―また六世紀には北周の武帝による仏教・道教の二教の廃毀により仏教の抑圧があった。少林寺の僧もこの抑圧から逃れるため、洛陽に避難した。しかし、隋の文帝は、北周に代わって陳を併合することで、西晋以来の中国の統一を成し遂げる。そして、仏教を中心に据えるほどの仏教中心の宗教政策、いわゆる仏教

治国策を展開することとなる。

—唐朝における武則天は、妖僧薛懷義（せつかいぎ）を重用し、一種の恐怖政治を行うなど問題が多いが、熱心な仏教信者であった。この時代に洛陽は東の都として定められ、近くの少林寺には皇帝が、度々訪れるようになり少林寺は最も栄えた。この当時の少林寺の土地は、約九万三千平方キロメートルあり、寺院の敷地面積は三六〇〇平方キロメートルあった。また僧侶の数は、二千人以上で、部屋数は五千以上あったという。現在の少林寺のスケールとは比較にならない。

—元代の初期、世祖クビライは曹洞宗の五十二世雪庭福裕（せつていふくゆう）禅師を少林寺の住持に任じた。雪庭福裕は戦乱で破壊された嵩山一帯の仏教寺院を修復するとともに曹洞禅の教勢を張った。それ以降、華北地方の曹洞宗の大きな拠点となっ

た。

「つまり、クビライは、チベット仏教を保護し厚遇したけれども、少林寺に対しては、禪宗を擁護したということですか？」と恭子が訊いた。

「そうです。クビライの時代には、いくつかのチベット仏教の寺院が建てられました。それらが中国仏教と融合したということとはなかったのではないのでしょうか」

「しかし、チベット密教は、中国を介して日本まで伝わりチベットと同じような広がりを見せています。チベット仏教やチベット文化もそれなりに中国で広まったのではないのでしょうか？」

「それは、唐代のことではないのでしょうか。密教が中国に入ってきたのは、三、四世紀ですが、特に唐代には、インドから善無畏（ぜんむい）、金剛智（こんごうち）などの僧が来中して『金剛

『頂経』系密教を紹介し、インドの代表的な純密經典が伝えられました。それらを基礎にして、中国の密教が確立し受容されるようになったのです。ただし、この唐密教は、唐の衰退とともに衰退してしまいました」

「失礼しました。そうでした。真言宗、天台宗が日本に伝来したのは、唐代のことでした。もう少し、広く考える必要がありますね」

こうして、初日の調査は、瞬く間に終わった。

夕食が終わり、松田は恭子と宿舎のロビーでお茶を飲むことにした。

「やっと長い初日が終わったね。どうですか初日の感想は？」

「なかなか期待したような発見はすぐには見つからないですね」

恭子は思ったような発見が難しそうだとやや落ち込んでいた。

「そうだね、さっきあなたが言っていた密教だけど、日本に伝わった密教は、陳さんの話では、チベットを介して中国に伝わったのではなく、直接インドから伝わったと言っていたね。でもまだ始まったばかりだよ。君の曼荼羅の手がかりも見つかるといいね」

「そうですね。インドで作られた曼荼羅が、チベット、中国、朝鮮半島へと伝わる過程でいろいろな曼荼羅が作られています。そこにそれぞれの民族の文化の融合が現れていると思うのです。明日からの調査が楽しみです」

一転して熱く語り始めた。

「先ほどは少しがっかりしていたようだけど、すぐに気持ちを切り変えられるところがいいね」



## 体験修行二日目

昨日と同じように鈴の音を聞いて、四時半に起きた。ジョー・ジ・ベーカーが、ルワン・バンダラナイケに話しかけた。

「ルワン、あんたは、少林寺武術をやったことがあるのではないか？ 昨日の武術教練で見た限り、相当な腕前のようにだ」

「いえ、私は、少林寺武術は初めてです。ただ、南インドで広く行われているカラリパヤットという武術を長年やっています」

「なるほど、それで我々素人とは、動きがまったく違うわけだ。

そのカラリパヤットの達人がどうして、少林寺武術の体験修行などに参加したんだ？」

「言い伝えによると、達磨大師が、禅の修行に耐えられるように

心身を鍛えるわざとして南インドで行われていたカラリ・パヤットを少林寺に伝えたと言われています。本当だとすると、カラリ・パヤットと少林寺武術には共通点があるはずだと思っのです」

「なるほどな、武術にも伝播と融合のようなものがアジアにあるわけだ。学、お前は、武術には興味がないのか？」と松田に訊いてきた。

「いえ、僕も日本の空手を長年やっていて、武術には興味があります。ただし、残念ながら、今回は、学術調査が目的なので、時間の多くを調査に当てたいと思っています。」

事実、松田は、大学の空手部に入って以来、今でも大学の道場に通っているのだ。

「なんだ、二人とも武術の専門家なのか。俺が、負けそうになったら助けてくれよ」とベーカーがおどけて言った。

ルワン・バンダラナイケは、それを聞いて、にやっと笑った。松田は、その笑いに少し違和感を覚えたが、それ以上気にならなかった。結局、皆が他では体験できない少林武術の体験が、この体験修行の大きな目的なのだろうと思った。

身支度の後、宿舎の隣の建物で座禅をする。指導僧の話では、もう少し慣れてきたら、境内の禅堂での座禅を体験してもらいます、とのことであった。座禅が終わった後、同じように全員で境内まで歩いて大雄宝殿に向かった。まだ朝早く昼間の熱気はなく、清々しい。大雄宝殿に着くと、昨日と同じように、末席に横に並んで座った。劉永信方丈が、二人の共の僧を従えて入って来て、仏前での儀式の後、読経が始まった。しかし、今日は、練習した『般若心経』が唱えられることはなく、松田らは、足のしびれを気にしながら大合唱の読経に聞き入っていた。隣に座っ

ている恭子は、正面に置かれた三体の仏像を睨み付けるようにして、読経が終わるのを待っているようである。

読経が終わり、最初に方丈が退席されるのだろうと思ったが、今日は方丈が立ち上がると、座っている全員の僧に向かって、講話を始められた。方丈が立ち上がって、こちらを向かれたとき、二人の供の僧もこちらを向いて座った。

「今日は、『観無量寿経』についてお話します。『観無量寿経』という経典は何が真実であり、又、人間とはどのような存在であって、その真実と人間がどのような関わり合いをもつて一つのものになっていくのか、ということを表わしています。人間とは一体どういう存在なのか、真実とは何なのか、この人間がもし真実である仏に、あるいは仏教の教えに本当に出会っていくということはどういうことなのか、そこで何が起るのか、起ってくるこ

とにはどのような意味があるのか、仏と人との相互の関係がどのように変容していった人が救われ真実は成就するのか、この經典にはこのようなことが明らかにされているのです。

經典には、第一に、「人間とは何か」ということが述べられています。これは、この經典のみならず、仏教の最大のテーマであることはもちろんです。人間とは何か。私達が教えを聞いていくのは、人間とは何か、私とは何かという、私の本当の姿に目覚めていくことなのです。その目覚めていく行き方が問題です。自分で自分を見つめて、いわゆる自分を反省して、それで自分というものが明らかになりそうなわけだけでも、しかし人間というのは、そのようなやり方で自分が分かるという生き物ではない。自分で自分を見つめて自分が分かるというようには決してならないのが人間なのです。

人間の特徴は「怨む」ということにある。その怨みはとても深いものであり、単に生まれてから後に怨みの意識を持ったという浅いものではなく、生まれる前から持っていたと言えるほどに深いものなのだ、それほど人間の持つ怨みは根強い、ということを表わすのだと思います。それを未生怨というのです。・・・・・・・・・・」

松田は、これは、かなり長くなるなと思いつつ興味深い話に耳を傾け、方丈の顔を眺めていた。そして、方丈のすぐ隣に座っている二人の共の僧にも自然と目が移る。方丈の左側に座っている僧は、目を半眼にしてまるで座禅をしているようである。何か冷たい目をしているなと思った。右側の僧はきりっと目を開き、前を向いて座っている。ぼんやりと、二人の僧を見ていたが、突然、松田の脳裏に衝撃が走った。方丈の右側に座っている背が

高く、がっしりした体格の僧の顔に見覚えがあると思った。今度は、すっかり目を凝らして若者の顔を凝視した。

—そうである。

東京でヤマ・ツェリンから受け取った封筒の中にあつた写真の若者に似ていると思った。写真の若者は、今まで会つた中国人に比べて、とても優しい目をしていたのが印象的であつた。今、松田らに向かつて座っている青年も、他の僧に比べて、澄んだ優しいような目をしている。松田の心臓は、鼓動が聞こえるほどに高鳴つた。

「……、この経典はそのことを分かりやすく一つの物語で現わします。頻婆娑羅（びんばしゃら）王と韋提希（いだいけ）に子供がなかなかできなかつた。特に王室ですから、世継ぎの子供が欲しい。占い師を呼んで見てもらうのですね。すると、王舎城

の領地の山の中に一人の仙人がいて、寿命があと三年程ある。三年たつて亡くなるとあなた達の子供として生まれ変わってきますよ、という予言をするわけです。これを聞いて王様は喜ぶ。けれどもその三年が待てない、今すぐ子供が欲しい。それで家来を山に遣わして、占い師の話を告げて、王様の願いだから今すぐに死んでほしいと言う。仙人は勿論死にたくはありませんから抵抗する。けれども、家来は殺してしまうのですね。仙人が死んでゆく時に、占いどおりに王様の子供として生まれ変わってくれば、大きくなったら必ず王様を殺してやる、と言って死んでゆくのです。それで案の定、王様の子供として生まれ変わるのです。……」

松田の耳に方丈の声は聞こえているが、講話の内容はもはや上の空である。しかし、方丈の講話は続いている。



「……。しかし、頻婆娑羅王と韋提希は、生まれてきた子供を恐れて、殺そうとするのです。ところが、子供は、小指を骨折しただけで生き延びるのです。そして、ここに提婆（だいば）という釈尊の従兄が登場する。提婆は、成長した王子である阿闍世（あじやせ）に出生の秘密を打ち明けてしまう。阿闍世は、自身の両親である頻婆娑羅王と韋提希を捕らえ、牢に入れて餓死させようとするのです。」

ここまでの話は、人間がいかに未生怨にとらわれた存在であるかという話ですが、本題は、これからです。捕らえられた韋提希は、釈尊に救いを求めるのです。牢の中までこられた釈尊に対して、韋提希は、

『世尊、我昔何の罪ありてか、この悪子を生ぜる』

『世尊、また、何らの因縁ありてか、提婆達多と共に眷属たる』

世尊、即ちお釈迦様に対して、『私にこれまでどんな罪があつてこのような悪い子が生まれたのですか。また世尊よ、あなたは一体どういうわけで提婆の眷属（親戚）なんですか』と言つた。つまり釈尊に愚痴を言つて救いを求めたのです。これに対し、釈尊は、黙して語らず、韋提希が、真摯に自分を見つめ、懺悔し、真に慈悲の力を認め、その慈悲に対して、どうか人生の本当の生きる道を教えて下さいと言つたのを待たれました。

私達は教えを真剣に聞いていって、そこに明らかになつてくるこの世界には、二つの内容がある。一つが、私とは何であるかが明らかになること。もう一つは、阿弥陀仏が何であるかが明らかになること。自分が明らかになる。明らかになつた自分はどういう自分か。これまでも自分とは何かとそれなりに考えてきた。しかし、阿弥陀仏という真実なるものを相手にしないと、自分が

何であるかは明らかにならないのです。だから私たちにとって、  
仏教の教えを聞くことに意味があるのです。この教えが鏡です  
からね。鏡の前に立たないと自分が見えない。教えの鏡の前に立  
ち続けて見えてくる自己、それが本当の自分です。自分の真の正  
体です。阿弥陀の教えの前に立って、私たちは初めて自己の本当  
の姿に出会う。それは、その真実である阿弥陀をまったく無視  
し、謗しつて生きている私であったということなのです。

韋提希も、配慮に配慮を加えられたお釈迦様の教えを聞いて  
ゆきながら、ついにこのことに目覚めるのです。自己の真の姿に  
出会うのです。それは同時に、その自己を抱いて立ち上がった阿  
弥陀の大いなる慈悲の心にまた出会うのです。教えに照らされ  
る自己というけれども、ただ自分が何かの光に照らされている  
だけということはありません。照らされている大きな光の世界

の中に私がいるのです。私が照らされるといふことは、照らす大いなる光があるのです。その光の世界の中に私がきちっと位置づけられている、そのことに目覚めるのです」

講話が終わり、方丈の退出に合わせて、二人の共の僧が立ち上がった。松田は、背の高い僧を凝視している。立ち上がると全身が目の中に入り、写真の僧であるという確信に近い思いはさらに大きくなった。方丈が二人の僧を連れて退出した後、整列していた僧も、それぞれ退出しようと立ち上がった。何かにとらわれたように黙って座っている松田に、

「どうしたんですか？ 終わりましたよ」と恭子が声をかけた。「ああ、そうだね」と言っていてゆっくりと立ち上がった。

「私は、中国語が分からないので、ひたすら終わるのを待っていました。そんなに興味のあるお話でしたか？」

「ああ、そうだね」

「ああ、そうだね、ではないでしょう。ぼんやりして、どこか体の調子が悪くなったのではないですか？」

「いや、大丈夫だ。少し考え事をしていたのです」

恭子は、何か不審そうに見つめている。

松田は、朝食の前に、宿舎の部屋に急ぎ戻って、荷物の中の写真の封筒を探した。ヤマ・ツェリンから受け取った封筒は、スーツケースの一番下にあるはずである。手早く、衣類などをどけて封筒を取り出す。中の写真を出して凝視する。「やはり、」と思った。先ほど見た青年僧である。

その後、松田は、どうしたものかと考えをめぐらし、恭子から話かけられても上の空である。しかし、恭子と上海で話をしたよ

うに、ゲンドウン・ニマの件に首を突っ込むのは危険である。いつ誰に監視されているかわからない。中国の公安はもとより、上海では、香港警察の潘警部に会った。ここは、やはりこの件には、触れないでおこうと思うのであるが、現実に写真の青年と対面してしまうと、ラン・ソナムがわざわざチベットから東京まで訪ねて来て頼まれたということも重く受け止めなければならぬとも思うのである。

午後になり、昨日と同じ時間に、陳美帆が来た。写真の青年に  
関して思いめぐらしていた松田の思考は、一時停止した。

「今日から、少林寺と周辺の遺跡群をご案内します。今日は、まず大雄宝殿と藏経閣をご案内します。」

そう言って二人を境内に連れて行った。大雄宝殿は、朝の「早課」

のために、すでに二度来ている。しかし、末席に座って読経を聞いていただけで、大雄宝殿の由来、中の仏像の説明などは受けていない。

「お二人とも、すでにここで朝晩の勤行をされたと思いますが、大雄宝殿は、本寺院の仏教活動の中心的な存在になっています」大雄宝殿は、山門を入って、天王殿を超えたところにある壮大な建物である。三人は、宝殿を正面から入り、正面の仏像を指しながら、陳美帆は、説明を続ける。

「中央の仏像は、沙耶世界の釈迦牟尼仏、左側は、東方淨琉璃世界の薬師如来、右側は、西方極樂世界の阿弥陀仏です。ご存知のように、釈迦牟尼仏は、仏教の開祖ゴーダマ・シッタールタを仏として敬った名前です。また釈迦の法号は、「大雄」でありまして、そこからこの寺院の名前がつけられたことは、容易に考えら

れますね」

「座っている三体の仏像の間に、二体の立った仏像があります  
が、あの仏像は、なんと云われるのですか？」と恭子が聞いた。

三体の大きな仏像の間に、釈迦牟尼仏を補佐するように、立ち姿  
の小柄の仏像が置かれている。

「釈迦牟尼仏の左側が文殊菩薩で右側が普賢菩薩です。文殊菩  
薩は、偉大な知恵者で別名を大智文殊菩薩と言います。普賢菩薩  
は、偉大な普遍的価値の菩薩とも言われ、仏教の智慧をすべての  
生き物にもたらすように努められています。釈迦牟尼仏とこれ  
らの菩薩が一体となって三位一体を形成されていると言われて  
います」

「宝殿の正面の柱の横に、金色で顎髭をはやした像があります  
ね。あれは、仏像ではないのでしょね」と松田が訊いた。



「あれは、緊那羅王と言いまして、少林寺の守護神です。緊那羅（キンナラ）は、寺院の警護のひとりだったのですが、一三五一年に赤いスカーフをまとった賊が寺院を襲撃しました。寺院が赤いスカーフの賊に占拠されようとしたとき、緊那羅は、裏山に上り、『我こそは緊那羅王である』と大音声で叫んだのです。その姿がとてもこの世のものと思えぬほど巨大に見えて、襲った賊は、一目散に逃げたと言われています」

元王朝の末期に紅巾の乱というのがあった。これは、白蓮教の信徒を主体にした反体制派の農民の乱であった。これが発端となって、明の太祖である朱元璋が登場することとなるのである。世祖クビライ以来、元王朝の庇護を受けてきた少林寺は、その標的になったのだらうと、松田は思った。

大雄宝殿で一通りの説明を受けた後、三人は、その裏手にある蔵経閣へと石段を上がって行った。一旦、大雄宝殿を出ると、夏の太陽が照り付け、一瞬にして全身から汗が噴き出す。恭子は、日傘を持ってきていて、宝殿を出たところですぐに傘を広げた。暑い昼下がりで、観光客はまばらである。松田は、石段を登りながら、また今朝の青年の顔を思い出していた。青年は、六歳の時に、チベットで拉致されてから二十年以上にわたって、この少林寺で生きてきたのだろうか。彼は、どのくらい当時の記憶を持っているのだろうか。今、どんなことを思っているのだろうか。などなど、青年のことに気が向いてしまう。

石段を登り、蔵経閣の屋根の陰に入ったところで、陳美帆が、説明を始めた。

「蔵経閣は、その名のとおり經典を保管している資料室です。経

典の数は数万と言われています。また、この寺院の中には、七メートルもある釈迦牟尼の涅槃仏が安置されています。それでは、中に入りましょう」と言って建物の横にある入口に案内した。三人が入口に近づいた時、中から人が出てきた。黄色い僧衣をまとっている。劉永信方丈である。三人は、すかさずお辞儀をし、合掌した。そのときである。後ろから、

「……、守銭奴め、天中を食らえ！」と大声で叫びながら、男が走り寄ってきた。男は、走りながら棒のようなものを振り上げている。松田は、一瞬にして男の前に飛び出した。男は、走りながら松田の頭をめがけて棒を横に振った。松田は横に倒れながら棒をかわし、同時に男の足を左足で払った。男は、前に向かつて一回転して仰向けに倒れた。劉永信方丈は、突然のことで、啞然として立ち止まったままである。男が振り回した棒は運よく

届かなかったようである。男が立ち上がろうとしたところに、例のお供の僧が飛び出してきて、持っていた棒を蹴り飛ばした。同時に男の腹に、突拳を入れる。男は、腹を抱え、「ううっ」と呻いてうずくまる。

数人の僧が、蔵経閣の横の石段を駆け下りて来て、瞬く間に男をとり押さえた。一瞬のことで、恭子も陳美帆も何が起こったかわからないといった様子で、声も上げず茫然と立っている。例の僧が松田に近づいてきて、

「方丈が危なく襲われるところでした。本当にありがとうございます。中国人にはないようですが、どこの国の方でしょうか？」と訊ねてきた。

「方丈にお怪我がなくてよかったです。私どもは、日本から少林寺に学術調査に来ているものです」

「そうですか。重ねてありがとうございます。のちほど改めてお礼に伺います。」と言って、方丈を支えながら石段を登って行った。松田は、ついにゲンドウン・ニマではないかと思われている青年僧と会話をした。松田の心臓は、また大きく高鳴った。

夕食後、ロビーのソファに深く腰を沈めながら恭子が、となりに座っている松田に話かけた。

「それにしても、境内で暴漢に会うとは思ってもよらなかったわ。この少林寺で、武術修行をしている坊さんに向かって暴力を振るおうというのも無謀な輩だわね」

「そうだね、ここの僧侶は、皆が武術の達人だろうから、いくら棒切れを持っていても、素人が太刀打ちできる相手ではないと言えるかもしれないね。しかし、暴漢が何を言っていたのかよく

わからなかったけど、方丈に何か恨みを持っているようだ」

「人々に救いを与える僧侶に恨みを抱くというのは、よほどのことだね。何があったのかしらね」

「そうだね。僕にもどんな問題なのか想像もできない」

二人とも、少林寺の方丈が境内で暴漢に襲われるという前代未聞の出来事に、その理由など推測できるはずもない。

二人でお茶を飲みながら話しているところに、ジョージ・ベーカーが通りかかり、

「学、今日の午後、境内でたいへんなファイトがあったらしいな。大丈夫だったか？」と声をかけてきた。

「ああ、大丈夫ですよ。方丈が暴漢に襲われそうになったのですが、方丈も怪我をせずに済みました」

「そうらしいな。まったく、少林寺の境内で方丈を襲うとは、ど

んな輩なんだろうな」

「そこなんですよ。人々から尊敬こそされ、恨みを買おうような僧侶というのも考えにくいと話していたところですよ」

ジョージ・ベーカーは、少し考えた後、松田の前のソファに腰を掛けながら、

「今の少林寺は、我々のような外国人に門戸を開き、広く仏教を広めようとしている。しかし、一方で、このような事業をすることで、けっこうな収入を得られる。まだここに来て、数日しかたないが、ここの僧侶らは、お茶の販売やその他にも農産物、手芸品の販売など、普通の寺院と違って、「事業」をするのに大きな精力を使っているように見える。その事業のことでトラブルが起こったとも思える」

少林寺が広範囲のビジネスをやっていることを話した。

「ジョージ、あなたは中国の事情にえらく詳しいですね。たしかに、僕たちの作務は、境内の掃除など仏教の修行の一環といえるけど、僧侶たちは、商品の製造や販売に忙しそうにしているように見えますね」

「どんなやり方で商品を作ったり、販売しているかだが、僧侶だけでやるには限界があるわけで、一般の人や会社を巻き込んで大々的にやっている可能性があるな」

「そうだとすると、朝晩に座禅をしたり、読経をしている姿はどうとらえればいいのかしら」と恭子が、不審そうな顔をした。

「いや、ここの大多数の僧侶は、宿坊に寝起きして、きわめて誠実に決まった課題をこなしているだけだろう。問題は、方丈と数人の幹部の考え方ではないのかな」

ベーカーは、大々的に事業をしている方丈に問題があるのでは



ないかと推測しているようである。そのように考えると、方丈が外部の人から恨みを買うことがある可能性も出てくるかもしれないなど、松田も思った。

三人でそんな話をしていると、玄関のドアが開き、不意に例の僧が入って来た。松田らを見ると、そのまま三人に向かって進んで来る。松田は、またも心臓の鼓動が聞こえるほどの緊張感に包まれた。松田の前に来て、

「松田先生、私は、游慶仲と申します。劉永信方丈の秘書をしているものでございます。今日は、方丈の命を助けていただきありがとうございます」と言った。

「いえいえ、命を助けるなどと大げさなことをした訳ではありません。お氣遣いいただく必要などありませんよ。方丈は元気にしておられますか？」

「はい、元気にしています。あのとき、もし暴漢の一撃を受けていたら方丈はどうなっていたか分かりません。大変感謝しております。そこで方丈自ら松田先生にお礼を述べたいと申ししております。つきましては、明日の夜、方丈室までお越し願えないでしょうか？ 食事を用意しますので、お礼かたがたご歓談くださいませ。高嶋先生もご一緒にと申しています」

「そうですか、たいそうなことをしたわけではありませんが、わざわざ足を運んでいただいたのを断る道理はありませんね。それでは、明日の夜に伺わせていただきます」

そう答えながら、またこの游慶仲に会えるチャンスが出てきたと密かに思った。

「ありがとうございます。では、明日、六時半にお越しください」  
丁寧な礼を言って游慶仲は帰って行った。松田は礼儀正しく好

感の持てる若者だなと思ひながら後ろ姿を見送った。

中国語の分からない恭子とベーカーは、松田と游慶仲が何を話していたのか分からない。

「あの人、昼に暴漢を打ち倒した人よね。何を言ってきたの？」

「今日のお礼に、明日の夜、夕食に招待されたのだよ。君も一緒にね」

「おお、それはすごいことね。楽しみですわ」

恭子は劉永信方丈に会うことができ、しかもご馳走までいただきけそうだと聞き大いに喜んでゐる。

これらの会話の間、玄関の外の暗闇の中から窺っている人影があるのを、三人はもとより游慶仲も知る由はなかった。

## 体験修行三日目の夜

三日目の調査として、陳美帆は、昨日は暴漢騒ぎで案内できなかった蔵経閣の中を案内した。彼女によればここにある数万点の古経は、いまだ十分な調査が行われておらず、今後どんな発見があるか分からないということであった。この話に松田も恭子も色めき立たずにはおられない。しかし、大量の古書を目前にして、ほとんどが十分に整理されているとは言えず、外国人の二人が取り組むには、荷が重いと感じざるを得ない。もしやろうとするなら具体的な目的を持って正式に少林寺に要望を出す必要があるであろう。そして、そのためには十分な時間と労力をかける覚悟を持つ必要があると思った。

陳美帆の案内による調査が終わった後、松田と恭子は一旦宿舎に戻った。約束の六時半までには、一時間以上あった。松田は部屋に戻って、ヤマ・ツエリンから渡された封筒からラン・ソナムに頼まれた手紙を出してみた。これを手渡す絶好の機会が来たのかもしれないと考えていたのだ。しかし、それを誰かに見られたら、大きな危険にさらされる可能性がある。松田には、手紙を持っていくかどうかためらいがあった。

松田と恭子は、六時に宿舎のロビーで待ち合わせて、境内の方丈室へ向かった。すでに太陽は西の山の頂きに沈みかけており、境内の街灯に灯がつけられている。方丈室は、昼に案内してもらった蔵経閣の裏側にある。蔵経閣の横の階段を上がっていくと、

上がった先に広場があり、幾つかの建物が広場をコの字型に囲んでいる。登ってきた階段を振り返ると、空は夕暮れで赤く染まっているが、空の下に広がる遠くの山並みは真っ暗になっており、たくさんの光が灯った街並みが遥か下の方に見える。広場を進むと、中央に「方丈」と書かれた額が掲げられた大きな建物がある。これが方丈室であろう。ほかの建物と同様に建物の周りには柵で囲まれており、建物の中に入るには建物の横にある扉から入って行く。

入口は広く、何人もの僧侶が出入りしている。その中の一人に、

「您好、松田と申しますが、游慶仲さんとお約束があつて参りました。游慶仲さんと呼んでいただけないでしょうか？」と声をかけた。しばらく入口で待っていると、游慶仲が現れ、

「わざわざお越しいただきありがとうございます。さあ、どうぞ」と二人を中へ案内する。

建物の中は、いくつもの部屋に分かれており、それぞれの部屋で僧侶が仕事をしている。つまり、この建物は方丈室とはいえ、この寺院のオフィスなのだろうと、松田は思った。廊下を進んだ先の奥の部屋に案内された。中には、十人くらいが座れる円形のテーブルが置かれている。松田と恭子はそれぞれの席に案内された。部屋には、壁一面に金箔を使った仏画が描かれており、方丈の権威を示しているようである。席に座ってしばらくすると、黄色の僧衣をまとった劉永信方丈と五、六人の僧が入って来た。

方丈が入って来たと同時に松田と恭子も席から立ち上がり、方丈のところに歩み寄った。

「よくいらしてくださいました。昨日は危ないところを助けていただきありがとうございます。たいしたお礼もできませんが、今宵はゆっくりお過ごしください」

方丈が、二人に再び席に座るように促した。

方丈の右側に松田、左側に恭子が座った。松田の右隣には、二人の老僧、さらにその隣に游慶仲、その隣に方丈のもう一人の共の僧、その隣に同年代と思われる青年僧、そしてまた老僧、その隣が恭子となる。全部で九人の夕食ということのようである。

劉永信方丈は、近くで見ると老僧という感じではなく、小柄でふくよかな若々しい顔をしている。おそらくまだ四十代後半か五十代前半だろうと、松田は推測した。たいへん闊達なもの言いの人である。方丈が、全員を紹介する。松田の右側から、劉生輝、萬科峰、游慶仲、呉国林、黄富強、梁文建で、黄富強は、英語が



話せるとのことであった。恭子のための通訳として同席しているのだろう。全員が紹介されている間に、次々と前菜が回転テーブルに運ばれてくる。一通り紹介した後、松田に向かつて、

「今日は、何を飲まれますか？」と訊いた。

「お茶をいただきます」と松田が答えると、

「せっかく日本から来られた先生との晚餐ですから、中国のお酒はいかがでしょう」と、禅寺の方丈が勧めてきた。そして、

「小游、五粮液を持ってくるように言ってくれ」と言った。小游というのは游慶仲を目上の者が呼ぶときの言い方である。

テーブルには、白酒用の小さいグラスが配られていく。

「先生、ここでお酒を飲むのでしょうか？」

恭子が呆れ顔で訊いた。

「そのようだ。まあ、郷に入ったら郷に従えというからご相伴に

あずかろう」

「でも、仮にも私たちは仏教禪の修行に來ているのですよ。出家修行者がお酒を飲むというのは戒を破ることですよ」

松田と恭子が、日本語で話をしてしている内容を察したのか、方丈が法話のようなことを言った。

「不飲酒戒というものがありますが、これは酒を飲むこと自体を戒めているのではなく、酒によって墮落し、悪を行うことを戒めているのです。あまり案じられず、晚餐を楽しんでください」

松田は、これは詭弁と言うべきじゃないかと思ったが、

「分かりました」と素直に答えた。

その間に、全員のグラスに五糧液が注がれ終わっていた。方丈が、グラスをかかげて、

「昨日は、私が危うく暴漢に襲われそうになったところを、日本

から来られた松田先生に助けられました。今宵は、先生に感謝申し上げるために小宴を用意しました。松田先生、高嶋先生、そしてこの皆の健康を祈り、乾杯しましょう。乾杯！」と乾杯の音頭とった。

皆も続いて「乾杯！」と言った後、一気にグラスを空けた。五糧液は、四川省の有名な白酒で、アルコール度数が六十度とかなりきつい酒である。グラスを空けると、またすぐに注がれる。ただし、三人の青年僧は断った。

「松田先生、改めてありがとうございます」  
そう言って、方丈が松田に向かってグラスをかかげた。

「どういたしまして。ご無事で何よりでした」と言って、二杯目を空けた。

乾杯をしている間に料理がテーブルに並べられた。方丈から

勧められて、お皿に盛られた料理を少しずつ自分の皿に取っていく。鄭州では、鯉の料理が有名なのだという。客人をもてなすように方丈が松田に話しかける。

「松田先生は、大学の教授とのことですが、武術も相当な腕前なのですね。どんな武術をやられているのですか？」

「いや、たいしたことはありません。日本の空手を学生のころから練習していますが、少林寺の方々に比べたら、素人同然です。」

方丈も少林武術の鍛錬をされているのでしょうか？」

「いや、私はからきしだめです。少林寺は、武術で有名な寺院ですが、全員が武術の達人というわけではありません。そもそもは、健康増進のために始めたものが修行のひとつとして取り入れられたのです。ですから強い、弱いは二の次なのです。何か言い訳をしているようですね。はっ、はっ、はっ、はっ、」

「松田先生、昨日は方丈を助けていただき、ありがとうございます  
ました」

右隣の劉生輝老師が、グラスを松田に向けて掲げた。再び全員で乾杯をする。中国の宴席では、誰かが誰かにひとこと言っては乾杯する。

「松田先生は、少林寺に学術調査で来られたと聞いていますが、どんなことを調査にこられたのでしょうか？」

「ご存知のように、仏教はインドから中国を経て日本に伝わったわけですが、その間の中国仏教の変遷が日本の仏教にどう影響したのかに興味を持っています」

少林寺の幹部たちを前にして、チベット文化との関係については、あえて触れなかった。

「中国の仏教は、一世紀に伝来したと言われていますが、サンス

クリット經典から漢訳經典に至るまでに政治的、民族的な影響を受けています。当寺には、古い經典がたくさんあります。参考になるのではないでしょうか」

今度は、萬科峰老師が話しかけてくる。

「そうですね。実は先ほど、蔵経閣の中を案内してもらいました」

「それはよかった」と言って、またグラスを掲げる。

ひとこと言っでは、グラスを空けるといふ中国流の晚餐が続いている。恭子も方丈や隣の梁文建老師から話しかけられ、それを黄富強に英語で通訳してもらっている。ただし、通訳の黄富強はもとより、他の二人の青年僧も、明らかにグラスに茶を入れて乾杯しており、完全に素面の状態である。

晚餐が始まって一時間くらいが過ぎたころ、松田が、

「手洗いに行つてきます」と言つて立ち上がった。

「小游、松田先生を案内して差し上げなさい」

方丈が、游慶仲に案内役をするように指図した。

松田は、游慶仲に連れられて、薄暗い廊下を手洗いに向かった。

少林寺の夜は早い。それぞれのオフィスに、すでに人の気配はない。

「游さん、」

松田は前を行く游慶仲に声をかけた。振り返つた游慶仲に小声で話しかける。

「少し、あなたにお話しがあるのですが、手洗いの中まで一緒について来ていただけませんか？」

不審そうな顔をしたが、游慶仲は言われたように手洗いの中ま

で付いてきた。そして、意を決して、話をした。

「私は、あなたに渡さなければならぬ大切な手紙を預かってきました。あなたは、本名をゲンドウン・ニマというチベットで生まれた方だと信じてこの話をしています」

「えっ、」

游慶仲は、小さく反応して、しばらく黙って浅田の顔を見た。明らかに動揺している様子で口を開いた。

「あなたは、なぜ私がチベットから来たことを知っているのですか？」

松田は、間違いでなかったことに対する安堵感が身体全体に伝わるのを感じると同時に、拉致されたのが幼い頃であつても記憶は残っていたのだと思った。

「これは、あなたの伯母さんからの手紙です。後で、じっくり読



んでください。当然ですが絶対に他の人に見られてはいけません」

そう言って、ラン・ソナムから預かった手紙を渡した。

游慶仲は、何が起こったのか信じられない様子であったが、手渡された手紙を持って、すぐに晚餐会の部屋に戻って行った。

手洗いから戻って、席に着いたところで、

「今日は、たいへんなご馳走をいただき、ありがとうございます  
た」と方丈に言うのと、

「とんでもありません。命を助けていただいた上に、日本の有名な大学教授と交流ができて、私にとってこんなうれしいことはありません」と言って、グラスを掲げる。

こうして晚餐は、さらに一時間以上続いた。

游慶仲は、何事もなかったように先輩老師の話し相手になって

いた。

## 体験修行四日目

松田は、朝起きた後も、昨日のことを再び思い返していた。晚餐では、強い酒で乾杯をかさねたことで、かなり酔っていた。しかし、手洗いに行ったわずかな間に手紙を渡すことができた。手洗いに行くまでの間に、人とすれ違っただけではいかなかった。従って、誰かに見られたとは考えられない。何度も昨夜の出来事を振り返って、自分を納得させていた。

朝起きたとき、ジョージ・ベーカーが、

「昨夜は、えらくご機嫌なご帰宅だったな。俺もご相伴にあずかりたかったな。やはり、劉永信は少林寺の住職というより、少林

寺株式会社の社長というところだろう」と皮肉を込めて言った。  
「そういう一面もあるだろうが、少林寺は最も高名な古刹であることに変わりはないし、方丈の国際化の政策のおかげで我々外国人も体験修行できるわけでもある」

「一杯飲ませてもらって、えらく住職の肩を持つようになったな」

「そういうわけではないが、歴史的価値のあるものが多くあるので、その中からひとつでも新たな発見があるかもしれないと思っている」

「そうだな、アメリカでも禅文化が西洋文化に対比して考えられていることで、俺もここに来たわけだから、それだけを考えることにするか」

何げない会話をしながら、二人で四日目の朝の勤行に出かけた。

それにしてもジョージ・ベーカーというのは考古学の研究者だと言っていたが、日本の考古学者のイメージとは違うなと思う。

朝の勤行の後、境内の掃除をする。このため宿舎から境内まで全員がそろって歩いて行く。しかし、勤行の時にいた恭子が、集合時間になっても来ない。松田が、女性の宿坊まで入って行くわけにもいかず、来ないまま出発した。先導する僧侶は、全員がそろっているかどうかは気にせず、「時間ですから参りましょう」と言った。外国人の気まぐれくらいに思っているのだろう。松田は、どこか体調がすぐれないのではないかと心配になってくる。恭子と同室の白人女性に、

「恭子が来ていないのですが、部屋にいましたか？」と訊いてみた。

「私は、朝の勤行の後、そのまま食堂に行って、食事の後も他の女性とお話ししていたので、部屋に戻らなかったの。部屋にいたかどうか分からないわね」

もう一人の同室の女性に話かける。すると、

「朝食を彼女と一緒にして、部屋に戻ったけど、彼女は、しばらくして部屋を出て行ったわね。それから彼女を見ていないわ」  
ひとりで何処かに出かけて行ったようである。松田に話もせず  
に長時間出かけていくような女性ではないと思うと、一気に心配がつのってくる。

作務が終わっても恭子は現れない。作務の後、宿舎の建物に戻った時に、先ほどの同室の女性に部屋にいるか確かめてほしいと頼んだ。

「部屋にはいないわね。どうしたのかしらね」

しばらくして戻った彼女は、そう言うのみであった。

その後の座禅、仏教教練になっても現れない。すでに何度か恭子の携帯に電話したが、電源がきれているようであった。ただし、この体験修行の間は、携帯電話を使わないようにと言われているので、携帯電話の電源が切れていても、それ自体はおかしなことではない。しかし、松田に何も連絡をせずになくなるというのは、やはり異常である。

早々に昼食を済ませ、ロビーで待ってみるが、帰ってこない。

天井の大きな風車が午後の部屋の熱気をかき混ぜているが、いっこうに涼しくはない。じりじりした時間が一時間になり、さらにもう一時間が過ぎた。調査のために陳美帆が現れる時間である。さらに三十分が過ぎた。陳美帆の携帯に電話する。これも電

源が切れているようである。これはもう異常事態である。

体験修行の世話係で英語の話せる李好蘭を探した。英語が話せるということで、恭子も頼りにしていた僧である。宿舎、隣の禅堂、教練室などを見てまわるが、そもそも、宿舎の建物にはほとんど人気がない。この時間には、ほかの連中は武術教練に出かけており、世話係も同伴しているのであろう。

松田は、昨日案内された蔵経閣に行ってみることにした。夏の太陽が照り付ける中を、山門を抜け、天王殿、大雄宝殿と坂を上がっていく。汗が滴り落ちる。蔵経閣の入口まで来て、中にいる数人の僧に向かって声をかける。声に気づいて、ひとりの僧が出てきた。

「您好、体験修行に来ている松田と言いますが、ここに一緒に参加している高嶋という女性が来ていないでしょうか？」

「ああ、昨日ここの經典をご覧になつていた方ですね」

松田らのことを覚えていたらしい。しかし、

「今日は、まだ見えていませんね。どうかされましたか？」

逆に不審そうな顔をする。

「では、昨日一緒に来た陳美帆さんを見かけませんでしたか？」  
「いいえ、彼女も今日は見ていません」

さらに、昨日と同じ蔵経閣の横の石段を登つて、方丈室まで行った。入口で中にいる僧に声をかけ、恭子が来ていないか聞いた。しかし、体験修行で来ている外国人の来るようなところではないというようなことを言われた。確かに、その通りである。

「では、游慶仲さんにお会いできませんでしょうか？」と訊いてみた。聞かれた僧は、何か不審そうに松田を見た後、

「彼は今、方丈と一緒に出掛けていると思います」と素っ気な



かった。

仕方なく、方丈室より上方にある立雪亭、千仏殿などを探して歩いた。しかし、まばらな観光客以外に恭子の姿はなかった。松田は、山門に向かって下りながら、恭子の失踪は、昨日自分が、游慶仲に手紙を渡したことと関係があるのだらうかと思わずにはいられなかった。もしそうであれば、どうということだらう。手紙を渡したのは、松田であり、恭子は知らないことである。狙われるとしたら松田自身であらう。

ひよっとして、恭子が何食わぬ顔で帰っているかもしれないと思いつながら、宿舎の建物に引き返した。ロビーには皆が集まってソファに座って話をしている。すでに、「晩課」の読経の時刻になっており、他の連中は出かける準備をしていたのだ。しか

し、その中に恭子の姿はない。もう一度、李好蘭を探してみようと建物内を歩き回る。しばらくして玄関まで戻ってくると、玄関の横の事務室にいるのが見えた。小走りで事務室に入って行く。「李さん、朝から、高嶋がいないのですが、何かご存知ありませんか？」

「ああ、松田さん、高嶋さんなら朝の勤行が終わった後、どなたかに呼ばれて、初祖庵に行ってきたと言って出かけられましたよ。松田さんには言われずに出かけられたのですか？」

李好蘭はすんなりと言って松田の顔色を窺った。その様子から李好蘭が失踪に関連しているようには見えない。

初祖庵というのは、少林寺の敷地の中にある尼寺である。少林寺の敷地といっても、少林寺の横の山道を嵩山の峰に向かって四十分ほども登ったところにある。

「まだ帰ってこないなので私も初祖庵に行ってみます」  
松田は晩課を休むことを告げ、急ぎ足で初祖庵に向かった。

### 方丈住居

同じころ、劉永信方丈と游慶仲が方丈住居の応接室で向かい合っていた。方丈住居というのは、その名の通り、方丈室の西隣りにある方丈が個人的に起居している建物である。游慶仲は、昨日松田からもらった手紙の内容について、ずばりと聞いた。

「方丈様、今日はお願いがあり時間をいただきました。子供のころチベットの私の家に強盗が入り、両親が亡くなった。それで私は、この少林寺に預けられ、仏の道を歩むことになったと、方丈様から聞かされて、今まで修行に励んでまいりました。しかし実

際には、あのととき私の両親は生きていた。そして父は、残念ながら昨年亡くなったとのことですが、母は存命とのことです。一目なりとも母に会いに行かせていただけませんか？」

「小游、お前何を言っているのだ。どこでそんなことを聞いたのだ。そんな根も葉もないことに惑わされては禅の道は究められんぞ」

「いえ、これは母の姉からの情報です。私が何者で、なぜチベツトから遙か遠くの少林寺に連れてこられたかも分かりました。二十年にわたり、私を手元において育てていただき、方丈様には感謝しています。しかし、真実が分かった以上、少林寺の修行以外に私のなすべきことがあると今は思っています。まずは、とにかく母に会いたいと思います。どうかお許しをいただけませんか？」

「お前は、ここを出て行くというのか。出て行っても、お前の居場所はどこにもないぞ。小游、もう少し冷静になって考えてみようではないか。どこでその情報を得たのかわからんが、それはおそらく人違いだと思う。お前の両親は、チベットで商店を営んでいたと言われる。そして二十一年前の夜に強盗に襲われた。両親は、その場で殺され、金目のものを奪われた。そのとき、幼かったお前は殺されずに済んだが、強盗はお前を平原に連れて来て、農家の人手として売りつけようとした。その頃は、どこでもそのような子供の人さらいが横行していたのだ。しかし、幸運にも、まさに売られようとしたときに強盗どもが捕まった。そして、この華北の平原で行き場所のないお前を、この少林寺で預かることになったのだ。これは、そのときに警察から聞いた話で間違いない」

「私は、このお寺に来た時に六歳でしたが、自分の名前は憶えています。ゲンドウン・ニマというのが私の名前です。伯母からもその名前あてに情報をよこしています。中華人として生きていくために方丈様から游慶仲と言う名前をいただきましたが、私は、これから本名で生きていきたいと思っています」

「小游、冷静になれと言っているだろう。母の姉からの情報と言ったが、そのおなごが、本当にお前の伯母だと言えるのか？ ニマという名前は、チベットでは珍しい名前ではないと聞いています。そろそろ、晩課の時間だ、お前は、もう一度わしが言ったことを考えてみる。晩課には来なくてよい。禅堂に行つて、冷静に自分を見つめてこい。夕食の後、もう一度話し合おう」

そう言つて、方丈は一人で大雄宝殿に向かつて出て行つた。

晩課に来なくてもよいと言われた游慶仲は、ひとりで禅堂に向かった。禅堂は、方丈室の石段を下りた左側にある。当然であるが、禅堂には誰もおらず、一人で壁に向かって座禅に入った。座禅をしながらもう一度考えてみた。

―昨夜、松田という日本人から手紙をもらった。その手紙には、「ゲンドウン・ニマ様、

私は、あなたの母親フティール・パサンの姉のツエリン・チュドウンと申します。チベットのツェタンという町で暮らしています。あなたとあなたの両親が誘拐されてすでに二十一年になります。誘拐された後、私たちは必至で行方を捜しましたが、見つかりませんでした。これは、後で分かったことですが、この誘拐は中国政府による謀略だったのです。

一九八九年にチベット仏教の最高峰であるパンチエン・ラマ

一〇世様が亡くなられました。その同じ年にあなたが生まれま  
した。そしてその六年後にあなたがパンチエン・ラマー〇世様の  
生まれ変わりの転生靈童であるとお告げが、ダライ・ラマ様か  
らもたらされました。そのまま行けば、あなたがパンチエン・ラ  
マー一世としてタシルンポ寺の座主になるはずでした。ところが  
が、ダライ・ラマ様と敵対する中国政府は、それを拒否して、強  
引に別の少年をタシルンポ寺に送り込み、パンチエン・ラマー  
一世として即位させたのです。そして、邪魔になったあなたとあ  
なたの両親を拉致したのです。

拉致された後、どこにいるのか、あるいは亡くなっているのか  
と常に案じてきました。ところが昨年、たまたま私たちの知り合  
いが、重慶を訪れたときにチベット人の男性の葬儀に会いまし  
た。そして亡くなられた人の妻と話をしたところ、名前をプティ



ー・パサンと言ったのです。亡くなった男性は、ヤマ・サンポと  
のことでした。もうそれは、あなたの両親に間違いありません。  
しかし、二十年以上たった今でも公安の監視があり、容易に今の  
ところから抜け出せないとのことでした。夫が亡くなった今、プ  
ティー・パサンも五十歳を越え、あなたに会いたいと必死で願っ  
ています。もし叶うのであれば、重慶にある「拉薩」というチベ  
ット料理店を訪ねてください。

この手紙を日本人の松田先生に託します。私の占いによれば、  
松田先生は、チベットで古くから伝わる「東方より来り難局を打  
開するパウオ」です。先生を信じてください。

ツェリン・チュドウンよ

り」とあった。

—この手紙には自分の本名のほかに両親の名前があり真実性が

ある。

—驚いたことに、自分がパンチエン・ラマー〇世の生まれ変わりであると書いてあった。転生靈童という考え方にすんなり従うことはできないが、チベットと中国政府の対立の現状を見れば、自分が今ここにいるのは強盗、誘拐などではなく、中国政府による拉致であったことは十分に考えられる。

—とすれば、劉永信方丈はそのことを十分に承知しているはずである。簡単にこの寺から出すようなことはしないはずである。それが、先ほどの会話で裏付けられたともいえる。

—とにかく母が生きているならば、何としても会いに行こう。

—しかし、考えてみると、自分は常に方丈のそばにいて寺の修行、仏教教義の解釈など内部のことだけに専念してきた。寺がやっているビジネスはもとより、寺の外の人たちと密接に交わ

ったことがない。つまり、寺の外に頼れる者はいないということだ。何とかして、自分の力で、手紙に会った重慶の料理店に行くしかない。

游慶仲は、そこまで考えてから禅堂を出て、自分の寮房に向かった。寮房とは修行僧のための宿坊である。山門から千仏殿まで天王殿、大雄宝殿などの壮大な建物が三五〇メートルに渡って山肌に立ち並んでいるが、寮房は、それらの建物の両裏側、つまり両側の塀にそって、二〇〇メートルにわたって建っている。

### 初祖庵

そのころ、松田は森に囲まれた参道を登り、初祖庵の山門にたどり着こうとしていた。すでに夕刻で、森に囲まれた寺院は、夕

闇が迫っていた。山門の前には整備された長い石段があり、その横に「初祖庵」と書かれた石碑が置かれている。汗をぬぐいながら、山門をくぐると、正面に三体の仏像が置かれた大きな仏殿がある。さらにその奥には多くの小さい宿坊らしき建物といくつかの仏殿が雑多に並んでいる。この寺院は、最初は北宋のころの一―二五年に創建され、補修・再建が繰り返されてきたと言われているが、すべてが少林寺より古い感じがする。

暗くなった寺院には、人影がない。仏殿の端にあるいくつかの裸電球が地面を照らしているが、よく見ないとつまづくほどの暗さである。最初の大きな仏殿の横を通り、さらに先へ進んで行く。そのとき、前方の大きな木の裏から突然、男の声が出た。

「松田先生、やっといらっしやいましたな」

松田は、ぞっとして声のする方を見ると、人が木の裏から出てき

だが、暗くてよくわからない。人の影が近づいてきて、電球の灯りの中に入った。

「あなたはっ、」

思わず叫ぶように言った。現れたのは、方丈のもう一人の供の僧である。たしか、呉国林という名前であった。そのとき、さらに三人の僧が、暗闇から現れた。

「待っていましたよ。高嶋先生もお待ちかねですよ」

呉国林が松田の顔を覗き込むようにしながら言った。僧侶とは思えぬその言い方に、恐怖で身が凍る。

「高嶋は、一体ここで何をしているのですか？」  
そう言うのがやっとだった。

「どうぞ、いらっしやればわかりますよ。さっ、どうぞ  
有無を言わせないような威圧感である。」

松田は、四人に取り囲まれるようにして、促されるままに進んで行った。宿坊と思われる小さい建物のひとつに促され、呉国林が先にドアを開けて入って行く。続いて松田も中に入った、その途端、

「先生、助けて！」

叫ぶ恭子の声が聞こえた。

松田は、薄暗い室内を見まわした。部屋の壁に沿って、いくつかの椅子が並べられており、そのひとつに恭子が座らされている。よく見ると、恭子は両手を後ろ手にして縛られ、足も足首のところで縛られている。

「恭子、いったいどうしたんだ。大丈夫か？」

すぐに恭子に近づこうとするが、その瞬間、呉国林が右手で松田の動きを制しながら、

「松田先生、どうも全体の状況がまだ理解できていないようですね。あなたは日本人のくせに中国の問題に深入りしすぎたのです。高嶋先生ともども消えていたただかなくてはならないのです。どういふことか分かっていますよね？」

松田は、頭の中が白くなつていくのが分かった。昨日の夜、游慶仲に手紙を渡したのがこの連中に知られてしまったのだ。愕然としてゐる松田に、取り囲んでいた三人のひとりが突然、わき腹に一撃を入れた。肋骨が折れたかと思うほどの激痛に前のめりに倒れ込んだ。続けて、顔を目掛けて反対方向から蹴りが飛んできた。なんとか転げまわつてよけたが、立ち上がろうとしたところへ、鳩尾に蹴りが入った。息が詰まって倒れ込む。そこに顔を目掛けて蹴りが飛んできた。両手でブロックしたが間に合わず、一瞬にして意識が遠のく。

しばらく時間が過ぎて、松田は意識を取り戻した。顎と腹に激痛が走り、思わず、「ううっ、」と口走る。手を動かそうとするが動かない。床に転がされたまま、両手が後ろ手に縛られているのだ。ぼんやりした松田の後ろから、恭子が声をかけてきた。

「気がついた？ 大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。まだ生きているらしいな」

恭子の声の方を向いた。と、その時、部屋の隅から呉国林の声が飛んできた。

「やっと気が付いたようだな。まだ死んでもらうには早いのだよ。まずは誰の指図で少林寺に来たかから話してもらおう。直に話してもらわないとその高嶋先生が痛い目に会うことは、すでに分かっているのだからな」



他の二人が恭子に近寄った。

「待て、恭子に手を出すな！」と叫んだ。そして、

「お前らはいったい誰だ？ 方丈の秘書と聞いたが、ただの秘書ではあるまい」

呉国林に向かって言い返した。ここまできて、松田も度胸が据わってきた。

「俺たちが何者かだと？ そんなことを聞いてどうするのだ。ここまできて、まだ十分に状況が分かっていないようだな。ではまず、誰に頼まれてここに来た？ 言え！」

強い口調で声を上げた。

「話すから、恭子には絶対に手を出すな」

急場をしのぐには事の経緯を話すしかないと考え、香港で起きた出来事のことを話した。

「私は二カ月ほど前に、香港で国際フォーラムに出席していた。そこで、偶然に張春雷という人に会った。そして、彼から手紙と写真を受け取り、写真の男にその手紙を届けてほしいと依頼された。それだけだ」

東京のガンデンポタンでのことは言わなかった。

「香港の出来事のこととは、我々も知っている。しかし、張春雷がお前に会ったのは、ほんの数秒だった。ここに来る理由をしゃべる時間はなかったはずだ」

松田は、頭に衝撃が走るのを感じた。この連中は、自分が張春雷に会ったのを見ていたのだ。つまりあの時、香港のホテルのバーで待ち伏せしていたのはこの連中だったのか。そして、張春雷を殺したのもこの連中の可能性が高い。呉国林は、さらに続ける。

「その後、誰かに事の詳細を聞いて、わざわざ少林寺まで来たの

だろう。誰から話を聞いたのだ？」

「ほかの誰にも話など聞いていない。香港で話を聞いたのが最後だ」

そう言うと同時に、松田のわき腹を蹴った。またも激痛が走る。

「まだ、分からないのか。その女の腕をへし折れ」

ほかの三人が恭子に掴みかかろうとする。

「待て、やめろ！」

激痛の中で松田が叫んだ。とその瞬間、突然部屋の電気が消え、真っ暗になった。

「くそっ、なんだ」

呉国林が大声を上げた、その時、「カーン」と棍棒で殴る音がして、一人が床に倒れる音がした。そして、さらにまた殴られ、何かのガラスの装飾品の上に倒れたのであろうか、「ガラガラッ」

という大きな音が響き渡った。夜目に慣れている者とそうでない者では暗闇の中では大きな違いがある。

「とにかく、電気を付けろ！」

吳国林が、自分で部屋の壁のスイッチを探った。建物のブレーカーが落ちているので、壁のスイッチでは灯らない。

すると、見知らぬ者が、松田に近づいてきたのが分かる。

「私に付いて来て」

女の声が言い、ナイフで素早く紐を切った。続いて恭子の紐を切る。

「早く！」

女は暗闇の中を給仕室に通ずるドア開け、二人の手を引いて給仕室に誘導する。入ると、すかさずドアをロックする。給仕室を横切って、勝手口のドアをけ破る。三人は、山門に向かって全速

力で駆けた。

### 少林寺脱出

同じころ、方丈住居では、方丈が夕食後に游慶仲と先ほどのことを再度話すべく応接室で待っていた。方丈は、游慶仲がゲンドウン・ニマであることは十分に承知している。劉永信は、名だたる老僧らを差し置いて、弱冠二十三歳で少林寺の住職になった。その後、河南省政協委員、中国仏教協会理事など数々の役職を歴任し、今では中国人民代表にもなり、中国仏教界に君臨していると言っても過言ではない。

そんな彼が中央から依頼されたゲンドウン・ニマの件を引き受けられないわけはなかった。中国政府としては、拉致した後に闇に

葬るといふ選択肢もあったが、万一露見した場合のリスクを考えた。一方で、洗脳した後、一般社会の中で中国人として成人させるという考え方もあったが、情報が制限できない時代の中では、これもしスクがある。そこで、中国人民代表でもある劉永信に預け、一生を修道僧として歩ませるということにした。劉永信は、念には念を入れて、ニマを秘書として手元に置き、他の僧との交流を最小限にし、さらにニマの監視役として同年代の呉国林を同じく秘書として置いた。従って、呉国林の役目は、ニマが無用に外界の人間と接触しないようにすることと外界の人間がニマに連絡をとることを監視することである。

昨夜は、不用意に松田という日本人がニマに接触する機会を作ってしまった。呉国林の話では、松田がニマに何かを手渡したようだ。先ほど、急に「少林寺を出て母親に会いに行きたい」と

言った。おそらく何か母親に関する情報を渡したに違いない。何とかして、説き伏せなければならぬ。

夕食が終わって、すでに二十分以上が経つ。隣の方丈室まで行って、オフィスで働いている僧に、游慶仲を見つけて、方丈住居まで来るように言ってくれと言った。頼まれた僧は、游慶仲の宿坊に出かけて行った。しばらくして戻ってきて、

「宿坊に姿がありません。近くの宿坊も見ましたがいませんでした。どこにいったのでしょうか」と首をかしげている。方丈は、これはひよっとして自分で出て行ったのかもしれないと瞬時に思った。

「お前、数人で手分けして探して、わしのところに連れて来てくれ」と言ってから、

「ひよっとして外に出ているかもしれない。少々手荒なことを

してもよい。必ず連れて来てくれ」と指図した。

游慶仲は、すでに何とかして重慶まで行き、手紙に書いてあった場所に行こうと決めていた。具体的な方法はなかったが、とにかく寺を出て托鉢しながらでもたどり着けるだろうと思っていた。まずは、少しの荷物を持って、寺を怪しまれずに出奔することである。身の回りの物をリュックに入れて、旅支度をした。山門を夜になってから旅姿で出て行つては、誰かに見とがめられる可能性が高い。そこで、宿坊の裏の塀を乗り越えることにした。塀は三メートル以上あり、簡単には乗り越えられないが、塀に沿って植えられている樹木は、少林寺の歴史を伝えるほどに大木に育っている。

しかし、宿坊の裏口を出たところで、ひとりの僧に出会った。



「小游、そんな恰好で今頃どこへ行くんだい」

「方丈さまから美味しい瓜をいただいたので皆に分けようとしているところですよ」

そう言って、足早に離れようとした。そこを、方丈から游慶仲を探してこいと言われた僧が、見とがめて足早に向かってきた。それを見た游慶仲は、目標にしていた松の大木を目指して全速力で走った。

「慶仲がいたぞ」

その僧が大声で叫んだ。游慶仲は、もう引き返せないと思った。松の大木まで来て、枝に飛びついた。逆上がり非要領で枝に乗り、さらにその上の枝に上がる。枝から塀の屋根まではすぐ近くである。追手の僧が松の大木に迫ってきた。

「慶仲、馬鹿な真似はやめろ！」

追手が走りながら、大木の上を見て叫んだ。

かまわず、枝から屋根に飛び移る。そして塀の外に飛び降りた。塀の外は、街灯はなく、月あかりのみである。

塀の近くに、初祖庵に上る参道があり、それを下れば、一般道に出る。游慶仲は、参道の方角を目指して暗闇の中を一目散に走った。

游慶仲が参道に近づくと、参道の上の方から三人の人間が走って下りてくるのが見えた。一瞬、追手かと思い、身を沈めて、通り過ぎるのを待つ。三人がさらに近づいてくる。目を凝らすと、先頭の男は、なんと昨日手紙をくれた松田教授ではないか。そこで、游慶仲は、自然と体が動いて彼らの前に出た。

「松田先生、」

「わっ、游さんじゃないですか」

松田の足が止まった。なぜここに游慶仲がいるのか訳が分からない。

「止まったらだめ。走り続けて！」後ろで声がした。

「游さん、あなたもここにいたら危ない。一緒に駆け下りましょう」

後ろの声に押されて、咄嗟にそう言った。

四人が参道を二〇〇メートルほど必死で駆け下りたところで下の方から、何人かの僧が上がってくるのが見えた。

「恭子、危ないから森の暗闇に入れ。後一〇〇メートルもないから森の中を下の道まで下れ」

そう言って、下からの連中をやり過ぎそうとした。

「だめです。連中は、私を追ってきた者です」

その游慶仲の言葉に、三人が立ち止まった。とその間に、上から

追ってきた連中も迫ってくる。これでは、挟み撃ち状態である。

「おお、慶仲じゃないか。お前、今頃どこに行くつもりだ」

追いついた呉国林が息を切らせながら、游慶仲を見て笑った。

松田は、相手は多勢であるが、狭い参道で一度にかかってくるのは難しいだろうと思い、

「下に向かって走りながらひとりずつ片付けよう」と游慶仲に言った。

松田は、走りながら上がってくる僧に向かって飛んだ。月明りの中でひとりの胸に蹴りが入り、後ろ向きに階段を転がり落ちた。すかさず、登ってくる頭を目がけて回し蹴りを飛ばす。相手がよけようとして、バランスを崩したところを、走りながら突きを入れる。游慶仲は、もっとスピードを上げて駆け下りながら、下方の相手に次々と飛び蹴りを入れていく。相手がかわしても、そこ

に強烈な突き、蹴りを入れていく。彼らの走り去った後には、何人もが階段に倒れている。二人は、瞬く間に参道の入口まで下りてきた。後ろから、呉国林と三人の僧が追ってくる。

そのとき、車が参道の入口まで猛スピードで迫って来た。そして、

「早く乗って！」と大声で二人に呼びかけた。

すかさず乗り込むと車は音を立てて急発進する。車の後方で、  
「くそっ、絶対に捕まえてやる」

そう言って、悔しがっている呉国林の声が聞こえそうであった。車には二人の女が乗っていた。助手席に乗っているのは、恭子。運転しているもうひとりの女は、陳美帆であった。

車は、街灯のほとんどない山道を猛スピードで走っていく。登

封の町とは反対側に向かっていることは、初めて少林寺に来た松田にも分かる。しばらくして、胸の鼓動が治まってきたところで、

「陳さん、危ないところ助けていただき本当にありがとうございます。それにしても、我々が初祖庵にいることがよくわかりましたね？」  
陳美帆にお礼を言いながら訊いた。

「今日は、ちょうど初祖庵や他の寺院を案内しようとして午前中に少林寺に連絡を入れたのですが、そのとき朝方、高嶋さんがひとりで初祖庵に行かれたと聞いたのです。そこで初祖庵に連絡して、日本人の高嶋さんがそちらに伺っていますかと訊ねると、『そんな人は来られていません』という返事だったのです。そこで、午後になって私も初祖庵に行ってみたのです。着いてから、尼僧に高嶋さんのことを聞いたのですが、やはり分からないと

の返事でした。別の用事でどこかに行かれたのかと思って帰ろうとしたとき、先ほどの少林寺の僧が二人連れで山門を入れて来たのです。そして、すれ違いに、

『あの日本人の女は、声が・・・・・・・・・・・・・・・・』

『大丈夫、・・・・・・・・』

というような会話がわずかに聞こえたのです。そこで、その二人の後を付けたら、一軒の宿坊に入って行きました」

陳美帆が順を追って説明する。と、その横から彼女の話の遮るように、中国語の分からない恭子が、どういふことか分からず、日本語で松田に激しく問いかける。

「それにしても、一体全体どうなっているのよ。私は昨日の夜に、あの呉国林に『初祖庵』という尼寺があり、とても貴重な文化財があります。尼寺なので男性は入れませんが、あなただけなら

案内できます』と言われて、あの男に付いて行ったらあそこに連れ込まれて、いきなり拘束されてしまった。何が何だかわからな  
いまま、ずっと縛られていて、あのまま殺されるんじゃないか  
と、ずっと震えていたのよ。そもそも、あの男はいったい何者な  
のよ」

「その前に、初祖庵に行くときに、どうして僕に一言言わなかつた？ 朝から君がいなくなつて、えらく心配していたんだよ」

「ごめんなさい。だつてあの男が、あなたに言うつと絶対に一緒に  
行きたがるから、着いてから連絡した方がいいと言つたのよ」

「恭子、いずれにしても僕が悪かつた。申し訳ない。例の手紙を  
この人に渡したのが連中に分かつてしまったのだ」

「ええっ、手紙のことは忘れると言つたのに、渡してしまつた  
の！ ということはこの人が例のチベット人なの。だとしたら、



とんでもないことになったことになるのよ」

「そうだ、僕たちは中国政府のタブーに入り込んでしまった」

「もう、なんてことなの、生きて帰れないかもしれないわ、どうするのよ」

どういう経緯で自分が拘束され、監禁されたのか、やっと分かると同時に、またも恐怖が蘇り、恭子は泣きそうになる。

松田と恭子の日本語の会話は、おそらく陳美帆にはわからな  
いだろう。早めにどこかの小さい町まで送ってもらって、彼女と  
は別れた方が賢明だろう。しかし、着の身着のまま出てきてし  
まった。この先どうするか？ そう思ったとき、松田の心を見透  
かしたように、陳美帆が口を開いた。

「あなたたち、何も持たず、しかもその恰好でどうやって逃げる  
つもり？ 彼らはまだ追ってくるかもしれないのよ」

「しかし、あなたにこれ以上の「ご迷惑はかけられません。どうか  
適当な町まで行って下ろしてください」

陳美帆にそう言われても、松田は、関係のない彼女を大変なことに巻き込むわけにはいかないと思った。

「ご迷惑？ よく言うわね。私も連中に顔を見られた可能性がある  
あるし、朝方からいろいろ聞き込みしたので私の関与をすでに  
疑っているかもしれない。すぐに登封に帰るわけにはいかない  
わよ。こんなことになるかもしれないと思って、あなたたちの宿  
舎に行つてふたりのリュックを持ってきているわ」

「ええっ、僕たちのバックまで持ってきていただいたのですか。  
それは、本当にありがとうございます」

恭子に、陳美帆がふたりの貴重品の入ったリュックを持ってきて  
てくれていたそうだと話す。

「陳さん、本当にありがとう。私たち日本に帰れるかもしれませ  
ん」

運転している陳美帆の横顔を見ながら英語で礼を言った。少し  
は心が静まってきたようだ。

「いずれにしても、その僧衣の代わりにものを手に入れましょ  
う。そして何か食べましょう。お腹空いたわね。その時に、その  
坊さんの話も聞きましょう」

陳美帆はそう言うのと、さらにスピードを上げて山道を下りて行  
った。

三人の会話は耳に届いていたはずであるが、游慶仲は、自分のリ  
ュックを膝の上に抱えたまま一言もいわず座っていた。

## 重慶へ

少林寺を陳美帆の車で脱出した四人は、まず嵩山の山並みを越えて嵩山の北側にある白馬寺村に來た。すでに夜中であつたが、陳美帆が適当なホテルのひとつに車を回し、チェックインできるか聞きに行つた。そして、「大丈夫」との返事をもらつて戻つてきた。

「しかし、この姿で行つたら怪しまれないかね？」

松田は、もし何がしかの手配がすでに出ていたら僧侶の姿をしているだけで怪しまれるのではないかと思つた。ところが、

「ここは、白馬寺の門前町よ。全国のいろいろなお寺から僧侶が白馬寺を訪れるから、まったく問題にはならないわよ」

陳美帆に、そう言われるとなるほどと思う。だから、彼女はなんとかして、この白馬寺村を目指してきたのだらうと思うと同時に先読みのできる頼もしい女性だとも思った。

白馬寺は、中国最古の仏教寺院と言われ、全国重点文物保护单位に指定されている重要な寺院である。白馬寺の前の通りには数多くのホテル、レストランが軒を並べて全国各地からの観光客を受け入れている。来訪者は、一般の観光客だけでなく、多くの僧侶の姿も見られる。

部屋は、万一の場合を考えて、隣り合う二つのツインルームをとった。松田と游慶仲、恭子と陳美帆がそれぞれ同室になった。チェックインをした後、部屋に荷物を置いてホテルのバーに集合することにした。夜も遅く、レストランはとっくに閉店になっている。松田と游慶仲が先にバーに入って行った。中は薄暗く、

天井のミラーボールが全体の配置を浮き上がらせている。中央にバーカウンターがあり、その周りに十卓ほどのテーブルが並んでいる。二組の男女がカウンターに座って楽しそうに話をしている。游慶仲は、入った途端に、ぎょっとした顔をした。今までナイトクラブなどに来たことがなかったのだらう。ふたりは隅の方のテーブルに着いた。すぐに、ボーイが来て注文を聞いた。松田は、ビールとつまみのナッツを頼んだ。游慶仲は、「茶を、」と言ったが、「ない」と言われ、ソーダを頼んだ。松田が游慶仲と話すのは、手紙を渡した時以来である。

「游さん、僕は手紙の中身はよくわからないですが、ご自分がチベット人のゲンドウン・ニマさんであると確信されましたか？」松田がまず手紙のことを言って話を切り出した。

「私には一〇〇パーセントの自信はありません。しかし、幼い頃

にゲンドウン・ニマ、あるいはニマと呼ばれていた記憶は鮮明に残っています。いただいた手紙に母が生きており、母が私に会いたがっている」と書かれていました。方丈様から両親とも強盗に殺されたと聞かされていたのですが、いまだ健在だとのことです。今は手紙を信用して、母に会いに行こうと決めたのです。会えばすべてが分かるはずですよ」そして、

「それにしても、よくぞ伯母からの手紙を届けていただきました。本当にありがとうございます」

逃げてきた時の車中とはうって変わって、きちんと自分の考えを言う礼儀正しい好青年だと改めて思う。

そこへ女性二人が顔を見せ、恭子は松田の隣に座った。またすぐにボーイが来て注文を聞いた。二人ともビールを頼んだ後、陳美帆は、いくつかの料理を注文した。

「それで、少林寺の僧侶たちに殺されそうになったわけを聞かせてもらえる？ 私もあなたたちと一蓮托生になってしまったのよ。どんな悪いことをしたのかをね」

陳美帆が残りの三人に向かって冗談とも言えない言い方で尋ねる。

「陳さん、今日はほんとうにありがとうございました。これはもともと僕に原因があることなので、僕から説明します。これは、二十一年前にチベットで起こったある事件に発端があります。この事件は、日本では知ることができるようになりましたが、おそらく中国国内ではほとんど知られていないのではないかと思います」

松田が説明を始めると、そこに頼んだビールと料理が来た。



松田はビールを一口飲んだ後、ゲンドウン・ニマの拉致事件の概要を話した。そこまで話して陳美帆の顔を見た。

「そうね、もしそれが本当だとしたら、この国でそのことを知っているのは、北京のごく限られた人たちでしょうね」

陳美帆は、やはりニマの事件を知らないようである。

続けて、松田はあるチベット人の知り合いからニマの叔母からの手紙と少林寺にいる僧の写真を預かったこと、その写真の僧が游慶仲だと分かり、昨夜、預かった手紙を渡したことを話した。

「そして、その手紙にはなんて書いてあったの？」

游慶仲に向かって訊いた。彼は、先ほど松田に言ったのと同じことを陳美帆に言った。松田は、そのやり取りを黙って聞いていた。恭子に日本語で話した。すると、游慶仲がさらに話始める前に、

恭子が、

「これで私たちの役目は終わったのだから、さつさとこの国から出ましよう。うろろうろしていたらまた捕まって殺されちゃうわよ」といきり立って言った。

「そうだな、陳さんには申し訳ないが、なるべく早く帰国できるように考えよう」

松田が恭子に同調して言った。ところが、恭子がいきり立っているのを見た陳美帆は英語で、そう簡単ではないと言いつ出した。

「さつさと日本に戻りたいと思っているだろうけど、もし追って来た僧の中に公安の人間がいたとしたら、すでに情報が回っていて、空港であなたがパスポートを見せた途端に拘束される可能性があるわね」

「ええっ、そしたら、どうしたらいいのよ。この国の中をずっと

逃げ続けると言うこと？」

「しばらく様子を見てどうやって脱出するかを考えるしかないでしょうね」

「そんな悠長なことしていたら殺されるかもしれないのよ」

「中国は広い国でたくさん人間がいます。そんな簡単には見つけられないし、どうも重要人物と一緒にいるらしいから簡単には殺さないと思うわ」

そう言って、首を回して隣の游慶仲を見た。

「あなたって何者なの？ こんな状況でよく落ち着いていられるわね」

恭子がいぶかし気に訊く。

「私は、ただの中学の歴史教師です。ただ私の父が登封市の書記をやっているの。登封市の問題は、私の問題でもあるのよ。いざ

というときは父が助けしてくれるわ」

と言った後、游慶仲に向かって、

「それで、あなたのお母さんはどこにいるの？」と端的に訊いた。

「手紙には重慶にいと書いてありました」

「では、決まりね。とりあえず重慶にあなたのお母さんに会いに行きましょう。で、あなたたちはどうする？ 右も左もわからないわけだし、しばらく付き合うしかないでしょう？」

松田と恭子は顔を見合わせるが、すぐに分かりましたとは言えない。それを見て、游慶仲はすまなさそうにしている。

バーを出たところで、松田は恭子を呼び止めた。ほかの二人は、そのまま部屋に向かって歩いて行った。

「恭子、」と言った途端、恭子は声を上げて泣き始めた。松田は泣いている恭子を抱きしめた。恭子も松田の首に両手をまわしてさらに大きく泣いた。しばらく抱き合ったままいて、恭子の唇に唇を押し当てた。恭子もそれに応えるように顔を上げて強く抱きついてきた。そのまま唇を重ねたまま抱擁はいつまでも続いた。

「恭子、本当にごめんな。こんなことになって。でも絶対に君を日本に連れて帰るから、」と長い抱擁の後に言った。

「もう、あなたしかいないのよ。こんなところで死にたくないわ」と言ってまた泣き始めようとする。

「大丈夫、絶対に一緒に日本に帰るから」

自分にも言い聞かせるように言って、再び恭子を抱きしめた。

次の朝、ホテルを出た後、近くの洋服屋に行き、それぞれ好みのシャツとズボンを買った。恭子は数枚のＴシャツとブルージーンズなどを、松田はワイシャツ、Ｔシャツとグレーのジーンズを、游慶仲もＴシャツとブルージーンズを買った。僧衣から着替えると、やっと少林寺から解放されたような感じがした。ブルージーンズに着替えた游慶仲は背が高く、筋肉が青い格子縞のワイシャツの下から盛り上がっていて、とても僧侶には見えない。重慶に行くには、白馬村から西方に向かって西安に行き、そこから南下する。一〇〇〇キロ以上あり、一般道を行ったら何日もかかる距離である。

「もし、昨日の連中の中に公安がいたとしても、問題が複雑で、しかも外国人がからんでいるとなると、情報を回すとしても最小限のはずよ。問題が一般に知れることを避けるためには、警察

には流さないと思うわ」

と言う陳美帆の判断に従って、一般道ではなく高速道路を行くことにした。

白馬村を出た後、高速G30に乗って西に向かって走った。西安の中心まで行かず環状道路に入り、環状道路から高速G55に入って、ひたすら南下した。途中、陳美帆と松田が交代で運転した。松田は、何度も中国に來ている間に中国の運転免許証取っていた。万一、警察に尋問されても問題にならないはずである。

高速道路を運転しながら、陳美帆が游慶仲に、

「ところで、あなたのお母さんは重慶のどこに住んでいるの？」と訊いた。

「分かりません。手紙には、重慶の「拉薩」というレストランを

訪ねて来なさい、と書いてありました」

少し、考えてから、

「つまり、そこに誰かチベットの連絡員がいるということかしらね」と言ってから、

「たしかに、もし松田先生の言うことが本当なら、あなたの両親は監視されているわけで不用意にあなたが近づいたらどうなるかわからない、ということかしらね」と続けた。

松田は車の後部座席に座りながら、昨日のことを思い返していた。

—呉国林が恭子を誘い出したのは、自分を少林寺から離れたところにおびき出して恭子もろとも捕まえるつもりだったのだらう。

—それにしても、なぜ陳美帆はわざわざ恭子を追って、初祖庵ま



で行ったのだろう。初祖庵まではかなり長い参道を登る必要がある。単なる学術調査のサポート要員がすることではないのではないか。

—そして、我々を助けたときの手際は非常に良かった。普通の女性の中学教師の手際ではない気がする。

—また、車を初祖庵の参道の下に用意しておいたこと、さらに我々の貴重品の入ったりリュックを事前に宿舎から持ち出して来てくれたことなどなど、やはり普通の一般人とは考えられない。—彼女は一体、何者なのか。用心しなければ……—  
—と思いをめぐらした。

重慶の街の灯りが見えて来たのは、夜の十時を回る頃であった。高速を降りて近くに見えた高層ホテルに向かった。『重慶保利花園皇冠假日酒店』と大きなネオンがあり、その下に『Crown

Plaza Hotel』とあった。外資系のホテルなのかもしれれないなと松田は思った。陳美帆が、予約はないが部屋はあるかと訊ねた。「あります」との返事で、値段の交渉に入る。これは中国人同士でないとい外国人にはむずかしい。結局、日本円でひとり六〇〇〇円ほどでいけるらしい。夜も遅く、ホテルとしては空き室を埋められるチャンスなのであるが、易々とはデイスカウトに応じられないというジレンマをうまく交渉すれば安くなるのである。この日は、シングルルームにそれぞれ別々に泊まった。松田は、自分の部屋で恭子と抱き合った後、明日からの無事を願ってゆつくり休もうと恭子を送り出した。

## 再会

重慶は、北京、上海などと並ぶ中国の直轄市で人口は三〇〇〇万人に及ぶ。その都市部は約八〇〇万人の人口を抱える内陸部の大都市である。嘉陵江が長江に流れ込む合流点を中心に街が広がっている。重慶は、またの名を『陸の香港』と言われるように、嘉陵江と長江の合流地点から丘陵地帯が広がっており、丘の上から合流地点の中州に連なる高層ビル群を見下ろすと、香港の九龍から香港島を見るような絶景がある。

前の晩に「拉薩」というレストランをネットで調べたが見当たらなかった。四人は、朝食を済ませた後にチベット人が多くいると言われている地区に向かった。その地区は中心街から歌東公

園に向かつて坂を登ったあたりだということであった。重慶は坂の街である。街を歩いて散策するのは一苦勞である。まして今は真夏である。四川盆地の夏は気温が四〇度にも達し、しかも湿度も高い。それらしい地区に着くと、たしかにチベットの民芸品を売っている露天商がいくつか道端に見える。車を道路脇に停めて露天商に歩いて聞いて回る。すぐに汗が噴き出してくる。しかし、ひとりの露天商に話をする、「拉薩」はすぐに分かった。そこから、車で五分くらいのところらしい。

言われたように車を進めていくと、裏通りの右側に「拉薩」と書いたレストランがあった。チベット語は見えないが、外装にチベット風の飾りが施されている。陳美帆は、車をレストランの少し前に停めた。

「大勢で押しかけたら警戒される可能性があるわ。ここは、あな

だが一人で行って、出てきた人が信頼できると思ったら、正直に自分のことを言うしかないわね」

游慶仲に一人で言って確かめてくるように言った。

「そうですね、分かりました」

游慶仲もこれは自身のことであり、勇気を出して行かねばと思う。リュックを左肩にかけてレストランに向かって歩いて行った。だが、レストランはまだ開店しておらず、中は照明もなく薄暗い。

「您好、どなたかいらっしやいますか？」と声をかける。

「まだ、店は開いていない、後で来てくれ」

運よく中から声が出て、白髪で五十代くらいと思われる男が出てきた。男を直視しながら、

「いえ、私は店の客ではありません。実は、チベット人の母を探

して河南省の少林寺から来ました。重慶のこの店に来たら母に  
関する何かの手がかりがあると聞いて来たのです」と言った。

「なにつ、」

驚いた声を上げ、男は游慶仲の顔をじっと見た。そして、何かを  
思いついた様子で、

「そこのテーブルの椅子に掛けて少し待っていてくれ」

早口で言って店の奥に急いで入っていった。

暫くして、男は赤いＴシャツを着た若い女を連れて戻ってきた。

「您好、少林寺から来られたとのことですが、お名前は何と言われ  
れますか？」

女は、僧侶には見えない游慶仲に不審そうに訊いた。

「私は、河南省にある少林寺から来ました。少林寺では游慶仲と  
名乗っていましたが、私はチベット人です。ゲンドウン・ニマと

「というのが私の名前です」

それを訊いた女の顔からさっ—と不審感が消えたようであった。柔らかな顔になった女が続けて訊く。

「それで、あなたは誰かからの手紙を持っていますか？」

「はい、私の伯母と言う人からの手紙です。その手紙に重慶の「拉薩」というレストランに行くようにと書いてあったのです」  
そう言っ、リュックの中から手紙を出して見せた。女は、手紙を確認するように読みながら、

「この手紙を誰から渡されたのですか？」と訊いた。

「少林寺に学術調査に来ていた松田という日本人です」  
それを聞いて、女の顔は満面の笑みに変わった。

「まあ、ではうまくいったのね！」

そして、

「私は、ラン・ソナムと言います。その手紙を書いたのは、私の母親です」

これには、游慶仲も「ええっ、」と驚きながらも笑顔が広がるのが自分でも分かった。

「それで、私の母はこの重慶に住んでいるのですか？」  
さっそく母親のことを尋ねる。

「少し待ってください。ゆっくりお話ししましょう」  
そう言って、ラン・ソナムは、白髪の男にお茶を持ってきてくれるように頼んだ。彼女もはやる心を抑えて事の詳細を聞かねばと思う。

「ところであなたは、どのようにして少林寺からここまで来たのですか？ 住職にお話しされた上で、こられたのですか？」

「残念ですが簡単に許してくださる状況ではなかったので、強



引に出奔してきました。松田先生も私に手紙を渡したのが露見して、危ういところから難を逃れてきたのです」

「ええっ、では松田先生と一緒に逃げて来たのですか？」

「そうです。店の外に一緒に来た三人が待っています」

游慶仲の言葉を聞いて、ラン・ソナムはびっくりするとともに、嬉しさが一度に沸き起こってくる。

「ここは裏通りの店で、監視の目は届いていません。どうぞ、中に入るように言ってください」

游慶仲は、外に出て車のところに行くと、三人に今の話をした。最も驚いたのは、当然であるが松田であった。

「なにっ、ランさんが店の中にいるのですか！」

叫ぶように言って、言った鼻から車のドアを開けていた。游慶仲を先頭にして四人が店に入って行くと、ラン・ソナムが、松田の

顔を見るなり、

「松田先生、今度のことは本当にありがとうございます。なんとお礼を言ったらいいか分かりません。」「無事でなによりでした」

嬉しそうな顔で神妙なことを言う。

「ランさん、あなたは何処にも神出鬼没なのです。あなたの話に乗ったばかりに、えらい目に会いました。今や中国の中を逃げ回る逃亡者になってしまいました。何とかしてもらわなければなりません」

ラン・ソナムを責めながらも、わずかな安堵感と希望が湧いていた。

「先生、本当にすみませんでした。私たちの手で何としても先生をお守りします」と言った後、

「ところで、こちらの方々は？」と訊いた。

「彼女は、高嶋恭子。大学で同じ研究室で働いています。あなたが言った少林寺とチベット仏教との関係に興味を持って、一緒に調査に来ていたのです。こちらは、陳美帆さん。その調査を手伝ってもらっていました。登封の歴史の先生とのことですが、あなたからの手紙を游慶仲さんに渡したのが露見して、高嶋と私が殺されそうになったところを助けてくれた命の恩人です。やはり、游慶仲さんには厳重な監視が付いたのですよ。．．．」

皆を紹介しながら大変な苦労だったことを口にしようとした。陳美帆が中国人であると紹介したとき、ラン・ソナムはやや不審そうな目をした。紹介された二人は、「よろしく、」と簡単に言って、勧められたテーブルの席に着いた。

白髪の初老の男は、サンゲー・ダワというチベット人で、この

店の主人だとのことである。サンゲー・ダワが全員に茶を運んできたところで、ランが口を開いた。

「ゲンドウン・ニマ、よく来てくれました。そして、松田先生、改めてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。松田先生が日本を出発されると聞いていた日に、私もラサを出て、このダワさんにお世話になりながら、ニマが来るのをここで待っていました。きつと松田先生がニマを探して、手紙を渡してくださると信じていました」

游慶仲は、自分の母親のことが知りたくて、居ても立っても居られない。ランの言葉に割って入るように、

「すみません。唐突に遮って申し訳ありません。重慶にいるという私の母は健在なのでしょうか？ またどこに住んでいるのでしょうか？」

焦るように訊く游慶仲の気持ちは誰もが分かる。その気持ちに  
応えるようにランが優しく言った。

「ニマ、大丈夫ですよ。ただ、いろいろ監視されているので、あ  
なたが直接訪ねて行くわけにはいきません。すぐにでも会いた  
いでしょうけど、夕方まで待ってください」

その後、游慶仲が母親に会うための手筈の説明を受けた。

一時間ほど「拉薩」にいてラン・ソナムと話したあと、四人は  
ホテルに帰った。まだチェックアウトをしていなかったが、今の  
状況では少なくとも今夜も重慶に泊まることになりそうである。  
陳美帆がホテルのフロントと話した結果、このまま二、三泊はで  
きそうであるとのことである。とりあえず四人とも、さらに二泊  
することにした。

大きなホテルとはいえ、ロビーなどをむやみにうろつくことは、人目に晒すことになるので、部屋でランからの連絡を待つことにした。皆で昼食を食べた後、恭子は、松田の部屋に来て先ほどの話を振り返っていた。

「先ほどの話では、游さんの母親はまだ五十三歳でお元気そうだとのことだったわね。でも公安の監視が付いていて、游さんが会うのも難しい。とするとこの先どうするのかしら」

「そうだな、游さんが密かにこの重慶にいて、たまにこっそり会うくらいしかないのではないかな」

「でもあの人、少林寺の外のこととはまるで分らないわ。こんな大都会で生きていけるのかしらね。しかし、そんなことより私たちはこれからどうなるの？」

「まあ、偶然にしてもランさんに会うことができたわけで、彼女

のコネクションに賭けるしかないと思っっている」

「あなたは彼女と何回も会っているからそんなこと言うけど、結局のところ今回のことは彼女にいいように操られただけなのよ」

「君には、本当にすまない」

「すまないでは何の解決にもならないわ」

話をすることで不安から一時的に逃れるためのような会話が続いた。

午後四時過ぎにラン・ソナムから松田に電話があった。一時間後に鵝嶺公園（エリン公園）に游慶仲を連れて来てほしいと言っ

た。鵝嶺公園をネットで調べると中心街から一キロほど離れた山の上の公園であった。陳美帆の車で鵝嶺公園に向かう。夕方の時間帯に街の中心部に向かうのは、渋滞に渦に巻き込まれるために行くようなものであった。わずか一〇キロほどの距離をちよつど一時間ほどかかって、公園の駐車場に着いた。夕方であるが、この公園は中心街を見下ろすことのできる重慶の名所なのであろう、広い公園を多くの人が散歩をしている。そのとき、ラシから再び電話があり、公園の奥に池があるのでそこまで来てほしいと言ってきた。

公園は背の高い木が茂っていて奥まで見通せないが、樹木の間に舗装された小道が曲がりくねって延びている。何人もの



人々とすれ違いながら小道をたどって奥に進んで行く。しばらく行くと、池はすぐに見つかった。池を囲むようにベンチが並んでいる。そのベンチのひとつの脇にランが立ってこちらを見ている。四人が近づくと、ベンチに座っていた婦人が立ち上がった。空色のブラウスを着た小柄な婦人は不安そうな様子でこちらを見た。

「こちらは、プティー・パサン。ニマ、あなたのお母さんよ」  
ランが紹介する。遊慶仲が婦人の前に進み出て、顔を見つめながら、

「あなたが私のお母さん、」

感極まった顔で、さらに一步を踏み出した。と、その時、

「ニマ、あなたが私のニマなら大切な首飾りを持っていますか？」

婦人が游慶仲の顔を見つめながらそう訊いたのである。そして、  
「あのときも絶対にその首飾りをなくさないでと言ったのよ」  
「えっ、」

一瞬、游慶仲は戸惑いの表情を作ったが、間をおいて、

「持っていますよ。お母さん、」

そう言って、Yシャツのボタンをはずした。そこにはコインのようなものに紐を通した首飾りがあった。それを見て、

「おおっ、ニマ、あなたが私の可愛いニマよ」

婦人は、游慶仲（ゲンドウン・ニマ）に抱き着いた。ゲンドウン・ニマも小柄な母親を大きな両腕で抱きしめた。プティー・パサンの目は涙で溢れている。長い抱擁が続いた。ほかの人は、「ああ、本当によかった」と喜びながら見守った。松田も恭子も自分らが逃亡者であることを忘れて感動していた。

「ごめんなさい。あなたを一目見たときに、私の子供だと分かったけど、どうしても首飾りのことが気になったの」

長い抱擁の後で、プティー・パサンが言った。

「私はもう二度と私の子供には会えないと思っていました。本当にあります」

涙をぬぐおうともせず、他の人たちに礼を言った。

「私は、両親は強盗に殺されたと聞いて育ちました。今ここでお母さんに会えるとは夢のようです」

ニマも涙にくれている。そして、

「ここでは、長い話ができません。お母さんの家に行ってはいけませんか？」

ニマの言葉にラン・ソナムが、

「ニマ、分かっているでしょ、それは……」と言いかけたとこ

ろで、プティー・パサンが、話を引き継いだ。

「今すぐには、あなたと一緒に暮らせないのよ。でもいつか必ず暮らせるときが来ると思うわ。いろいろな方が支援してくださっているから。その前にあなたにはやらなければならないことがあるわ」

そう言った後、ニマの目を見ながら、

「あなたは、パンチエン・ラマー〇世の生まれ変わりなのよ。今チベットは大変な困難な状況に置かれているけど、それを救えるのはあなたなのよ。チベットには、昔から『シャンバラ』の伝説があります。シャンバラに行つて、金色の阿弥陀如来に一〇〇〇回の五体投地の礼拝をすると国中に光が満ち溢れると言われています。それを行えるのは、阿弥陀如来の化身であるパンチエン・ラマだけなのよ」

と、とんでもないことを言った。

「そんな伝説に従って、私にそのシャンバラに行けと言うのですか？」

「そうです。私は大まじめで言っています。あなたの持っているその首飾りは、歴代のパンチエン・ラマに受け継がれてきたもので、シャンバラへの道標だと言われています。このことを、私たちは二十一年前にダライ・ラマ様の使者から引き継いだのです」

「私は、パンチエン・ラマとして生きるよりあなたの子供として、あなたと普通の暮らしがしたい」

「さっき言ったように、一緒に暮らすことはできるわ。でもまずパンチエン・ラマとしての役目を果たすのよ。そしたらきつと、チベットに光が溢れて私たちにも幸せが訪れるはずよ」

ランが、この親子の話に割って入るようにして、

「ごめんなさい、今日はこのあたりにして叔母様の言ったことを考えてみて。あまり遅くなると、監視が変に思う可能性があるわ」

「まだ今あったばかりなのですよ。もう分かれるというのですか」

話し足りない嘆くゲンドウン・ニマを連れて、松田らはホテルに戻った。松田も恭子もニマの気持ち痛いほど分かるがいたしかない。

この親子の再会を近くの木陰から窺っていた人影があったのを松田らは気づくはずもなかった。

ホテルに戻って、四人で食事をしながらプティー・パサンの話を思い返していた。

「先生、シャンバラの伝説をご存知ですか？」と恭子が訊いた。こういう話題になると師弟に戻るらしい。

「ああ、聞いたことがあるよ。チベットにある地底王国と言われている。『カーラチャクラ・タントラ』というチベット密教の経典に書かれていると言われている」

「ということは、単なる昔から伝わる民話ではないのですね」

「真偽はどういうことか分からないが、ダライ・ラマは、シャンバラは幻想や何かの象徴ではなく、この世界に実在すると言っている。ただし、そこに至るには、徳を積んだ人しかたどり着けないとも言っているね」

このやり取りを聞いていたゲンドウン・ニマが、松田に質問する。

「松田先生はチベットの文化にお詳しいのですね。私は幼いこ

ろに少林寺に預けられ、禅宗の修行をしてきました。チベット人でありながら、チベット仏教に詳しくないのです。シャンバラがどうか言われても、何のことか分かりません。詳しくお教えいただけませんか？」

「いいですよ、こちらの高嶋もチベット密教に詳しいですよ。ところで、その首飾りを見せてもらえませんか？ シャンバラへの道標だと言っていましたね」

ニマは首飾りを首から外して、松田に渡した。恭子と陳美帆ものぞき込む。

五〇〇円玉よりひと回り大きなコイン状の円盤の真ん中に小さな穴が開いている。その穴に皮紐が付いているだけのシンプルな首飾りである。しかし、その円盤をよく見ると両面にびっしりと小さな模様のようなものが描いてある。小さすぎてどんなも



のか想像もできない。恭子が丁寧に携帯のカメラで撮影した。

「これでは、小さすぎて何が書いてあるかわかりませんね。明日、拡大機能を使って調べてみましょう」

そう言ってニマに返した。

その後、松田はまず歴代のダライ・ラマとパンチェン・ラマの話からニマに説明した。何か本人にその生い立ちを部外者、それも日本人が説明しているわけで、不思議な感覚を覚えながら話を進めた。

夕食後、松田は恭子をバーに誘った。ジムビームのダブルとウオッカのカクテルをそれぞれ注文した。

「とにかく、游慶仲がグエンドウン・ニマであると確認され、お母さんに会うことができた。目出度しではあるね」

「本当に、いつも呑気な人ね。私たちは逃亡者なのよ。いつ公安に見つかるか分からないのよ」

恭子の言うように現実の事態は深刻そのものであるが、松田はまだニマと母親が二十一年ぶりに再開できた感動が冷めやらな  
いでいた。

ウイスキーとカクテルが来たところで、杯をかざしながら、

「とは言っても、そんなに簡単に見つかるとは思えないから、目立たないようにして、ランさんの采配を待つしかない」

「また呑気なことを言う」

「ところで、あの首飾りの模様はどう思っかね？」

恭子の心配をよそにニマのことが気になって話を首飾りに移した。

「先生が言ったように、小さすぎて分からないわね。ただ、感覚

の話ですけど曼荼羅のようでもありましたね」

チベット仏教の話になると、恭子もそちらに興味に向いていく。

「なるほど、それはあり得るね。となるとあれを読み解くのは君の役目だね」

「また私を乗せてシャンバラの話に付き合わせようとしていますね」

と、話しているところにニマが青い顔をして入って来た。松田らを見つけると、頭を抱えて深刻そう顔で歩み寄ってきた。

「大変です！」

「ニマ、どうしました？ 顔色が悪いが、」

「首飾りを盗られてしまいました」と言うのだ。

「ええっ、先ほど別れたばかりで、首飾りを盗られたのですか？」  
「部屋に戻って、しばらくしたらドアのチャイムが鳴ったので

す。ドアを開けた途端、ガスを浴びせられて、そのまま気が遠く  
なってしまう。気が付いた時にはドアの内側に倒れてい  
たのですが、首飾りがなくなっていました」

「顔色が悪いですが、体は大丈夫ですか？」

「大丈夫です。意識がなかったのは、ほんの一瞬だったよう  
です」

「隣の陳さんには話をしましたか？」

「いえ、ノックをしたのですが出てきません。どこかに行っ  
ておられるようです」

「ほかに盗られたものは？」

「いえ、首飾りだけです」

バーを出てゲンドウン・ニマの部屋に行く。部屋は松田らの部

屋と同じで、ドアを入れて右側にバスルーム、その奥に大きめのベッドと小さいソファとテーブルが置かれている。ソファの上にはリュックが置かれているが、他に荷物は無い。

「ドアを開けたときに、相手の顔は見ませんでしたか？」

「いきなり、ドアの陰からスプレーで霧のようなガスを浴びせられたので、その瞬間に目をつぶってしまいました」

首飾りだけを狙ってゲンドウン・ニマを襲ったと言うが、首飾りの話を聞いたのは、ホテルにいる四人とラン・ソナムだけである。それとも、あの公園でほかの誰かが密かに聞いていたのであろうか。松田は陳美帆に電話した。しかし、「電源が切れているか、電波が届かないところにいる」という返事である。

隣の陳美帆の部屋に行き、ドアをノックする。いくら待っても、返事はない。三人は地下の駐車場に降りて、陳美帆のフォル

クスワーゲンを探した。こまめに探したが見つからない。犯人は陳美帆なのか。もう一度、陳美帆に電話してみるが、同じ応答しか返ってこない。

松田は冷静に事件を振り返ってみた。

ーゲンドウン・ニマの母親は、大真面目でシャンバラの話をして、息子にそこに行つてこいと言つた。ダライ・ラマもシャンバラは現実に存在すると言つたことがある。しかし、一般的に言つて、これはあくまで伝説・おとぎ話である。

ーそんな伝説の話をも真に受けて首飾りを盗むものがあるだろうか。

ーほかの意味があるとするれば、ニマの母親が言ったように、ニマがパンチェン・ラマ一世であることの物的証拠だということである。拉致事件からすでに二十一年の歳月が流れており、成人

したゲンドウン・ニマが本人かどうかという確証はDNA鑑定をすれば親子であることは、証明されてもパンチエン・ラマ一世である確証にはならない可能性がある。今頃になって、本当のパンチエン・ラマ一世が見つかったと言って、チベット人が騒ぎ出したら、中国政府としては困る。

一方で、ゲンドウン・ニマ本人は、還俗してでも母親と暮らしたいと願っている。それがうまくいけば、実際上は中国政府にとっても穏便に済ませられる。

しかし、母親やラン・ソナムらチベット人は納得しないだろう。二十一年もかかって、やっとパンチエン・ラマ一世を探し出したのである。

そして、陳美帆がいなくなった。犯人である可能性が高い。となると、今頼りになるのはラン・ソナムしかない。

松田は、ランに電話した。

「您好、ランさん、松田です。大変なことが起きました」

「えっ、どうされたんですか？」

「ニマが襲われて、首飾りを盗られてしまいました」

「なんですって、それでニマは無事なのですか？」

「大丈夫です。なにかのガスを吹きかけられて一瞬意識をなくしたのですが、今は元気にしています」

「それで誰に襲われたのですか？」

「分かりません。ただ陳美帆と現在、連絡が取れません。彼女がかかわったかどうかは分かりませんが、我々も公安から追われている身です。探す手立てがありません」

「まあっ、なんとなくあの中国人は不審な感じだったわね。でもニマが無事なので安心しました。今日は、もう遅いですから明日



の朝そちらに伺います」と言って電話は切れた。

次の日の朝、ラン・ソナムがホテルに駆けつけてきた。人目につかないように松田の部屋に案内した。部屋には、すでにゲンドウ・ニマと恭子が待っていた。部屋に入るなり、

「ニマ、大丈夫？」

姉が弟を心配するような目で訊いた。

「ええ、身体は大丈夫です。ただずっと身に着けていた首飾りを盗られてしまいました」

「よかったわ、とにかく無事で」と言った後、

「叔母さまには、このことはまだ言っていないの。昨日の様子は首飾りのことをとても大切に思っておられたので、盗まれたと言ったらたいへんなショックを受けられると思うのよ。とこ

ろで、盗んだのはあの中国人で間違いないのかしら？」

「はい、この事件以来、行方が分からなくなっているので可能性は大きいと思います。ただなぜ首飾りを彼女が盗んだかということですが、」と言って、松田は、昨夜考えたことを話した。つまり、首飾りを盗んだ目的は、それによってゲンドウン・ニマが、自分がパンチエン・ラマー一世であると主張しても根拠をなくすことになるのではないかということである。これに対してランは、

「それは、まったくその通りだと思います。しかし、シャンバラに関する話も無視できないと思っています。叔母さまが強く信じておられるだけではないのです。一九五九年にダライ・ラマ様がチベットからインドに亡命された後、毛沢東は大まじめでシャンバラの入口がラサのポタラ宮にあると考えて大搜索をした

のです。結局見つからなかったのですが、毛沢東の目的は、古代チベットから伝わる財宝がシャンバラという名で秘蔵されていると勝手に解釈して、それを見つけ出すことだったと言われています」

「私も、ダライ・ラマがチベットを去った後に、毛沢東がポタラ宮を攻撃し制圧して宮殿の中を荒らしまわったという話は聞いています。しかし、その中でシャンバラの搜索が行われたというのは、初めて知りました」

松田は、毛沢東の件とシャンバラの話が繋がっているということとは信じられないという顔をした。

「松田先生、これは事実です。以来、中国の権力者はシャンバラのことを忘れていないのです。ダライ・ラマ様がインドに亡命された後も亡くなられたパンチエン・ラマ様はチベットに残り続

けられました。中国政府は残られたパンチエン・ラマ様を当初は厚遇しました。これはシャンバラの搜索と関係があると考えられています。しかし、中国政府の弾圧政策に抵抗され、幾度も投獄されましたが中国政府に同調されることはありませんでした。その後、一九八九年に急死されたのですが、これも中国政府の関与が疑われています。そして、パンチエン・ラマー○世様の転生霊童としてゲンドウン・ニマが指名され、ダライ・ラマ様からいろいろな伝言が送られました。ニマと両親を拉致して別々に監視を続けてきたのは、ニマが抵抗運動の象徴となることを避けることとシャンバラに対して何かの動きを見せるのではないかと考えてきた可能性があるのです」

ランは、あくまでもシャンバラと関係がるのではないかと話す。「分かりました。で、ランさんとしては是が非でも首飾りを取り

返したいと思っっているわけですね」

問題はニマの首飾りが盗まれたことであり、とりあえず、ランに同調するように言った。

「当然、そうですね。しかし、問題は陳美帆が実際に何者なのか分からないということです。松田先生、何か探す手立てはないでしょうか？」と逆に訊いてくる。

「そうですね。もしシャンバラと関係があるのなら、あの首飾りの文様を解き明かして何とかしてそのシャンバラに行こうとするはずですね。であれば、こちらでも文様を解明してシャンバラの入口と思われるところに一足先に行くという手があるにはあります」

ここに至って、文化人類学の研究者としてシャンバラの伝説も少し探索してもいいかという欲望のようなものが出てきてい

たのである。

「でも首飾りは盗られてしまったのですよ。どうやって解明すると云うのですか？」

「高嶋が、昨日首飾りの写真を撮りました。それを見れば何かわかるかもしれませぬ」

「ええっ、そうなのですか。それでは早速見ていただけませんか？」

松田が、恭子にラン・ソナムとのやり取りを話すと、恭子が、呆れた顔である。

「何、それは、伝説を真に受けて本気で宝探しをするということ？」

「昨日も言ったように、ダライ・ラマは、シャンバラは現実に実在すると言っている。伝説で言われているような理想郷とは違

った形で何かがある可能性もある。とにかく昨日の写真を分析してもらえないかね」

「宝探しとは別に学術的興味ということなら、見てみましょうか」

結局、恭子にしてもどんなものか早く見てみたいという衝動には勝てないようである。

恭子はリュックからノートパソコンを取り出し、昨日、携帯電話で撮った写真をパソコンに取り込む。取り込んだままでは、拡大してもぼんやりして分析できない。これを写真の明瞭化プログラムを使って明瞭化する。肉眼では判別できなかった文様が浮かび上がった。周りで見ていたほかの三人からも「おおっ、と歓声に似た声が出る。あまりにも鮮明で細微な文様である。恭子は撮った写真をすべて明瞭化して部分拡大したり、全体を眺

めたりしていた。そして、

「この小さなコインにこれほど微細な文様を刻み込むことができたのだけでも不思議ですね」と言ってから、

「これは、色は付いてないけど、明らかに曼荼羅ですね。それも時輪曼荼羅と言われるものではないかと思えます。時輪曼荼羅というのは、チベット密教の中でも最高の奥義といわれる時輪経典というのがあって、それが基になっていると言われていゝわね。時空を超えて災いを払い、幸福と成功をもたらすと言われていゝます。つまり、時輪曼荼羅はチベット人が思い描くシャンバラのような理想郷を描いたものと言うことができるわけです。ただご覧ください。このコインの裏側は、曼荼羅のように見えるけど迷路を描いたもののようにも見える」と説明した。

「確かに八角形をした曼荼羅のように見えるけど、八角形の角



が揺らめきながら無数の線とともに真ん中の穴に吸い寄せられているような妙な文様だね。これは明らかに普通の曼荼羅ではない。これがもし道標だとしたらどう考えたらいいのだろうね。八つのマークのようなものが配置されているが、

そう言ったものの答えがすぐに分かるわけでもない。そのとき、黙って見ていたゲンドウン・ニマが、自分の見方を話し出した。

「仏教には、いろいろなシンボルがあります。たとえば一般的には仏舎利塔、法輪、蓮の花があります。他にも五つのシンボルがあり、全体を八正道と言います。これはお釈迦様の教えを分かりやすく伝えるために考えられたものと言われています。初期の仏教では、傘、金魚、法螺貝、蓮の花、旗、宝石鉢、法輪と宝結びがこの八正道と言われていました。たとえば、傘は人々を太陽の熱や雨から守ってくれます。仏教における傘は苦悩や有害

な力からの保護を意味しています。また、傘がもたらす涼しい木陰を楽しむという意味もあります。そのマークは、これらの八つのシンボルを表しているように見えます」

さすがに仏教の修行僧である。確かに、そう言われると、蓮の花や法螺貝のようにも見える。これを聞いていたランが、思いついたように口をはさむ。

「そういえば、チベットの寺院には礼拝堂の柱などにそういう図柄を描いている寺院があるわね」

「ということは、これらのマークはチベットの八つの寺院を表しているということか。なんか現実味を帯びて来たな」

徐々に謎の解明に近づいているように感じ、松田は少し興奮気味になる。ところが、ランがそれに水を差すように、現実的な難しさを口にする。

「でもこのマークからお寺を特定するのは不可能だわね。どんなマークがどのお寺に書いてあるかなど分からないし、あるとしたら全部のマークを書いているはずではないの」

確かに、いくつかの寺院に八つのマークが書いてあったとしてもそれを見つけて出すだけでも容易なことではない。そのとき、恭子が何かに気づいたように口に出した。

「先生が言うように、この文様は中央の穴に吸い込まれるように見えるわ。そして、最後のマークは、ニマが言った宝石鉢のように見える。宝石鉢というのは、おそらく富とか繁栄を表すのでしょう。つまり宝石鉢の寺院の近くにシャンバラがあるということにならない？」

そう言って、皆の顔を見た。

「つまり、寺院に図柄が書いてあるわけではなく、それぞれの寺

院を象徴するシンボルということか。しかし、宝石鉢の寺院と言われても、雲をつかむような話だな」

松田がコメントする。すると、

「宝石と言えば、やはりポタラ宮でしょうね。ポタラ宮を造営したダライ・ラマ五世の霊塔は大変な量のダイヤモンド、翡翠、瑪瑙などの宝石で装飾されていたということよ」

ランがポタラ宮のことを言う。ランは、ポタラ宮で博物館の研究員をしてる英才である。

「しかし、毛沢東がくまなく探したけどそれらしい痕跡はなかった。ほかに宝石を象徴するようなお寺はある？」

ほかのチベットのお寺についてラン研究員に訊く。

「それは、タシルンポ寺でしょうね。同じようにダイヤモンド、真珠、琥珀などがちりばめられた大きな弥勒菩薩像があるので

有名だわ」

「タシルンポ寺というのは、歴代のパンチエン・ラマが住職を務める寺院ではないですか。それは、つまりシャンバラは、自身が住職を務める寺院の近くにありまますよということを自身の首飾りに描いて歴代のパンチエン・ラマに伝えていたということになりませんか」

松田が推理を言った。これを聞いた他の三人もかなり納得感がある顔をした。

「確かに推定に過ぎないけど、ニマが住職になるはずだったお寺なわけだから何かの因縁かもしれないわね。行きましよう」  
ランが皆に言った。松田も恭子も、そしてゲンドウン・ニマもその気になっていた。

## ラサ

上海からチベットのニヤラム県までの五、四七六キロに及ぶ中国最長の国道がある。国道三一八号である。その国道を行くと重慶からラサまで約二、五〇〇キロである。タシルンポ寺というのは、ラサから、さらに三〇〇キロほど西に行ったシガツェという町にある。

松田らは、飛行機に乗ることのリスクを避けて、車でチベットに行くことにした。冬にはとても一般車両が通れるような道路ではないが、夏には壮大な山並みを見られるというラン・ソナムの言葉を信じて行くことにした。夏とは言え、四〇〇〇メートルの高地に行くのであり、十分な準備が必要である。衣服の他に、

燃料・水・食料なども買い込み、重慶を出たのはその日の午後になった。車はラン・ソナムのフォルクスワーゲンのワゴン車である。重慶から長江沿いの高速道路で雅安まで行って、次の日から山岳ドライブに備えることにした。重慶を出て、G93高速道路に乗る。片側二車線の新しい高速道路である。雅安までは、二五〇キロほどであり、三時間もあれば着くはずである。

しばらく行ったところで、

「何か同じ車が後ろに着いて来るわね。スピードを落とすと、後ろの車も落とすのよ」

バックミラーを見ながら、ランが呟いた。松田らは一斉に振り返るとともに、一瞬にして緊張感が走る。しかし、一〇〇メートルも離れているので車の車種さえ分からない。

「気のせいではないかね。後ろの車とはずいぶん離れているよ

うだ」

そう言ったものの、自分らが追われていることは、常に頭にこびりついており、警戒するに越したことはない。

「どこか路側帯の広いところでやり過ぎしたらどうだろう」

ラン・ソナムは、しばらく走って、駐車ランプを点けずに急に路側帯に停めた。後ろの車は、一瞬、スピードを緩めたように見えたが、スピードを上げてそのまま走り去った。誰が乗っているか目をこらしたが、窓ガラスに日よけシールが貼ってあり、人影くらしいしか分からなかった。車は、グレーの上海汽車であった。

その後、駐車ランプを点けて、そのまま一〇分ほど停まっていた。そして、頃合いを見て雅安に向けて再びスピードを上げた。

雅安は、四川盆地の西縁でこれを過ぎると、いわゆるチベット山地に入っていく。松田らは、廊橋の近くのホテルにチェックイ



ンした。廊橋というのは、長江の支流のひとつである青衣江の上に架かるアーチ型の橋の上に巨大な樓閣が建てられている雅安のシンボリック建造物である。チエツクインしたところには、誰もが先ほどの事は思い過ぎだったのだろうと思っていた。

次の朝、ラン・ソナムの運転で、雅安を出発した。スモッグに霞んでいた重慶と違い、晴れ渡った夏の青空が眩しく輝いている。雅安の街並みを過ぎるとすぐに緑の溢れた山並みの中に入っていく。道路は、長江の支流である青衣江に沿って走っている。青々と木々の茂った山が川の両側に広がり、まずは快適なドライブが続く。途中にところどころにレストランも見える。

しかし、快適なドライブと思っていたのは、最初の数時間であった。川沿いの道路は、康定というところから山を登り始めた。

行きかう車の数も一段と少なくなる。山肌に作られた道路は、片側は切り立った崖になっている。曲がりくねった道路を、ランはスピードを上げて走っていく。高度が上がっていくにつれ、遠くの雄大な山並みを見渡せる。

「素晴らしい景色ね。日本では考えられない雄大さだわね」  
恭子も、外を見ながら感嘆している。と、そのとき、

「やだっ、昨日の車ではないかしら」  
バックミラーを見ながらランが言った。

同時に、他の三人も振り向く。後ろの車との間隔は五、六十メートルあり、はつきりとは昨日の『上海汽車』とは判定できない。

「しばらく行って、同じようにやり過ごしてはどうだろう」  
「分かったわ」

ランは、所々に設置されている非常駐車帯を探した。暫くして、

前方に山側に削り取ったような駐車帯が見えた。急ブレーキをかけて、車を駐車帯に滑り込ませる。そのまま行き過ぎるかと思つた瞬間、後ろの車は、回り込むようにして、フォルクスワーゲンの前に停まった。停まった上海汽車から四人の男が降りて来た。ひとりは、呉国林であった。

「ずっと、お前らの死に場所を探してやっていたのだ。ちょうどいい場所で停まってくれたものだ」と言ってから、

「車から出る！」

拳銃を手にして脅してきた。従うしかない。

「游慶仲、早くしろ。お前、あのままで済むと思っていたのか？」拳銃をグンドウン・ニマに向けている。

ニマは、助手席のドアをゆっくり開ける。ドアが全部開こうとした瞬間、ニマの体が消えた。呉国林が、「あつ、」と言う前に拳銃

は蹴り飛ばされていった。と、同時に松田も後ろの席から飛び出した。ドアの外でかまえていた相手に前蹴りを飛ばす。しかし、相手は簡単に手で払う。

ニマは、拳銃を蹴り飛ばした後、もう一方の足で呉国林の両足を払った。呉国林はたまらず転がっていく。すかさず、かかってきた男に向かって飛んだ。男の首に蹴りが入る。男も地面に仰向けに倒れる。次の瞬間、車を飛び越え、松田に襲い掛かろうとしている男の胸に鋭い突きを入れる。相手は手で払おうとするが、間に合わず鳩尾を抱えて前に落ちるように倒れる。四人目の男は、ニマのあまりに早い攻撃に後ずさりする。後ずさりしたスキを見逃さず、ニマの蹴りが顎にヒットした。男は蹴られた方向に飛ばされる。あつという間の出来事であった。ゲンドウン・ニマの何という強さなのであろう。

「ラン、横に行つて！」

松田がランを助手席に押し込め、ニマが車のドアを閉める間もなく、車をダッシュさせた。

しかし、曲がりくねつた山道に加え、谷側の道路のガードレールは名ばかりのようなブロックが並べてあるだけである。スピードが出ないし、出せない。必死で運転するが、しばらくすると、バックミラーにグレーの上海汽車が浮かび上がった。と思つと、瞬く間にその姿が大きくなってくる。小さいカーブの連続で思ふようにスピードが上がらない。

近づいてきた上海汽車が拳銃を撃つてきた。車の後ろに弾の当たる音がする。三人とも座席に身をかがめる。

そのまましばらく逃げ続けると、カーブが緩やかになり、松田はスピードを上げた。と、そのとき、拳銃の弾が後輪のひとつに当

たった。スピードが出ていたため、車は大きくスリップして、ブレーキを踏んでも止まらない。横になったまま谷に向かって滑っていく。「ああ、このまま落ちて行く。もうだめだ！」と思った。

ところが車は寸前に、道路脇に並んでいるブロックに当たって止まった。

と、次の瞬間、上海汽車が松田らを目がけて突っ込んでくるのが、バックミラーに映った。松田のフォルクスワーゲンは、タイヤの煙で霞むほどに急発進した。間一髪で上海汽車がぶつかるのをかわした。不意を食らった上海汽車は、急ブレーキをかけるが、そのまま道路脇のブロックに当たる。当たった後、その反動でスピンして反対側の山肌の岩に大きな音を立てて激突した。

松田は急発進した後、一〇〇メートルくらい離れたところで、激

突した車を振り返った。ボンネットはほとんど大破したように見える。そのとき、最も大きく損傷したと思われる車の右側の助手席のドアが開いて、呉国林が転がり出て倒れ込んだ。それを見て、おそらく他の三人も致命傷は負っていないのではないかと勝手に思った。

パンクしたまま無我夢中で車を走らせ、次の非常駐車帯に滑り込ませる。大急ぎでタイヤを交換する。呉国林らは追ってこない。その後、四、五時間が過ぎたであろうか。曲がりくねった山道が終わったと思ったときに、眼前に大平原が開けて来た。ラ・ソナムによれば、高城鎮という村だとのことである。心を洗われるような壮大な風景が展開している。ここに来て、なんとか呉国林から逃げ切ったのではないかという安堵感のようなものが体中を包み込む。恭子も夕暮れに赤く染まっている遠くの山

並みとのコントラストに今までの緊張が癒されているようである。今日のところは、おそらく追ってくることはないだろうと考える、一日目はこの村に泊まることにした。

二日目も、念には念を入れて朝食を取るとすぐに出発した。後ろから来る車に常に注意を注ぎながら同じような山道に車を進めた。しかし、終日経っても、結局それらしい車は現れなかった。やっと全員に確信に近い安堵感が広がった。

それ以後も川沿いの比較的真っすぐな道路と山越えの曲がりくねった道路の繰り返しを重ねながらチベット山地の奥深くに車を進めた。ラン・ソナムの言っていた壮大な自然は満喫できたが、とにかく遠い道のりであった。



そして、雅安を出て、五日目の夕方にラサの手前のツェタンの町に着いた。二年前に滞在したラン・ソナムの実家のある町である。前もって電話してあったので母親が外に出て待っていた。四人とも疲れ果てていたが、やっと安心して寝られるねぐらに帰って来たような感じであった。松田は、二年前のことを思い出すとともに、親切にしてくれたランの両親を目の前にして懐かしさでいっぱいになっていた。

「ラン、お帰り。がんばったわね」

娘の元気な様子に安堵して、母親のツェリン・チュドウンが迎えてくれる。

「松田先生、よくいらしてくださいました。無理なお願いをしたのにも関わらず、また助けていただき本当にありがとうございます」

ます」

「お母さん、こちらがお待ちかねのニマよ」

ランがゲンドウン・ニマを紹介する。

「待っていましたよ。ニマ、」

ツエリンが立派に成人したニマを見て目を細める。そして、松田が恭子を紹介する。

「まあっ、綺麗なお嬢さんね。さあ、みんな中に入って」

全員を快く家の中に招き入れた。ラン・ソナムの実家は「芙蓉菜館」というレストランである。夕方とあって店の中は客で混雑しており、父親のリンチェン・ヒチーは、忙しく働いている。ランを見ると、

「おお、ラン、お帰り、よく帰ってきたな。二階で待っていてくれ」

と言ったまま店の奥に消えた。

松田らは、レストランを通り越して二階のリビングに通された。二年前と同じである。ランがしばらくして、幾つかの小皿に乗せた料理を運んできて、続いてビールを二本抱えて上がってきた。「とにかく、よくここ」までたどり着けました。ラサに着いたことに乾杯しましょう」

そう言ってみんなのコップにビールを注いだ。ニマは、ためらっていたが勧められて「では一杯だけ」と言っけてコップを受けた。母親のツエリン・チュドウンも加わって全員で乾杯する。松田は懐かしい調度品などを見ると古里に帰ってきたような感慨に浸っていた。

## タシルンポ寺

次の朝、ラン・ソナムの両親にお礼を言って、タシルンポ寺のあるシガツェに向けて出発した。シガツェは、ラサ河の支流である雅魯蔵布江（ヤルツァンポ江）沿いに真つすぐ西に行ったところにある。雅魯蔵布江は、幾重にも水の流れを形成し、川幅は二キロにも及ぶ。

ツェタンの町を出て、シガツェに着いたのはその日の夕方であった。川沿いの平坦な道路であったが、四〇〇キロに及ぶ長い道のりを車で行くにはさらに一日が必要であった。シガツェは、雅魯蔵布江にさらに二つの川が合流する地点にあり、広大な平原と水路の上に広がっている。おそらく人口は、数千人の小さな

町であろうと、ランに言うとラサについてチベットにおける第二の都市だとのことであつた。

松田らは、街の中心部にある「日喀則飯店」というホテルにチエックインした。道路に面した広い駐車場の奥に二階建ての建物のある田舎町にしては設備の整つたホテルのようである。ランがチエックインの手続きをしている間、他の三人はロビーのソファに座って待っていた。チベットの民芸品が雑多に飾つてある広いロビーには何組もの人々がソファで話をしている。今日は、ホテルの滞在者が多いのであろう、何人もの人がロビーを行き交っている。そんな中を、背の高い西洋人と中国人がドアを開けて出て行くのが目の片隅に入った。一瞬のことであつたが、西洋人はジョージ・ベーカーのような気がした。だが少林寺にいたるはずの彼がチベットにいたるはずがないと思ひ直し、人違いだ

ろうと思った。

戻ってきたランが、

「今日は混んでいて二部屋しか空いていないということです。ただ部屋にはベッドが二つずつあるということです。松田先生と高嶋先生はご一緒でもかまいませんか？」と訊いた。

二人は顔を見合わせた後、「かまいませんよ」と松田が答えた。おそらく、重慶からの長いドライブの間に二人の関係が師弟関係以上だと分かっていたのだろう。それに、ラン・ソナムがゲン・ドゥン・ニマを見る目は、だんだんと姉が弟を見る目以上になってきていたのを松田も恭子も感じていた。そして、二組のカップルはそれぞれの部屋に泊まることになった。

夕食をして部屋に戻った後、恭子が、

「ランさんは、ニマのことが相当好きなようね。食事をしながら

ら、いつもニマを見ていたわ」と言った。

「ああ、そうだね。僕も見ていたよ。あの澄んだ目と逞しさを見れば誰もが好きになりそうな好青年だね」

「でも好きなのと恋するのは違うわね。ランさんの目は恋する人の目だと思うわ」

「では僕の目はどちらの目だと思う?」と言って、恭子を抱きしめた。

「そんなの分からないわ」と言いながら、松田の首に恭子の両手が巻き付く。

それから互いの気持ち確かめ合うように長い抱擁が続いた。

四〇〇メートルの高地のホテルでは、夏でも夜になると部屋に暖房が付いている。暖房の熱がさらに二人を温めているようであった。

次の日、いよいよタシルンポ寺の探索に出かける。タシルンポ寺は街を見下ろす小高い丘の中腹に建っている。ホテルを出るとすぐ前に珠峰路というメインストリートが東西に伸びており、通りの両側にはレストランや土産物店などがひしめいている。お寺はその通りを西に向かって行った突き当りにある。門前の広場まで一キロほどだということまで歩いて向かう。晴れ渡った青空であるが、気温は十五、六度であろうか。清々しいチベットの朝である。

石畳の広場では、五体投地で礼拝している人々が目に付く。それらの一般の人々に交じって、チベット特有の赤い僧衣をまとった僧侶が行きかっている。ラン・ソナムによれば、六〇〇人も僧侶が、このお寺で起居しているとのことである。



広場から山麓に広がるお寺の門をくぐると、正面に三つの金色の屋根の建物がそれぞれ離れて並んでおり、その右側に白い大きなコンクリートの建造物が見える。金色の屋根の建物はそれより低い白壁の建物でつながっているように見える。さらに近づく、広大な敷地の中に無数の建物が迷路のように建てられているのが分かった。その迷路のような小道を参拝者や赤い僧衣の僧侶が行きかっている。迷路のような小道を左に進んで行くと弥勒大仏殿に出た。中には、高さ二六・七メートルの巨大な弥勒菩薩像が安置されている。仏像は、六七〇〇万両もの金と一二万キログラムの銅で作られ、一四〇〇余りのダイヤモンド、真珠、琥珀などの宝石で彩られている。まさに『宝石鉢』というに相応しいと松田は思った。大仏殿は五層構造の壮大な建物である。

しかし、大仏殿に入ろうと上を見ると、横長の垂れ幕がかかっており、いくつもの印（紋様）が描かれている。それはすべて、『寶石鉢』ではなく、『宝結び』であった。松田はわずかに気がそがれた。さらに他の建物を見てまわる。他の金色の屋根は、歴代のパンチェン・ラマの塔廟であった。他にも大きな建物があり、大集会堂、経堂であるとのことである。そして、大集会堂の正面にも横長の垂れ幕が掲げられており、いくつもの『宝結び』の印が並んで描かれていた。宝結びというのは、切れ目がなく絡み合っている結び目の紋様で、永遠に全てが繋がっていることを象徴している。さらに、どのように宗教と俗事、慈悲と英知がお互いに関わり合っているのかを示しているとも言われている。また一方、宝結びは幸運の象徴と言われており、一般の人々はこの寺院に礼拝することで幸運が訪れると信じているのかもしれない。

ないとも思った。

建物群から少し離れたところに建てられているコンクリート製の大きな塀のような建造物は、タンカと呼ばれる仏画を人々に開帳するための台であるとのことである。その仏画は横三十メートル、縦二十メートルに及ぶものであると分かる。松田は、ぜひそのタンカを見てみたいとランに言った。

「タンカの開帳は、一年に一回限りです。今年は、すでに六月の下旬に行われたので、残念ですが見ることはできません」

「そうですか、仕舞ってある倉庫に入ることはできませんでしょうね」などと、松田には学術的な興味としても未練が残った。

「ところで、こここの住職は、どんな方かご覧になられたことはありませんか？」

一瞬、ニマが身を固くした。拉致事件がなければ、今頃この大寺

院の住職になっていたはずである。今の彼にその現実感はないにしても、母親から言われたことを思い出さずにはいられなかった。

「私は、見たことはないです。もうお昼の時間ですから、先ほどの大集会堂に僧侶の方々が集まられるようです。行ってみましょう。住職がおいでになるかもしれませぬ」

ランにそう言われて、大集会堂に引き返すことにした。ランは、パンチエン・ラマ様とは言わず、住職と言った。

大集会堂には、多くの僧が集まってお茶を飲んでいて。今からここで昼の勤行が行われるということではなさそうである。ランが、近くにいたひとりの僧に住職について尋ねる。

「皆さんがここにお集まりのようですが、ご住職がおいでになるのでしょうか？」

「いえ、おいではなりません」

素っ気ない返事が返ってきた。

「では、どこかで〴〵住職を〴〵拝顔することはできますか？」とさらに訊ねる。

「あなたは、〴〵住職とお知り合いですか？」

「はい、〴〵住職と同じ村の者です。ぜひ村の誇りである〴〵住職にお目にかかりたいと思い、遥々参りました」

そう言うと、聞かれた僧は、気の毒そうな顔をして、

「遥々来られたのに残念ですが、パンチエン・ラマ様は普段は北京におられるのです。日常の勤行はシャントン・ロドレーサン老師が取り仕切られています。申し訳ありません」と言った。

「ええっ、そうなのですか」

ラン以外の皆も驚くほかない。

「ありがとうございます」と皆で言って、大集会堂を後にした。

その後、広大な境内の中を、二、三時間見てまわったが、首飾りの文様と関連のあるものは見つからなかった。

しかたなく、ホテルに帰ってロビーでお茶を飲むことにした。

「しかし、驚きましたね。パンチエン・ラマは北京に住んでいるのですね」

松田が先ほどの僧の話を持ち返って話題にした。

「ニマ、住職がないのなら、あなたがここで住職になればいいのよ」

恭子がおどけて日本語で言った。ゲンドウン・ニマは、きよとんとしている。

「いろいろな理由が考えられるわね。彼が無理やり中国政府からパンチエン・ラマ十一世として指名されても、先ほどのように、本来ここで修行していた僧らが住職として受け入れるかどうか。彼がチベット人であっても、中国政府の傀儡であると見られているわけだから、何らかの災難に遭遇する可能性があるかもしれない。あるいは、彼もまだ若いので北京で中国共産党の洗脳教育を受けている可能性もあるわね」

ラン・ソナムは、厳しい意見を口にした。周りの人、特に中国人に聞こえたら、通報されて逮捕されるかもしれない。

「その話はやめよう。今の話が中国人に聞こえたらひどい目に会うよ」と小声で皆に言った。

「それにしても、首飾りの文様に繋がるようなヒントはないかもしれないわね」

何のヒントさえ見つからなかったことで、恭子が肩を落としている。恭子にとって政治の話よりも紋様の謎が第一であるのと言うまでもない。

「まだ一日目だから、すぐに見つかるとは限らない。もう一日探してみよう」

そう言ったものの、松田もかなり難しいのではないかと思わざるを得ない。

まだ夕暮れ時で夕食には早い。松田と恭子はホテルの前の通りに出て、土産物店を散策してみることにした。通りの両側に数十件の店がひしめいている。チベットの装飾品、アクセサリー、ストラップ、工芸品の小物、法器、絨毯、壁掛け、タンカなど様々なものが並んでいる。ただし、ほとんどの店が同じようなものを



売っている。ふたりは、涼しい夕暮れの中を歩いて行く。ひとつの店に入って、小物を手に取って眺めては、次の店に入るということを繰り返す。ある一つの店に入った。そこは少し他の店とは違い、ネパール風のアクセサリーや工芸品を売っていた。また壁には、ヒマラヤの写真が飾られている。と、その時、松田の脳裏に衝撃が走った。写真のひとつに首飾りと同じ文様があるではないか。

「恭子、見て！」と叫ぶように言った。

「ああっ、これはあの文様と同じだわね！」

それを見た衝撃で恭子も興奮しているのがありありと分かる。

それはどこかの山を上空から写した写真である。その地形は不思議な文様を描き出しているのだ。真ん中の山を細い池か川が丸く囲み、それに向かって放射状に延びた無数の沢か川が流れ

込んで見えるように見える。まるでその地形は揺らめく光を放つ太陽を表す図形のようなのである。それは、コインの穴に向かって無数の線が揺らめきながら吸い込まれるように描かれていた図柄と同じであった。

早速、その写真を買ってホテルに帰った。帰る途中でラン・ソナムに電話して「大変な情報が手に入った」と伝えておいた。ホテルに着くと、すでに二人がロビーで待っていた。ロビーの隅のソファに座って、買って来た写真を広げようとしたとき、二階に上がる階段を、昨日の西洋人と中国人が上がっていくのが目に入った。やはりリジョージ・ベーカーではないかと思った。そして、連れの中国人も見覚えがあるなと思った。しかし、写真のほうに気が集中しており、次の瞬間には忘れていた。

「ラン、この写真を見てどう思うかね」と言って写真を広げた。

「ああっ、これは！」と言ったまま写真を見つめている。

「おおっ、あの文様と同じだ！」

ゲンドウン・ニマも衝撃を受けたように興奮している。

「これはどこの山か分かるかね」

「分からないわね。見たこともないわ」

「おそらくセスナ機などで上空から撮った写真だと思う。真ん中の輪の大きさも一〇キロくらいあるのではないかと思う」

「チベットやヒマラヤの山の写真は下から撮ったものが普通に売られているから、チベットの人も上空からこんなかたちで撮った写真は見たことがないのではないかしら」

「おそらく、ヒマラヤの写真でも撮りに行った人が偶然奇妙な地形を見つけて撮ったとも考えられる」

「このあたりの人なら知っているのではないかしら」と言っ  
て、ホテルのフロントに行った。カウンターの中にいた三人の従  
業員は、知らないと言っているようである。

しかし、その中の一人のチベット青年が、何かに気づいたよ  
うにしゃべりだした。それを見て松田ら三人もカウンターの  
ところに行った。その青年の話は、こうだ。

「この写真の上側の端に写っているのは、国道三一八号では  
ないかな。このあたりで広い農地が広がっているのは、シガツ  
エから扯休村（チエシユ村）にかけて広がる平原だけだ」

「それはどの辺りになるか地図で教えてもらえない？」

ランが訊ねると、青年は、カウンターの奥から地図を取り出  
して広げた。取り出してきた地図は、シガツエ周辺の地図で、  
さらにその周辺に広がる山岳地帯までは載っていない。た  
だし、彼

が意図しているシガツエから南西方向に広がる平原の中の扯休村と国道三一八号の関係は分かった。それ以上の広範な地図はないということなので、インターネットで検索することにして、フロントの青年に礼を言って、部屋に戻った。

松田らがフロントで地図を広げて話をしているのをロビーの柱の陰から、注意深く見ていた人物がいたのに気が付くはずもなかった。その人物は、松田らが引き上げた後、フロントに行つて先ほどの青年に話を聞いていた。

四人で松田と恭子の部屋に入った。恭子がノートパソコンを開き、WIFIにつなげる。中国では、Googleが接続できないのでYahoo Mapで検索する。

「Yahoo Map じゃ、Google Map ほぼに拡大できないのね」

つまり、Yahoo Mapでは、中国内地図は拡大に限度があり、細かい道路、街まで見えないようである。それを見ていたランが、「中国のウェイボーにつなげればいいのよ」

そう言って、中国のサーバーであるウェイボー（微博）につなげる。ウェイボーでは、Google Mapで検索できるような細かい地図を出すことができるのだ。扯休村というのを見つけて、松田が買って来た写真と見比べてみる。しかし、ウェイボーにはGoogle Earthのような地形図を現す機能がなく、写真に写っている奇妙な地形がどこにあるのか分からない。そこで、松田が、ひとつアイデアを出して試してみる。

「それでは、三つの情報を組み合わせて見てみよう。まずフロントの青年が言っていた扯休村というのは、ウェイボーでは、「ここにある」と指さしながら、マウスをスクロールして、

「これを Yahoo Map と同じくらいまで縮小する。すると、この地方における扯休村の位置がおおよそこのあたりと見当がつくとマウスのポインターを村の位置に置く。」

「Yahoo Map に切り替えて、先ほどと同じ村の位置の見当をつける」と言つて、ポインターを、先ほど見当をつけた位置に合わせる。するとその南方方向にいくつもの山群があるのが分かる。それぞれにポインターを移動して、マウスをスクロールして拡大してみる。マウスをスクロールすると一瞬、三倍に拡大するが、すぐに元の縮小した地図に戻る。これで一瞬であるがその山の詳細が見える。二つ目にポインターを移動して、マウスをスクロールしたとき、一瞬写真と同じ地形が浮かび上がった。全員が、「おおっ、」と声を上げる。何度もスクロールしてみる。確かに写真に写っている奇妙な地形である。

そして、今度はウエイボーに戻って、扯休村からその山群の位置の検討をつけ、拡大する。確かに、それらしい地形がある。扯休村から六十キロくらい南に行ったあたりである。そこから一〇〇キロも行けば、ヒマラヤの峰に当たり、さらに五十キロ南方には世界第三の高峰カンチェンジュンガがある。

「これが目的のところだとしたら、シガツェから直線距離で八〇キロほどだ。あの首飾りの文様が半径二〇〇キロくらいの大きな地域を想定していたとしたら、ラサはもちろんネパール、ブータンまで入ってくる。つまり仏教の流布の歴史で重要な寺院が広大な曼荼羅として配置されたていたと考えることができる。そして、タシルンポ寺は、その中で目的の場所に最も近いと言える。まさに首飾りの文様を現しているのではないかな」

松田が自分の見方を言った。他の三人は、松田の話に完全に納得



はしていないが、その話にのってみようかとは思ったようである。

「なるほどね、かなりきついことじつげだとは思っけど、ここまで来たら確かめてみる価値はあるかもしれないわね」

恭子がそう言うと、ランも似たような意見である。

「ネパールやブータンまで含めないと説明できないというのは、もうひとつ説得力がないわね。しかし、この奇妙な地形はあの文様にそっくりではあるので、行ってみる価値はあるわね」

一方、ニマは話が進むにつれ、だんだんその気になってきた。

「壮大なスケールの話ですよ。私は、ぜひ行ってみたいと思います」

ラン・ソナムとゲンドウン・ニマが部屋から出て行った後、

「いよいよ、シャンバラ探検に近づいたかもしれないね。皆もその気になってくれた」

恭子にひと段落したように言うと、

「しかし、先ほどの話は、まるで説得力がないわね。結局、伝説に都合のいい話を付けて追いかけて追いつくようとしているだけではないかしら」と手厳しい。

「ランやニマの前では、ああ言ったが、僕も伝説は伝説で、現実とは違うと思っている」

「ではどうということを考えているのよ」

「今日、タシルンポ寺で見たように、この地域は金、銀のほかにダイヤモンドや琥珀などの宝石が取れる。おそらく昔からそうした鉱山があったのではないかと思う。とは言え、ここは奥深い山岳群だ。簡単に鉱脈を見つければむずかしいし、また万一看

つけたら他人に知られたくない。そうした中で理想郷の伝説が生まれ、そうした鉱山を夢の国のように伝えるようになったのではないかと思う」

「なるほど、今度の方が少しは説得力があるかもしれないわね」  
松田は、ここに至って何とかしてシャンバラ伝説の有無を突き止めたいという気持ちがあります。強くなり、探索にどんどん積極的になっていく自分があることが分かっていた。ただ、それが他の三人を危険にさらすことになるのではないかとの危惧も分かっているのであるが、探索の欲求を押さえられないでいた。

### 流星計画

次の日の朝早く、ラン・ソナムの車でまず扯休村（チェシュ村）

まで行くことにした。写真の場所まで一日で行けるかどうかからない。シガツエを出て、国道三二八号を西に向かう。大平原の真ん中を道路が真っすぐに伸びており、平原には畑が広がっている。畑が果てたあたりから青々とした山群が両側に重なり合っている。

三時間ほどで扯休村ではないかと思われる村が見えた。ランが携帯電話でウェイボーを開いて、場所をチェックした後、村の方向に向かった。村は、数十軒の民家がかたまり合うようにして建っている。道路を歩いている人を探すがなかなか人の気配が薄い。暫く走って、畑の道端にたたずんでいた夫婦と思われる農夫に写真を見せて、こういう地形をしたところを知らないか訊ねるが、「分からない」と言う。そこで、他に手がかりがないか訊く。

「このあたりから南の山岳群に入っていくにはどう行ったらいいでしょうか？」

「この先の年楚河沿いに県道二〇四号があります。それがここから南の方にいく唯一の道路です」と教えてくれた。

ランが携帯電話で再び場所を確認して、扯休村から年楚河を渡って、県道二〇四号に入る。県道といっても十分な舗装がなく、いわゆるデコボコ道である。先ほどまでの大平原と違い小さい河の両側に山が迫っている。

しばらく走って、運転を松田に代わった。この先はさらに道路状況も悪くなるのではないかと予想された。それでも所々に民家が点在しており、人の生活があることが感じられる。しかし、さらに一時間も走ると、舗装は完全になくなり、道路のデコボコはさらにひどくなる。ただこんな山の中の道路にも轍ができて

おり、たまにトラックの対向車がある。ある対向車とすれ違った後、松田が、バックミラーをみながら、

「運転を代わってから、ずっと同じ車が付いてくるんだが、付けられているのかな」

そう言うと、皆が一斉に後ろを振り返る。すぐさま呉国林のことが思い浮かぶ。そして、首飾りを盗んだ陳美帆のことも。しかし、五、六十メートル離れており、本当に誰かが付いて来ているのかは判別できない。ところが、どうしたものかと考えている間に、バックミラーに映らなくなった。

そして、そのままさらに一時間ほど行くと川が二つに分かれ、それに沿うように道路も分かれている。ちょうど道路が分かれているあたりに数軒の民家があった。道路沿いの民家の前で車を止め、家の中に入っていた。庭先で五十代くらいの農夫が、農

具の手入れをしている。写真を見せて、ラン・ソナムが訪ねた。

「すみません、この写真に写っている山をご存知ありませんか？」

「ああ、知っているよ。この先の栄扎曲をさかのぼると、坡千曲と合流して岩山を丸く囲むように流れている。その丸く取り囲んでいる栄扎曲と坡千曲に何十という谷川が流れ込んでいるのだよ」

意外にもあっさりと目的の場所が分かりそうである。全員の顔がほころぶ。「曲」というのは谷川のことのようである。

「ではこの岩山に行くにはどちらに行ったらいいでしょうか？」

「この先を右側に行けば栄扎曲沿いの道路に出るが、あんたら、何でそこに行くんだ？」

「写真のように、たいへん奇妙な地形なのでどんなところか見

に来たのです」

「しかし、その山を削って工事をやっている。そばには近づけないと思うぞ」

「ええっ、こんなところで工事をやっているのですか。何の工事が聞かれていますか？」

「なんでも、天体観測所を造っているとのことだ。こんな山の中にご苦勞なことだ」

「ええっ、天体観測所ですか、」

予想外の応えに驚くしかない。そういえば、ここに来るまでに何台かのトラックと遭遇した。あれはその工事のための車両だったのか。

言われた道に入るとすぐに険しい谷川沿いを登っていく道路



になった。松田は写真を思い浮かべた。写真にはいくつもの川が、山を囲むように取り巻いている丸い形の池に流れ込んでいくのようが見えた。しかし農夫によれば、この谷川が山の手前で二つに分かれて山を囲むように円を描いていると言う。実際にはどんな自然の造形なのだろうかと想像してみるが、容易ではない。さらに進むと両側の峰は鋭さを増し、道路も険しくなっていく。ただし、道路は道幅も広くなり、舗装道路に変わっていた。しばらくすると、『この先行き止まり』と書かれた立て札が立っていた。周囲を円形の川で囲まれた山は近いのだ。そして、しばらくして目の前にその山が見えた。いくつかの峰をもった峻険な岩肌の山である。その山が見えると同時に、守衛の立っている大きなゲートが目前に迫っていた。ゲートから真っすぐに山に向かって道路が延びている。道路の突き当りはトンネルの

入り口のように暗い口を開けているのが小さく見える。松田とゲンドウン・ニマは、ゲートの前に車を置いて、守衛室に向かって歩いて行く。二人の守衛は自動小銃で武装している。自動小銃を肩に掛けた守衛が逆に向こうから歩み寄り、

「待て、お前ら何しに来た。ここから先は立ち入り禁止だ」と言  
って自動小銃を肩から外した。

「天体観測所を造っておられると聞きました。見学させていた  
だけないでしょうか？」

「なにっ、なぜ天体観測所だということを知っているのだ。とに  
かく関係のないものは立ち入り禁止だ。さっさと帰れ」と取り付  
く島もない。

自動小銃で威嚇されてはそれ以上交渉するすべがない。谷川  
沿いの道路を引き返して、少し離れたところで谷に降りて行く

小道に車を停めた。

「ここまで来たが嚴重な警護でこれ以上ゲートの中には入れない。しかし、これで引き下がっては遙々来たかいない。まだ太陽は高い。この峰を越えて隣の沢から近づいてみよう。ただし、自動小銃で武装した守衛がいる。ランさんと恭子はここで待っていてくれ」

「いやよ。こんなところで待っている方がよけい不安だわ」  
恭子は見も知らない山の中に取り残されるのではないかという不安で一杯になる。またラン・ソナムはここまで来たら、どうしても自分の目で見てみたいと思っていた。

「そうよ、私も中がどうなっていて、何が行われているか確かめたい」

「分かった。しかし、歩いてこの峰を超えるのは一苦勞だぜ」と

言ってリュックを背負う。そして、四人は車を置いて峰を登り始めた。峻険な峰には低木が茂っており、それらの木を手で手繰り寄せながら登る。

一時間ほどかけて息を切らせながら急角度の峰を登り、登り終えたところで尾根伝いに円形の川に向かって下りて行く。尾根には道はなく、低木と草をかき分けながら進む。近づいたところで、隣の放射状の沢に下り、沢沿いに円形の川に忍び寄ることにした。ランと恭子も必死で岩肌の上を歩いて行く。

とその時、工事現場の方で何発かの銃声があった。松田らはとっさに見つかったかと思い、岩陰に身をひそめる。現場からは数百メートル離れており、自分らが見つかったとは考えにくい。しばらく、そのまま隠れていたが、

「やはり、これは危険だ。一旦引き返して、どうするか考えよう」  
松田は、皆を危険にさらすことは絶対に避けなければならない  
と思う。

「そうね、誰かが中に入って撃たれたのかしら。一旦、帰りましよう」

ランも同意する。ゲンドウン・ニマは、一瞬ためらいを見せたが、すでに陽も傾いており、致し方ないと立ち上がった。松田が、来た時とは逆に峰に向かって登ろうとした、そのとき、沢の反対側で何かが水に落ちたような音がした。全員が身を伏せて音のした方を見る。

四〇メートルくらい離れたところに人が水際に倒れている。暫く様子を見るが、追手が来ている気配はない。その場に三人を置いて、松田が倒れている人間を見に行く。沢は浅く、いくつも

の岩が水面から出ている。松田が水音を立てて近づいても、倒れたまま動く気配がない。倒れている男を水際から引きずり出して、男の顔を見る。

「あっ、」

啞然とした声が口をついて出る。

「大丈夫ですか？」

と声をかけるが、腹のあたりから大量の血がシャツに広がっており、満足な返事は返ってこない。そこで、三人に来るように手で合図を送った。三人が沢を渡ってきて、まず恭子から、

「ああっ、」と驚愕の声が漏れる。

それは、香港警察の潘志明警部だったのである。

松田が潘警部の上体を抱き起す。

「藩さん、しっかりしてください」と声をかける。

潘志明は、「ううっ、」とうめき声を上げながら目を開けた。

「おお、松田、」

松田の顔を認識したようだ。

「藩さん、あなたがなぜここに？」

答えがない。苦しそうにしながら松田の顔をじっと見ている。

そして、しばらくの沈黙の後に、ズボンのポケットを探って何かを取り出した。

「すまない、」

弱弱しい小さい声であった。ポケットから引きずり出したそれは、盗まれた首飾りだった。

松田ら四人から、

「おおっ、」と歓声のような声上がる。

「藩さん、何であなたがこれを？」

「すまない、これを盗んだのは俺たちだ」と言ったのである。息の途切れそうな潘志明を岩陰に運んで、傷の手当をしようとするが出血が止まる気配がない。潘志明は、弱弱しい声で、礼を言った後、

「あんた達を上海からずっと付けていたのだ」と言った。

「ええっ、やはり僕たちを疑っていたのですか？」

「いや、最初はそうじゃない。殺された張春雷の部屋を調べたらパソコンにいろいろな写真が入っていた。何枚かを調べると、嵩山少林寺だと分かった。それで少林寺に向かう途中であんた達に会った」

「それでは、ニマを連れて少林寺を脱出したのも知っていたのですか？」

「ああ、その後、重慶でその青年が母親と話しているのも聞い



た。そのとき、シャンバラの話をしているのを聞いて、張春雷が持っていた写真が思い浮かんだ。それはどこかのチベットの山や基地のようなものが何枚も写っていた。あいつはアメリカのパスポートを持っていた。これはもっと大きな陰謀が関係しているかと直感で思った。それで、どう関連しているかは分からないが、その青年の首飾りを少しだけ拝借して写真を撮って後で返そうと思ったのだが、その盗むところを見られて追われたのだ」「ということとは、陳美帆に追われたということですか？」と不審そうに聞いた。香港警察が女ひとりに追われるというのも妙である。すると、

「いや、あの女にはもっと大きな組織が裏にいるようだ」と言うてから、

「この件は、これでやめて香港に帰ろうと思ったのだが、途中で

引き下がるのも中途半端な気がしてチベットまで来たのだ。しかし、何の手がかりも得られないでいた。そこにまたあんた達が現れた」

「それで今日僕たちの車を付けて来たのですか？」

「そうだ、そして張春雷の持っていた写真に写っていた基地のようなものを見つけた」

「それで中に忍び込んだのですか？」

「あんた達が守衛と話をしている間に道路下の沢を通って基地の中に入った」

「そして、あのトンネルの中に入った？」

「あれはトンネルではない。中に大きな施設があり、その入口だ」

「何の施設だったのですか？」

「分からん、その前に見つかっていきなり撃たれた。一緒に行った羅国強は、基地の中で撃たれた。おそらく生きていないだろう」

そう言った後、ぐったりした体を松田の胸に預けてきた。

「藩さん、しっかりしてください」

「俺はもう無理だ。しかし、この施設は普通の天体観測所なんかじゃない。これが反社会的なものでないのかどうか調べてくれないか。それが俺たちの最後の願い……」と言って目を閉じた。

「藩さん、」と呼びかけたが反応がない。

ランが首に指をあてて脈を診る。しばらくして、無言で首を小さく振った。

盗まれた首飾りは、ゲンドウン・ニマのもとに戻った。この首飾りの伝説話を追いかけて、遥々とこのチベットの山奥まで来た。

そして、伝説のシャンバラではないかという場所で人が撃たれて亡くなった。松田にしても、自分の胸の中で亡くなった藩警部のぬくもりが残っており、危険を承知でこの施設の中を探索するまでは引き下がるわけにはいかないと強く思った。

潘志明は、何か基地のようだと言った。ということはやはり、貴金属か宝石の鉱山なのであろうか。しかし、そうであるなら侵入してきた者を撃ち殺すまではしないのではないか。では、シャンバラの伝説に近いもつと何かがあるのであろうか。考えても答えが見つかるわけではない。松田らは陽が落ちるのを待って忍びこもうと岩陰に潜んでいた。その間に、あたりに散らばっている枯れ木でわずかばかりの穴を掘り、潘志明の遺体を埋葬した。

陽が完全に落ちるのを見計らって行動を起こした。辺りには電灯などはなく、月の光があるのみである。しかし、夜目に慣れてくるとわずかばかりの月の光でも、なんとか沢を下ることはできた。暫くして、巨大な岩山の周りを囲んでいる川に出た。シガツエで買った写真には水をはらんだ川のようになっていたが、たしかに川幅は広く二〇〇メートル以上ありそうであるが水はほとんど流れていない。たまたま今が乾季なのかもしれない。左側の遠くの方に照明が並び、川を渡り岩山に至る道路を照らしている。岩山の周りの川に沿って道路に近づいて様子を覗う。道路から遠くのトンネルまで金網のフェンスがあり外部の侵入者を阻んでいるのが分かる。ただし、動いている車や人の影は見当たらない。今は川の水が少ないが、水を張ったらこの岩山は天然の城塞になるなと思った。

松田らは、照明で照らされているフェンスを乗り越えるのは無理だと考え、時間はかかるが大きく岩山を回って、岩山の上の方から侵入しようと考えた。大小の岩が転がっている川岸をトンネルとは逆方向に三百メートルほど行き、そこから暗闇の中を岩山の裾を上っていった。二時間ほどかけて崩れ落ちそうな山裾を登り下りしながら、トンネルのために削り取られた岩の上に出た。トンネルの入り口の周辺は広場になっていて何台かの車が停まっている。広場から川を渡る道路が、遠くのゲートに向かって伸びているのが見える。

トンネル入口の前の広場を囲んでいるフェンスが岩山とぶつかることから、フェンスを伝わって広場の中に入った。岩山に沿って素早くトンネルの入り口に近づく。トンネルの中は薄暗い照明があるが、今のところ人の動きはない。中に入ると、すぐ

に道が二つに分かれている。右側の道を進んで行く。道に沿って電機の制御装置のようなものがところどころに置かれ、それが数本のパイプで連結されている。そのとき、車の走る音が中から聞こえた。咄嗟に近くの制御装置のような機械の後ろに隠れる。車が通りすぎた後、ヘルメットをつけた二人ずれが歩いて来る。

「昼の侵入者の内のひとりが逃げたようだ」

「こんなところから逃げても、熊の餌になるだけだろう」  
などと言いながら通り過ぎて行った。

さらに警戒しながら奥に進んだ。すると光が徐々に多くなつて大きな空洞が見えて来た。さらに近づくと、円形をした大きなドーム球場のような空間が現れた。大きな化学プラントのように、何本もの太いパイプが入り組んだ設備がその空洞いっぱいには作られていた。空洞を周回するように道路が取り付けられて

いる。まだ工事中のようで所々に工事用のクレーンが置かれているが、作業はしていない。これは確かに天体観測所のようなものではないが一体なにを作っているのであろう。

恭子が携帯電話で写真を撮ろうと設備に近づいた。とその時、「ブーン、ブーン、・・・」とサイレンが鳴り響いた。見つかったかと思い、そばの機械の陰に走り込む。同時に何台かの車が入ってくるのが分かった。それらの車は四人が隠れている機械を勢いよく通り過ぎて行った。

そのまま隠れて様子を覗う。そのとき、奥の方で銃声が響き渡った。周りに人はいないようである。四人は、トンネルの入口に向かって走った。後ろの方では、また銃声が出た。入口までわずかな距離であるが何キロにも思えた。入口を走り出しようとしたとき、自動小銃を持った警備員が入口の陰から現れた。咄嗟に、



逃げたら撃たれると思い、その場に立ち止まって両手を上げた。警備員が、銃を向けたまま、

「こつちにいるぞ！」と叫んだ。

中から数人の警備員が走ってくる。もはやこれまでかと松田は思った。

四人は警備員に自動小銃を突き付けられて、促されるまま再び大きな空洞の中に連れられて行った。そして、プラントが見えるところまで来て「その階段を降りろ」と言われて、周回道路の内側の階段を下りて行く。一階下がったところは、事務所などの建物が円周方向に立ち並んでいた。事務所の前には巨大なプラントのような設備が迫ってきている。いくつかの建物の中の会議室のようなところに入れられる。窓はない。五人の警備員が

自動小銃を向けている。四人は壁際に固まって立ち尽くした。

そのまま緊張の中で無言の時間が過ぎて行く。とその時、ドアが開き二人の人間が両手を上げて入って来た。入った途端、後ろの警備員に腰を蹴られ、床に転がる。松田らのところまで転がってきて、起き上がろうとした。ひとり足は足を撃たれてズボンから血が流れだしている。そして、松田らに向いて顔を上げた。

「あなたは！」と叫ばずにはいられなかった。

それは、ジョージ・ベーカーとヤマ・ツェリンだった。足を撃たれたのは、ヤマ・ツェリンだった。

「ヤマ・ツェリン、なんであなたがここに！」

ラン・ソナムが叫ぶように言った。松田にしても東京のガンデンポタン事務所にいるはずのヤマ・ツェリンにチベットの山奥で会おうとは夢にも思わない衝撃であった。

そのとき、ドアが開いて三人の人間が入ってきた。松田らはまた驚かざるを得ない。

その中のひとりには、陳美帆だった。

「まあ、よりによってこんなにくささんのお客様と一緒に来られるとはね」と陳美帆が中国語で言ってから、

「ジョージ・ベーカー、あなたがアメリカのスパイではないかと、あなたが入国したときから疑われていたのよ。わざわざ少林寺に体験修行に行くという小細工も疑われる要因だったわね。

私たちは、あなたが少林寺に着いた時から見張っていたのよ」と英語で言った。

「なにつ、ジョージ、あなたがアメリカのスパイ！ どういうことだ、」松田には想像すらできない話である。

「学、こいつらは二〇〇六年にアメリカの衛星をASATで地上か

ら攻撃した。しかし、それがNASAによってこいつらの仕業だと分かってしまった。その後、地上から攻撃できる高出力レーザー砲を開発して、察知されないようにチベットの山奥に据え付けようとしているのだ。これは、バカでかい粒子加速器だ」とジョージ・ベーカーが早口の英語で言った。

「ASATというのはなんだ」

「anti-satellite weapon、つまり衛星を攻撃する平気だよ」

「そうよ、宇宙には数えきれない軍事衛生が回っているわ。衛生による戦争と言ってもいいわ。何もしなかったら、やられてしまうわ。私たちの最新鋭の『流星計画』は、その一環として計画されたのよ。それをチベットの犬どもがかぎつけた」

陳美帆がヤマ・ツェリンを睨み付けた。

松田は、香港で張春雷から渡されたUSBの中に、二つのファイ

ルがあり、ひとつは「shao lin（少林）」、そしてもうひとつは確か「meteor（流星）」と書いてあったと思った。

「ええっ、ヤマ・ツェリン、あなたはアメリカのスパイだったの！ どういうことなの」

ラン・ソナムが信じられないという顔でヤマ・ツェリンを見た。

「ガンデンポタンは、インドに移ってから長きにわたりアメリカの支援を受けています。私はスパイではないですが、アメリカからの要請があれば、協力する必要があるのです」と、血に染まった足を抱えて座ったまま言った。

ということとは、この基地の情報を張春雷がつかみ、その情報を松田が東京のガンデンポタン事務所に運んだというのか。

何ということだ！

「ちよっと待ってください。『流星計画』だとか何だとか、何が

なんだかさっぱりわからない。ゲンドウン・ニマを助け出したいという話は一体、何だったんですか」

松田がヤマ・ツエリンに日本語で問い詰める。

「それは純粹に我々チベット人の象徴ともいえるパンチエン・ラマ十一世を復活させたいという願いがなされたことです。松田先生には大変感謝しています」

「では、陳さん、あなたは我々が少林寺を脱出するときに、仕組んだように助けてくれました。あれはどういうことですか？」  
今度は陳美帆に詰問する。

「あなた、今の状況がよく分かっていなくて、いろいろ言うわね。あれは、当然ダライ・ラマが残した財宝の手がかりをそのチベット青年に教えてもらおうと思ったのよ。ところが、途中で香港警察が邪魔しに入ってきて来た。そして、わざわざチベットまで

来たのよ。さらに、松田先生、あなた達までチベットに来て、あ  
るうことかここがシャンバラではないかと訪ねてきた」

「では、あなたもシャンバラが実在すると思っていたのです  
か？」

「そんなチベット人の理想郷の話など信じているわけないでし  
よ。しかし、ダライ・ラマが財宝をどこかに隠していたという  
話は、中央政府も可能性を捨ててはいないわ」  
と、ここで、ゲンドウン・ニマが口を開いた。

「陳さん、あなた達はどうして憎み合い、殺し合い、財宝の取り  
合いなど強欲に走るのですか。中国仏教もチベット仏教も同じ  
です。不善業というのは最も慎まなければならぬ。わずかな時  
間の人生を不善業で費やしたら勿体ないと思わないのですか」

「あなた、何を言っているの。ここで仏教講話でも始めようって

言うんじゃないでしょうね」とニマをあきれたように見てから、「いずれにしても、あなた達には、生きてここから出て行ってもらうわけにはいかないのよ。ただし、ここで殺したんでは後始末が大変なので、外の谷川で一人ずつ始末させてもらおう」と言って、部下と思われる男二人に縄で両手を縛るように命じた。

最初に松田とジョージ・ベーカーのところに来て、

「おとなしく後ろに手を出せ！」

両手を掴んで無理やり後ろ手にして縛ろうとする。

と、その時、グンドウン・ニマが少し動いたと陳美帆が感じた瞬間、何か蹴り上げられ、天井の電気が大きな音を立てて割れた。窓のない部屋は漆黒の闇に包まれた。松田は、縛られたまま横に転がった。

同時に、「バシッ、」という音とともに人が床に倒れる音がする。



「くそっ、電気を点けて！」

叫ぶ陳美帆の音がする。叫ぶ間もなく、「わっ、」と声かして、人が倒れる。誰かがドアに駆け寄ったと思った瞬間、ドアが開き、光が部屋に差し込む。と同時に開けた人間がドアもろとも外に吹っ飛ばされた。

「走れ！」

ゲンドウン・ニマが皆に叫んだ。

五人が開いた入口に向かってどつと走り込む。警備員のひとりが自動小銃を構える、と同時にニマの蹴りが銃を飛ばす。「バツ、バツ、バツ、」と弾を出しながら自動小銃が飛んでいき、壁に当たる鈍い音が響く。一瞬後に横長の会議机が猛スピードで飛んでいき、自動小銃を構えた三人を直撃する。陳美帆が倒れている警備員から銃を拾おうとするが、その前に銃が蹴り飛ばされる。

松田を縛ろうとした男も腹を押さえて床に転がっている。ゲン  
ドウン・ニマのあまりの強さに他の警備員もたじろぐ。

外に出たジョージ・ベーカーが「Over here! (こっちだ!)」  
と叫んで右側の通路に向かって走った。他の連中も必死につい  
て行く。ヤマ・ツエリンも左足を引きずりながら懸命に走る。だ  
が一瞬間を置いて、陳美帆が自動小銃を撃ってくる。化学プラ  
ントのような設備に弾が当たり、「カン、カン、カン、カン、」と音  
を立てる。入り組んだパイプを盾にしながら懸命に走る。先頭の  
ジョージ・ベーカーが、ひとつの大きなバルブに飛びついて体ご  
とバルブを回した。足元のパイプから白いガスが勢いよく噴出  
する。瞬く間に、一面が霧に包まれたようになった。

「こっちだ!」と叫ぶジョージ・ベーカーの声の方向に向かって  
走る。銃声がしたと同時に、入り組んだ設備に弾が当たった鋭い

金属音が響く。

ジョージ・ベーカーが、白い霧の中をさらに奥へと走っていく。横手から数人の男が自動小銃を持っているのが霧の中に霞んで見えた。男たちが銃を構える間もなく、ゲンドウン・ニマが空中に飛んでいた。自動小銃は、弾を発射することなく弾き飛ばされ、男たちのうめき声にとってかわる。

大きなタンクの前でまで来てジョージ・ベーカーが、難しいことを大声でまくし立てる。

「ここの衛星攻撃兵器はヨウ素パルスレーザーという装置でヨウ素溶液と電子ビームをつくる粒子を加速するための液化窒素がある。これを反応させて三ヨウ化窒素を作れば、爆発を起こすことができる。三ヨウ化窒素はわずかな衝撃でも爆発する」

「いくら二つの成分があっても、ここですぐに科学実験はでき

ないだろう。できてもどうやって爆発させるのだ？」

「大丈夫だ。俺はその実験を過去にやったことがある」

と言う間もなく、二つのタンクのバルブを開いた。両方のパイプから大量の液体が漏れる。ひとつは茶褐色で、もうひとつの液体は無色ではあるが白い煙を上げながら瞬く間に気化していく。が、大量の液体は気化する前に液体同志が混ざり合い、低い方に流れて行く。反応は起きない。ベーカーはバルブを慎重に動かして流れ出る液体の量を少しずつ変えていく。とその時、混ざり合った液体が暗赤色に変化した。

「離れろ！」

ジョージ・ベーカーが叫んだ。

白い霧の中を、全員が暗赤色の液体から一目散に逃げた。しかし、混ざり合った液体は床に大きく広がっており、左足を引きず

ったヤマ・ツエリンがその液体を強く踏んだ。その衝撃とともにオレンジ色の炎が起こり、炎は瞬く間に白い霧を飲み込んでいった。

## シャンバラ

液体を踏んで炎に包まれたヤマ・ツエリンは、それに続いて起こった大きな炎に瞬く間に包み込まれてしまった。他の五人には、なすすべがなかった。大きな真っ赤な炎は、ドーム全体に複雑に設置されている設備を飲み込むと同時に、何かを爆発させた。爆発によって設備の一部が崩れ落ちていった。

「おのれ、こうなったらすぐさま皆殺しにしてやる」

陳美帆は叫んで、警備の男たちに逃げた連中を包囲して撃ちま

くれ、と命令した。しかし、炎はさらに広がり、事務所や管制室にも燃え移っている。命令された男たちは、幾手にも分かれて炎の中を進んで行く。その時、さらにひとつの爆発が起きる。設備の上方部分が一気に落ちてくる。自動小銃を持った数人が落下してきた設備の轟音とともに姿が消える。

松田らは、ドーム状の空間の最深部から一刻も早く外に出ようと入り組んだ迷路のような通路を走っていた。大きな炎は大量の空気を必要としているが、入口はトンネルのみである。しかし、別のところからも空気が流入してきて、さらに炎は勢いを増した。そのとき、さらに大きな爆発があり、ドームそのものが崩れだした。天井の岩が降るようにおちてくる。炎は行く手を遮るよう燃え盛っている。もはや一刻の猶予もない。ドームの壁沿いを落下物に当たらないように走る。とその時、炎の先に陳美帆

と男ふたりが銃を構えて現れた。

「あんた達、これでお終いよ」と言う間もなく、銃を撃ってきた。瞬間にゲンドウン・ニマは、ラン・ソナムと恭子突き飛ばした。松田とジョージ・ベーカーは通路の隅の物陰に転がり込んだ。ゲンドウン・ニマは、撃ってきた相手を自分に引き付けるように通路の真ん中に転がり出る。銃は容赦なく、弾を浴びせる。が、ニマのスピードは銃の狙いよりも早く、通路の反対側の物陰に滑り込む。

「あがいても無駄よ」

陳美帆は銃を両方の物陰に向かって乱射した。物陰となっていたコンテナに弾が当たってはじけ飛ぶ。とその時、さらに大きな爆発が起こり、天井の岩が大きく崩れて轟音とともに落下してきた。

「危ない！」

松田はランと恭子の肩を抱えてコンテナーと壁の間に身を沈めた。一瞬の事であった。

身を伏せたまま何十秒かして、顔を上げたときには、コンテナーの周辺のみがわずかな空間になっており、彼らの周りは落ちて来た岩で覆いつくされていた。わずかな空間の中を見回すと、すぐ隣に倒れていたジョージ・ベーカーが埃だらけの顔で、松田に微笑んだ

「まだ生きているらしいぜ」

松田の両腕の中にいたランと恭子も、埃だらけの顔から眼を開けた。そして、

「ああ、ニマ！」

崩れ落ちた岩を押しつけながら、ラン・ソナムが泣き叫んだ。も



うニマも岩の下敷きになったかもしれないと松田も思った。

そのとき、ジョージ・ベーカーが、手のひらを掲げて何かを探そうとしている。

「生き埋めになったのに何処からか空気が来るようだな。これは、助かるかもしれないな」

確かに、わずかに空気の流れが感じられる。空気が流れてくる方を見ると、コンテナの裏側の岩壁に縦に割れ目ができていて、その割れ目からわずかな緑色の光のようなものが差し込んでいるのではないか。しかし、岩の亀裂はあっても、岩は大きくそれをかき分けるすべがない。

松田とジョージ・ベーカーは、ほのかな緑色の光を頼りに、ほかに出られる方法はないか周辺の岩を少しずつ動かしてみる。ひとつの岩を動かすと他の岩が崩れ落ちて来るので慎重に進め

る。とその時、前の小さい岩が手前の空洞に転がり込んできた。その小さな穴の暗闇の中から緑色に染まったゲンドウン・ニマの顔が浮かび上がった。

「ニマ！」

ラン・ソナムが走り寄る。

ゲンドウン・ニマが穴の周辺の岩を押しつけて、四人のいるわずかな空洞に入って来た。ランがニマの首に抱きつく。ニマもそれに応えるように抱き寄せた。

「おお、無事でよかった」

他の三人もふたりの姿に安堵の言葉を投げた。とは言え、まだ出られる方法が見つかった訳ではない。

「しかし、この不思議な光は何処から来るのか分からんが、この大きな岩を押しつけたいとどうしようもない」

ジョージ・ベーカーが悲嘆にくれた声で言う。すると、ゲンドウ  
ン・ニマが思わぬことを言った。

「おそらく、これこそシャンバラの入口ではないでしょうか」  
ほかの四人はお互いの顔を見合った。

松田もシャンバラかどうかは別として何かの糸口が見つかるか  
もしれないと思った。

「確かに、空気が流れてくるということとは、単に何かの機械か何  
かが埋もれているのではなく、大きな空洞のようなものがある  
のかも知れない。なんとかして塞いでいる岩をどけてみよう」  
大きな岩であるが、少しずつ砕けば穴が開くのではないか。崩れ  
落ちてきた岩を頑丈に支えているコンテナーの中を探ってみる。  
中には、鉄のパイプや鉄筋などが積み上げられていた。

これらの道具を使って、全員で岩肌を削っていく。少しずつ隙

間が大きくなっていく。全員が汗まみれになりながら岩と格闘して長い時間が過ぎた。そして、最後にゲンドウン・ニマが大きな鉄筋棒で渾身の力で叩くと、割れ目の付いていた岩が反対側の空洞に向かって崩れ落ち、人が通れるくらいの隙間ができた。

緑色の光が差し込んでいた空洞に、全員が足を踏み入れた。

「おおっ！」

歓声が上がると。

そこには、薄暗い緑色の光が満ちた空洞が遙か下の方に向かって広がっていた。それはまるで深い海底にいるような不思議な感覚を覚えた。すぐ前には荒野のように岩肌が覆いつくしているようであるが、遠くの方に幾つもの黄色い点のような光が見える。薄暗く、この空洞がどれほどの大きさなのか想像もできな

い。これがシャンバラなのか。

ゲンドウン・ニマは迷うことなく、薄暗い斜面を下りて行くようにする。ラン・ソナムは一瞬立ち止まったが、ニマの手を取りに走り寄る。

「俺は、こんな薄気味悪いところに踏み込むのはいやだぜ。もう一回埋まった通路を掘り返してみる」

そう言って、ジョージ・ベーカーはドームに向かう方の割れ目に戻って行った。

「ここが伝説の『シャンバラ』なのかもしれない。しかし、この下の方に続く空洞に踏み込んで外に出られるとは思えない。やはり、我々ももう一度、通路を掘り返してみよう」

松田が恭子にそう言うと、それに恭子は黙ってうなずいた。そして、ゲンドウン・ニマとラン・ソナムの背中に向かって、松田が

大きな声で言った。

「我々は、やはりドームへ続く通路を掘り返してみる」

ニマとランは振り返って、

「私たちは、シャンバラに行つて、チベットの安寧をお祈りしてきます。これは私たちに与えられた運命です。さようなら」  
そう言つて、斜面をゆっくり下つて行く。

「さようなら、ご無事で」

松田と恭子もそれに応えるように手を振つて見送つた。

人は人生の中でそれぞれ、なさねばならない運命を背負つていくのかもしれない。しかし、その運命を、確信を持ってそれだと言える人は少ない。彼らの命運を祈るしかないと思つた。

元のコンテナのところに戻ると、ジョージ・ベーカーが上の

方に手をかざして空気の流れを探していた。

「上の方からも、空気がわずかに流れ込んでいるようだ。ドームの屋根は、開閉するようになっていたはずで薄く作られていたはずだ。上の方の岩を除けば出られるかもしれない」

松田らは、手分けして上側の岩を少しずつ取り除いていった。うまく取り除かないと、崩れ落ちて埋まってしまう。ひとつ取っては、それを足場にしてもう一つを取る。上に向かって、わずかなすき間を作る作業を慎重に進めて行く。そして、三時間ほどたったであろうか、わずかに岩のすき間から星がきらめいているのが見えた。

「やったぜ！」

ジョージ・ベーカーが歓声を上げた。松田と恭子も、なんとか助かったと、一瞬体から力が抜けそうになった。

崩れ落ちた岩の塊の上に出ると、ドームの屋根が崩落して、中  
にあった巨大な設備を覆いつくしていた。ただ、周辺の壁の多く  
は上の方まで残っている。この壁が崩落しなかったおかげで壁  
際にはいくらかの空洞ができて押しつぶされずにすんだのかも  
しれないと思った。

星空の下に広がる広大な瓦礫の上を歩いて、壁をよじ登れそ  
うなところを探した。そして、瓦礫から壁を少し登れば外の岩山  
に続いているところを見つけた。

恭子を押し上げるようにして壁を登りかけたとき、「バツ、バツ、  
バツ、」と銃声がして弾が岩に当たる音が響く。

「くそっ、何というしぶとい奴らだ。まだ生きていたのか」  
下の方で、ジョージ・ベーカーの声が聞こえる。恭子がまず先に  
岩山までたどり着く、とその時、



「わっ、」

「くそっ、足をやられた、」

ジョージ・ベーカーが叫んだ。

弾が飛んでくる中、松田はジョージ・ベーカーを引っ張るようにして壁の上まで渾身の力で上がった。ジョージ・ベーカーの肩を支えながら、三人は岩山を転げ落ちるように下りて行く。暫くすると、入口の前に広がっていた広場が見えた。広場には灯りがついている。灯りを目指して岩肌を必死で走る。やっと広場の隅に降り立つ。駐車スペースに車が何台も停まっている。車に走り寄るが、当然キーは付いていない。そのとき、ジョージ・ベーカーが、駐車スペース脇のコンテナの扉を、そばに転がっていた鉄パイプでこじ開けた。中に入ると、扉の横の壁に幾つものキーが並べてかけてあった。そのうちのひとつを取って、アンロックボ

タンを押すと、何台も並んでいた車のひとつのスマールランプが点灯した。すかさずランプの点灯した車に走り寄る。松田が車のキーをジョージ・ベーカーから受け取り、ゲートに向かって急発進させた。そのとき、バックミラーに銃を持った三人が岩山から降りて駐車場に走ってくるのが映った。急発進させた車は、すぐにゲートに迫る。ゲートは閉まっている。かまわずゲートに突進する。ゲートは蝶番が壊れて、扉がはじけ飛ぶ。

松田は、暗い道路を必死で運転するが、暗闇の上に、曲がりくねった悪路でスピードが出ない。そのうちに後方から来る車のヘッドランプの光がバックミラーを照らした。松田は、脂汗が全身に出てくるのが分かった。

「追いついて来たわよ！」

隣に座っている恭子も、後ろを振り返って叫ぶ。

しばらく、走ると見覚えのある三差路が見えた。来た時に農夫に道を聞いたところである。そのとき、ジョージ・ベーカーが、

「右へ行け！」と後ろから大声で言った。

「右へ行ったら、また山の中に入って行ってしまおう」

「大丈夫だ、俺の言う通り行ってくれ」

言われた通り、右側の道路に入る。と、曲がり角に標識があり、これが昨日走ってきた県道二〇四号だとわかる。ただし、道はシガツエとは反対にどんどん南に向かっている。空がわずかに白み始めてきた。後ろの車はさらに距離を縮めてくる。そのとき、後ろから銃を撃ってきた。後ろのトランクに弾が当たった音がする。恭子とジョージ・ベーカーは、必死で身をかがめる。松田も身をかがめながらさらにスピードを上げる。

さらに空が明るくなって、東の空が赤く染まってきた。これで

は、標的がはつきりしてきて、このままではやられてしまうと思った。咄嗟に、松田は急ブレーキをかけた。

「前につかまれ！」

松田が大声で叫んだ途端、後ろの車がトランクに突っ込んできた。

「ガシヤツ、」と大きな音がして、車が前に押し出された。後ろの車はボンネットが大きく曲がり、煙を出している。松田は、急発進したかと思うと、猛烈なスピードでバックした。再度、トランクが後ろの車のボンネットに激しく衝突した。後ろの車のボンネットから炎が上がる。しかし、衝突の衝撃でエンジンが止まった。エンジンをかけようとキーを回すがかからない。後ろの車が炎に包まれようとしたとき、陳美帆と男ふたりがドアを開けて転がり出た。怪我をしているようだが生きているようだ。必死

でキーを回す。

「かかった！」と思ったとき、何発かの弾丸がフロントガラスを貫通していった。タイヤから煙が出るほどアクセルを踏んだ。車はふらつきながら猛スピードで発進した。後ろで、陳美帆が何かを叫びながら撃ってくる。しかし、すぐに陳美帆の視界から松田の車が朝焼けの山影に消えて行った。

陳美帆が追ってこないことを確認してから、さらに県道二〇四号を南下していく。

「どこに行こうとしているのだ？」とジョージ・ベーカーに聞くが、

「大丈夫だ、そのまま真っすぐ行ってくれ」と言うのみである。そして、曲がりくねった山道を二時間も走ったであろうか、遙か

前方に大きな湖が見えて来た。

「そこを右に回って、湖畔の道路に入ってくれ」

ジョージ・ベーカーに言われたように車を進める。すると、長い直線道路が走っており、途中に小さなセスナ機が止まっているのが見える。

「あのセスナ機まで行ってくれ。これでチベットとオサラバできるぜ」

ゆっくりと近づいて行って、セスナ機の後ろに車を止める。先にジョージ・ベーカーが足を引きずりながら車を降り、セスナ機に近づいていく。するとセスナ機のドアが開き、人が降りて来た。

「やあ、ルワン、予定通りだったな」

出て来た人間にジョージ・ベーカーが微笑みかける。その人間を見て、松田と恭子は、

「ええっ、」と驚嘆の声を出していた。

それは、少林寺の宿舎で同室だったルワン・バンダラナイケであった。たしかネパールの中学校の先生ということだったはずである。一体どうなっているのかと啞然として見つめる。

「学、びっくりしているようだな。僕はCIAなんかじゃない。ただジョージの手伝いをしただけだ。安心してくれ。連中は世界のどこにも仲間を用意している。それだけのことだ」

ルワン・バンダラナイケは淡々と言った。CIAと言う言葉を聞いて、さらに不審が募ったが、それ以上追及するのをやめた。最初に少林寺で会ったとき、二人が何か深刻そうに話していた記憶がよみがえったのだ。

「学、そんなに心配するな。これから我々と一緒に君たちをカトマンズまで運ぶ。カトマンズからはバンコックやシンガポール

までいくつもフライトがある。好きなように東京に帰ってくれ」  
ジョージ・ベーカーが柔和な顔をつくって二人に言った。

セスナ機はルワン・バンダラナイケの操縦で飛び立った。すぐに深い緑色の湖が眼下に広がる。操縦しながら、湖は「錯母折林（ツオモグラムリン）」という名前だと言った。さらに高度を上げると、遠くまでチベットの山岳群が広がって見える。そのとき、松田は目を見張った。湖のすぐ北に例の首飾りの地形があったのだ。恭子もすぐに気が付いた。

「あれは、あの岩山だわ」

窓に顔を付けるようにして見入っている。

松田は、あの『シャンバラ』かもしれない深緑の光に満ちた地下空洞はひよっとしてこの湖とも関係しているかもしれないなど



想像した。

見渡す限りに青空が広がり、快適な飛行が続く。左側にひときわ高い世界第三位のカンチエンジュンガが見える。

「もうすぐ右側にエベレストが見えて来るぜ」

ジョージ・ベーカーが松田に言ったが、何も返事がないので、後ろの座席を振り返る。松田の頭が恭子の顔を覆っていて、恭子の腕が松田の背中を抱きしめている。

「お幸せなことだ」

## エピソード

松田と恭子は、バンコック経由で東京に戻った。わずか二週間ほどのことであつたが、何度も命が危うくなる大冒険であつた。

しかし、それを誰かに話しても容易には信じてもらえないだろうと思うと同時に、もし口外したら中国から確実に狙われるだろうと考えて黙っていることにした。

そして、一週間がたった時、インターネット上に、

『仏像が光るーチベットの寺でー』という題の記事が出た。記事には、「最近チベットの多くの寺で仏像が異様な光を放っていることが話題になっていいる。特に、タシルンポ寺の大仏は、金色に薄緑色が加わった光で、ある人は何かの天啓ではないかと話している。また、これはチベットの人々が中国の圧政に苦しんでいるのに対して、仏が慈悲を与えようとされているのではないかと話す人もいいる。．．．．．」とあった。

それを読んで、松田と恭子は顔を見合わせ、ラン・ソナムとゲンドウン・ニマのことを思い浮かべずにはいられなかった。数奇

な運命を背負った人がいるが、それを受け入れて、さらに待ち望む人々のために命をかけて尽くすという崇高な精神を持って実行できる人は彼らをおいてないのではないかとラン・ソナムとゲンドウン・ニマの澄んだ優しい目が遥か空の向こうに見える気がした。

そして、『シャンバラ』で祈りをささげた後、重慶の母親のところに戻ったに違いないと思った。

完